



アラン

ノルマンディー
のプロポI
(上)

翻訳 高村 昌憲

発行の辞

はしがき

序

一 野羊

二 （オリオン座）

三 心理学者たち

四 人間の魂を持った犬

五 猟師と犬

六 知性

七 懐疑

八 （ニュートンの話）

九 真の共和制

十 本質

十一 食堂の匂い

十二 誠実さ

十三 若者

十四 素朴な信仰

十五 光の祭典

十六 テンペスト

十七 観念の流れ

十八 室内遊戯

十九 猫の思考

二十 夢遊病者たち

二十一 形而上学

二十二 ノイローゼ

二十三 完璧な宇宙

二十四 祈り

二十五 事故（必然性）

二十六 （可能事と不可能事）

二十七 （伝統による正しさ）

二十八 歴史の一頁

二十九 星々の規範

三十 天文学

三十一 （潮の動き）

三十二 ラジウム

三十三 エネルギーの低級化

三十四 （野菜の皮）

- 三十五 (青い花の記憶)
- 三十六 キヅタの葉
- 三十七 (蚕の話)
- 三十八 ダーウィンに従って
- 三十九 葡萄の木の波
- 四十 ダーウィンの魔法
- 四十一 自然の力 (労働)
- 四十二 帆船の力
- 四十三 馬と犬
- 四十四 動物の群れ
- 四十五 悲しいマリア
- 四十六 情念の力
- 四十七 思考と情熱
- 四十八 ドン・ファン
- 四十九 剣の舞
- 五十 榆の木
- 五十一 雄弁
- 五十二 慰め
- 五十三 勝利
- 五十四 行動する人間
- 五十五 ジムは競馬で賭ける
- 五十六 商売
- 五十七 (熟練した販売員)
- 五十八 雨の中で
- 五十九 戦争だらけ
- 六十 礼儀作法
- 六十一 盲目の愛とは?
- 六十二 家庭で
- 六十三 (船に乗り遅れた人)
- 六十四 (情熱の言葉)
- 六十五 (自殺)
- 六十六 恐怖心
- 六十七 同情に反対して
- 六十八 恋人ザディーグ
- 六十九 酩酊者たち
- 七十 (他人の苦痛)
- 七十一 裸婦たちと豚
- 七十二 (恐怖と宗教)
- 七十三 (ジジェの指輪)
- 七十四 園芸と教育学
- 七十五 (理性)

七十六 (職人の仕事)

七十七 子供たちの庭

七十八 (最も愚かな本)

七十九 蓄音機

八十 蒸気機関車を愛すること

ALAIN

**PROPOS D'UN
NORMAND**

1906 - 1914

I

nrf

GALLIMARD

アラン「一ノルマンディー人のプロポ」の表紙

発行の辞など

発行の辞

これらのプロポは、殆ど全てが毎日即興的に書かれて、新聞の散文となって翌日には全て消えて仕舞う運命にあった時に、熱心な読者たちが、その中で最も共感したものを幾つも保存していた。そんな風にして一九〇九年から一九一三年までに『アランのプロポ一〇一篇』四巻が予約出版された。限定版であった。今では殆ど直ぐには手に入らない貴重な本となった。

部分的ではあるが「はしがき」をここに再録してあるが、それは第一巻の『アランのプロポ』の選集の普及版に入っているミシェル・アルノー（マルセル・ドロアン）のものであった。彼は出版社の「フランス新評論」から一九二〇年にそれを上梓させた。二巻のうち各巻は、同じ配列で一七五篇のプロポが入っていて、二冊とも別々に分かれているが似ているように作られている。

ここに、正にかの第一巻を殆ど修正することなく再版することとなった。しかし、プロポのもっと多くのを忘れないために、そしてアランが何時も何よりも好んでいた年代順に書いていったように、この巻の次の第二巻後は一九一四年前のプロポで最良のものを、書かれた順に再録して、次々と新しい形で出版したシリーズとなるように決定された（この巻には、それらのプロポとは別の、よく知られているものが収録されている）。それらのテキストの大部分は未刊のものである。シリーズ全体の表題に関してはアランも賛成したものと思われ、大戦前（一九〇六年～一九一四年）の幸福な時代に、日に日に書かれてきたそれらの初期のプロポに相応しいものばかりである。それが『一ノルマンディー人プロポ』である。ここにあるのは大変に無駄を削って、春のような力に溢れたものである。それらは青春と平和である。

M. A.

はしがき

『一ノルマンディー人のプロポ』は、一九〇六年二月十六日から作者が戦争に志願した日である一九一四年九月一日まで、ルアン新聞に毎日公表したものである。全篇では三〇九八篇のプロポになる。

一度印刷されたアランの作品は皆のものである、と彼は考えている。十分の一のプロポしか納められなかった選集の主要作品を彼に委ねて、私たちはそこに彼の思想のあらゆる傾向や様相を見付けて欲しいと思う。それは作者に対して綿密に書くことを求めることであるが、読者に対しても同様に綿密に読むことを求めており、そのことによって彼が言いたいことを一番よく知ることが出来て、彼の反論の始まりが何処であるかを見付けることが出来るのである。

作品の配列は、今私たちが選択することよりも多くの苦勞を与えていた。それらの作品は、全てが時宜を得た時や気分によってその日その日に書かれていた。同一人物に読まれても、一人ひとりが別々に考えるために創られている。しかしながら、彼らの中の或る人々は、何週間も何か月も何年も共感し続けていた。自分の気持ちに近いと、彼らは明晰さと正義と力強さを手に入れる。一緒に読み返せば読み返す程、そこから独特な独創性による思想の確かさと自然の儘の関係や結び付きがより良く見分けられるのである。そのことを引き出ししながら、私たちはその喜びを隠蔽しなければならなかったのだろうか？ いいえ、そうではない。その整理は弾力的で、自分の義務としないで、与えるだけで十分である。あなたは発行者の意

見に従って大変気楽に繰り返し読んで、アランの考察の流れを最後の端まで追って行くのは自由である。

作品の配列は、二巻の時と同じである。各巻は全体では僅かであるが、それ相応で様々である。自然の法則、科学の条件、精神の治安とそれをもたらす情念が第一義的なものとなっているが、それに反して社会の現実と行動の問題についての考えをもっと開示することは第二義的なものになっている。

ミシェル・アルノー

一九二〇年

序

アルキメデスは自分で計算し設計したから、新しい型のカタパルト（石弓）のような物を作り出しました。職人たちはこの機械を作る目に、それを作ろうとしている狂人のようなアルキメデスを笑い、次のように言いました、「重い物でも、長い距離でも、それは投げ飛ばすだろう。そして、子供が目隠ししていても出来るだろう」。けれども経験主義者は、町が作られてからずっと使ってきたカタパルトに似ている別のカタパルトを作りました。彼は言いました、「カタパルトを作るなら、こういう物です」。そして、彼の周りの者たちも頭を上下に振って納得していました。二つの武器が発射させる準備は同時に整い、城壁へ引かれて行きました。アルキメデスが作ったカタパルトは偶然にも、相手が発射した重い石が当たって調子が狂い、壊れて仕舞いました。でも、誰も驚きませんでした。そして、経験主義者が作った昔ながらのカタパルトが皆に認められるようになりました。何世紀もの間、既に作られてきたのはこの型のカタパルトだったのです。

アルキメデスは、自分が作ったカタパルトの方が威力があることを人に向かって話したり、何通も手紙を書いて証明しようとしたりしましたが、誰も耳を傾けませんでした。アルキメデスがこのことを問題にしなくなると、幼い子どもたちはそれに興味を示して近づき、何世紀もの間にアルキメデスが作ったカタパルトの形を真似た石蹴り遊びを生み出しました。つまり石蹴りという行為が、思想を認めたものになったのです。

私はここに石蹴り遊びの線を引きました。もしもこれを読むあなたが心に語りかけてくるものがあるなら、直ぐに石蹴りの石を蹴って前進して下さい。

一九〇七年十一月三十日

ダナオスの王女たちは、穴の空いた樽に水を注ぎ入れました。私は昔からあるこのイマージュを進んで思い描いています。彼女たちは三人です。一人は壺を置いてから手足を伸ばし、二人目の王女は樽の上に身を傾け、水を入れてから希望と懐疑を抱いている様子で見詰めていて欲しいと私は思います。しかし、三人目の王女は水を運んで来ますが、歩いて水を運んで来るのがとてもとても幸せそうであるように私は望んでいます。何故なら、自分が行う行為以外のものを人間たちがこの世で愛することを信じるのは狂気じみているからです。それは穴が空いている樽にとっても困ることです。

かくして余りに有名な昔からのイマージュは、よく引き合いに出され通行人たちが踏みつけたようにぺちゃんこになっていますが、王女たちをじっと見ていると、壁から少しずつ出て来ます。しかし、観念というものは平らな絵であり、譬え手で触るようにじっと見ても平面的です。人間たちはそんなことを余り心配しません。何故なら言葉で言うことが出来たからです。何かをうまい調子で理解したならば、人間たちはそのことについて最早何も考えず、ダイオスの王女たちのことを気に留めることはないでしょう。でも樽の底をよく見て下さい。昨日考えたことを思い出して下さい。あなたはそれを財布の中のお金のようによく隠しました。しかし、それは悪魔の財布です。あなたの財布には銅銭のコインが入っているだけです。

あなたは驚くでしょうか？ あなたは毎日パンを食べますが、自分の希望や物事を神聖に見て大切に育てたくありませんか？ あなたはそうなりたいと思います。そして、自分の裡に希望を持つことが理解できないのではありませんか？ さあ！ 自分の樽を長く見てはなりません。樽の中に幾つかの渦巻を見ても、多分少しの砂を見るだけでしょう。でも私のようにやって下さい。さあ！ 穴の空いた樽に水を入れて下さい。

一九〇九年十月二十六日

アラン

一 野羊 (MOUFLONS)

一群の野羊を見て、パンの皮を堅くするために叩く角が沢山あると思ったときに、賢い老人に出会いました。老人は私を猿の方へ連れて行き、それから鱈の方へ行きました。途中で、私たちは翼に褸のある頭の禿げた禿鷹、オウム、鶴、ライオン、熊たちを見ました。鉄格子に沿って辻馬車の馬の祖先を見ましたが、筋肉隆々で背は低いです。続いて、大変に端正な縞馬、学者たちがアジアノロバと命名している飼い馴らされていない赤毛のロバを見ました。ラクダの歩き振りを注意して良く見てみると、毛並みは手入れがされず、異国風の雰囲気があり、透明でなく深みのない眼をしています、空はオレンジ色の色彩をしていて、突風が梢を撓め、大粒の水滴となった雨がラクダの眸の中を流れています。子に乳をやっていた母親は駆けずり回り、雨の匂いが野生の匂いと混じり合います。私たちは西洋杉の処まで逃げなくてはなりません。次の話は、私たちが雨宿りをしているときに、その老人が語ってくれた話です。

老人は言いました。「あなたと同じように、私も動物たちの珍しい色や形を見て、眼を楽しませようとやって来ました。しかし、偶然にも私たちに見せてくれたことは、動物たちの能力と同時に俄雨のお陰で、カモシカの角や野生のロバの尻にも一つの存在理由が与えられていたことでした。動物たちのこれ等のものが、どのくらい力があつたのか明らかにされ、そして役目を終えたのか、あなたはご存知でした。動物たちの角や尻は未完成で、まだ下絵程度のもつと見る考えはとんでもないものであり、そのような思想は欠陥人間のようなものです、反対にそれ等の動物たちは自分たちの型を確立しており、今は休息しているようなものなのです。それ等の動物たちの各々は、自分自身にとどまっていますが、その意志は今の儘の自分を維持させ、そして各々の動物たちが自分を再生させようとする別の新しい意志の前兆となるものでしかありません。野羊の子供たちは、既に自分の生命を完全に形成しています。そのことは如何なる者でも疑えないことです。これは其処にいる動物たちすべての教義であり、定理です」。

老人は少し考え、そして更にこう言いました。「動物たちは神によって私たちに与えられたが、それは私たちの悪徳と受難となる支配力を理解させるためである、とプラトンは教えました。野羊そのもの、ラクダや猿や禿鷹たちの中に、他の神々がいるとは殆ど信じられません。動物たちが私たちに与えている教訓は少しも役に立ちません。動物の思想というものがあるなら、私たちが満足する動物の思想とは、動物たちが生きた立像のようなものです。動物たちはすべてが檻の中にある訳ではありません。人間の顔をしているひげを生やした野羊は何匹いるのでしょうか。私たち人間の中に、頑固な馬やラクダは何頭いるのでしょうか。彼らが大変若い頃は、少しは優雅で詩人でしたが、直ぐに石化して自分自身を固めて定義し、その後は何時も同じリフレインを反芻しています。餌と同じものがあると安心し、別物には耳を傾けようとせず、我が道を行き、考えることと言ったら快樂と苦痛に関して寄せ集められたものばかりです。これ等の動物たちから、人間についての本当の心を私は思い出しました。自分自身のことを考えるのは出来るだけ少なくして、現実のことを考えることです」。

(一九〇九年四月二五日)

二 (オリオン座)

もし夜の十時頃にあなたが家に帰って行くとき、昼のように明るくあって欲しいと思ってもそれは不可能ですが、もし晴れて明るい夜なら、大空を跨いで少し傾いているオリオン座の姿を見ても、驚くことはないでしょう。その左九十度の処に、肩から掛ける負い革の鋏のように光る三つの星がありますが、三つの鋏は狩猟用のナイフの鞘を表していて、全てが権威に溢れています。そこからは何か冷酷で厳しいものが示されています。しかし、それは何でしょうか？

〈冬〉なのです。夏も終わることなく何時でもやってくると信じられています。木の葉が赤くなる十月はまだ温和な感じがあります。夏の星である牛座のアルファ星・真珠星、鷲座のアルファ星、琴座のアルファ星・ベガは温和な感じがするのがよく分かり、日が沈む頃には次から次に滑るように空に上がって来ます。けれどもそれらの星々は何度も人は探し、どれなのか迷い、塵のように無数に輝く星々に訳が分からなくなります。しかし、オリオン座は冬の厳しさを告げる前兆です。私は秋の初めの朝三時頃に窓のカーテンを開けると、突然に別世界を見たのを思い出します。それはよく知っていたことですが、すっかり忘れていました。大犬座の主星シリウスに引っ張られるようにして冷たく光る夜空の天頂までオリオン座が昇って来ます。私は生ぬるい気持ちの日々を弄んでいました。オリオン座は季節の秩序を喚起してくれました。それは冬の三ヶ月間を暗示していました。それは雪や氷の〈誕生〉でした。羊飼いに何かを告げるものです。

もっとよく読んで下さい。そこには一通の手紙しかありません。一瞥して大空の全てを読もうと試みて下さい。あなたは氷で出来た偽の顎髭を〈野生の猟師〉から引き離さなければなりません。あなたの足元や思考を氷らせる寒さに気を付けなさい。再び寝て考えなさい。オリオン座は大空を毎日通り過ぎます。あらゆる星々が毎日そこを通り過ぎます。あなたが好きなベガも同じように通り過ぎます。太陽は日に日に東の方から出る時刻が少しずつ遅くなり、或る時は他の星々を見えなくします。オリオン座は歩き出しません。オリオン座はこれからもずっと何時も立っていて、何時も昴の後を付いて行き、何時もシリウスを引っ張ります。そして、現在は毎朝姿を消して仕舞いますが、一年中滑るように進んで行き、直ぐに夕方には姿を現して王様のように光り、直ぐに太陽によって姿が見えなくなります。

従って本当の秩序にまで私が達したならば、そこで私は〈野生の猟師〉の肩の上方を見ます。霧氷と雪と氷を超えたものです。私が見るのは既に再び昇って来た太陽で、日は更に長くなり、二月の光は強く、俄雨や春の霞になります。今、オリオン座は別人のようにその車輪の向きを変えているかのようです。私が見ているのは、それとは別の夏であり、その車輪とも繋がっています。しかし別の人間たちのためにも繋がりが始めます。私はそれを見ます。殆どそれを感じています。私はそれを今年の冬の中に感じ、私の思考はそこから冬を引き離します。そこでは如何に科学が全てのものと結び付き、恐怖にも希望を結び付け、そして暑さによって寒さを和らげます。そのことは私が野生の〈オリオン座〉から逃げ出してベッドの中の心地良い暖かさが、何ものにも変えられないと言いたくはないのです。

(一九〇九年十二月二四日)

三 心理学者たち (LES PSYCHOLOGUES)

思想史において、現代は心理学者の時代になるのでしょうか。そして、心理学は対象となるそれ自身を観察することにある、とあらゆる入門書で言うておりますし、世の中の人々は皆そのことを知っています。学生たちは十八歳になると心理学を勉強しますが、実際には大変に退屈なものです。学生たちは機械的に展開されていくようなはっきりとした理論の方が好きなのです。しかし、小説は夢想的で明白でなく、自己満足という小径に学生を連れ込みます。小説は全てが心理的で、最高傑作は全てが悲しい話です。事件によって悲しいのではなく、自分自身のことを繰り返し言うことが悲しいのです。「私は何を愛しているのか？ 私は何を憎んでいるのか？ 私は悲しいのかあるいは陽気なのか？」。想像上の病気は何時も何か一寸した病気を発見することになり、その注意力を増大させていきます。私たちには、憂鬱に陥ってより一層気分が良くなる〈想像上の不幸〉というものがあります。何故でしょうか。それと言うのも、それは私たちの思想ではないからです。問題なのは行為であるからです。もしも勝手に行為させる儘であったら、それは最早、思想ではなく幻想であり狂気です。要するに人は自分自身を静かに考えるならば、瞑想することは愚かであり、奴隷です。つまり思想というものには、自分を静かに考えない理由はもたず、悲しいことはなく、幸福感さえあります。

対象を見ようとするとき、私は考え、そして考えている自分を見つめます。考えるには何と良い方法でしょう！ そのとき思想は人が言うように、共同組織に繋がっていきます。私は夢から夢へ向かいますが、そんなものは混乱であり、騒動であり、支離滅裂なものです。当然です。何故なら、思考することとは訂正することであり、立て直すことであり、整理して秩序立てることであるからです。同様に、もしも事物を見ることだけが問題であるなら、私は姿を現しているものだけでは決して満足しません。それははっきりと見ることが出来ない漠としたもので、色々な色をしています。それは一本の道であったり、何本もの木です。例えば惑星系のように眼に見えない対象をじっくり考えることが問題であるなら、そのとき全てが混乱するのは自然です。観念の集合によってあらゆる神話が踊り出し、幾つものイメージが表れて、これらの古い天体のカードに古代人は星々から人間の姿を見るのです。夢想は、夢想そのものによって不条理です。思考しなければなりません。各々の惑星は、その軌道の上に置かなければなりません。記憶は、物事の真実に従って整理されなければなりません。かくして思考の機能が明らかになります。思考の中にあるものを観察することは決して重要でなく、事物の中にあるものに従って思考を整理することが重要です。それ故、今の儘の心理状態を決して受け入れる必要はありません。心理状態は作るべきものであり、作り直すべきものです。あるいは上手に行動すべきものであるか、上手に眠るべきものです。半睡の夢うつつの状態は、たちが悪いものです。そこには現実の心理学的精神のための第一章の始まりがあります。

思考する人間の最も良き手本として、私はヘラクレスをあげます。決して力が強いからではありません。逆説を言っているのでもありません。この世の中で役に立つ変化を何か与えるためには、その対象を思考しなければなりません。自分を無知であるとか無力であるとか考える者は思考が下手であり、悲しみによって自分を罰します。しかし、所属する集団のことを思考することは、ヘラクレスの本当の思考であり、怪物を殺すことです。情熱を持ってはっきりとさせることです。悲しみを思考することとは、悲しみを反省し立て直すことです。憎しみを思考することとは、憎しみを反省し立て直すことです。欲望を思考することとは、欲望を反省し立て直すことです。もしもあなたが鋤を持っているなら、大地を掘り起こさなければなりません。もしも自分の思考を道具にするなら、そのときは良く考えて自分自身を反省し立て直すことです。心理学は思考を鍛えるのに向いていません。鏡の前で顔をしかめる子供と同じで、自分自身を反省し立て直すことはありません。

(一九一三年四月四日)

四 人間の魂を持った犬 (LE CHIEN QUI AVAIT UNE ME D'HOMME)

或る日、ジュピターは間違いから、今まさに生まれようとしていた犬に、人間の魂を与えました。その犬は、先ず犬の本能から分かったことは、自分の体が全て出来上がっていたことでした。従って彼は、母親の乳を飲むのが教わらなくても大変上手でした。やがて犬としての記憶の助けもあって、彼は敵の攻撃を躲して食べ物を食べることを少しずつ覚えていきました。予測しがたい一撃に対しては不規則な不安に陥りましたが、経験によって幾つかの防御を覚えました。大地に腹部をぴったりとくっつけるようなことであつたりしますが、それは最も痛さを感じやすい部分である腹部を打ってくる鞭の一撃から身を守ることでした。彼は主人の両手にある良い匂いを放っている食べ物を嘗めることもあり、恭しさと同じくらいに人なつこい犬と思われていました。この様にして犬としての魂のみによって彼は話をする事と、嘘をつくことを同時に覚えました。

間もなく彼の予測は家の入口を越えていき、大声で怒鳴る時に叩く人と、逃げて行く人を区別することを知りました。弱い人を脅したり、力ある人に阿ることを知るや否や、彼は番犬として昇進したことを確信しました。彼は鎖に繋がれていませんでしたから、犬として大変恵まれていて、最も力強かった時は噛み付き、ゴミを漁り、餌を見付けて利益とし、人との出会いを愛し、そして思い残すことなく眠って、恐い時は吠えて脅しました。或る日、彼が自分の尻尾の後ろを吠えてくるくる回っていた時、人間としての魂が目覚めました。自分自身を噛もうとしていて、何故そうしなかつたのか、彼は突然に分かったのです。「私は動物でしかないのか？」と自問しました。

その自問が理性ある者となり、犬として認識する者となり、他の犬のことに気付く者となり、そして自分自身のこととして感じる者となったのです。その時、既に彼にはもう他の犬を噛むという行為はありませんでした。実際に彼は何でも食べて我慢します。何故なら痩せた犬は鉄柵を通してそのことを見ていたからです。しかし他の犬たちは、このことを軽蔑していました。彼は他の犬たちに教えてあげたいと思っていましたが、彼らは次のように言いました、「もしあなたが他の犬たちよりも賢いのなら、スープを飲む時にそのことを証明して下さい。分け与えられる者は弱い者です。弱い者は愚かです」。この結論は彼も納得いくように思いました。それというのも彼は大きいし強かったからです。しかし、この推論は愚か者のように思われました。彼はもう自分のスープを何時も見張ることはありませんでした。時折、彼は外の世界を見ていました。この犬は人間の魂を持っていたこと、そしてニュートンが或る日昼食を忘れたことも忘れてはなりません。

結局のところ犬たちの愚かさは、彼らが生んだ奴隷として仕事にあることを理解したのだと思います。そして反乱に着手するために、彼は奴隷たちに訓示して演説しました。しかし人は奴隷状態が一番良いのだと証明してみせました。空腹で死にそうになってさ迷っている二、三匹の犬のことを例に挙げました。「もしあなたが最早飼主でないとするなら、誰が食事を与えるのですか？」と老人たちは言いました。犬たちは答えを聞くこともなく、大急ぎで家へ逃げ込みました。何故なら入口が閉まる時間だったからです。幾つもの試練の後に最後に彼が知ったことは、一匹の犬は人間の魂を持っていても、何も行うことが出来ないということです。そして、彼はそのことをジュピターに任せることにしたのです。

(一九〇八年十一月四日)

五 獵師と犬 (LE CHASSEUR ET SON CHIEN)

思考する機能は、何時でも何かを乗り越えることにあります。判断することは、二重の意味で美しい言葉です。二かける二は四であると人は考えます。妬みは軽蔑すべきものであると人は考えます。民衆の奥深い叡智は、言葉となって示されており、輝かしい思想に導いてくれます。判断することとは、何時も固く決意し、規則を決め、人間の秩序に従って権力を規定し、動物的なものを調教することであり、それは気を遣うことであり、機嫌も取る筈です。

獵師の過酷さには、大変な教訓があります。獵師が犬を愛していることは誰でも知っています。しかし、この愛は決して誰にも譲れないもので、彼は支配者です。「愛する者は、厳しく罰する者でもある」。これと同様に、犬と人間の間にも誠意があることを理解することです。人間は、眼に見えないヨーロッパやまうずらへ、真っ直ぐに走っていく優れた本能を持った犬の聡明さを良く知っています。獵師は犬の後に付いて行くのでしょうか。しかし、犬を愛しているという可愛い娘と獵師の場合とを比べて下さい。彼女は四本足の犬が好きなのであり、犬の愛を犬へ返して溺愛します。獵師は感情にぐらつくことなく、しっかりと立った儘です。獵師は犬を支配します。叩くこともあります。尻尾の動きとは何も関係ありませんし、平伏するでもなく、気を遣ったおべっか遣いでもなく、何事にも耐える忠誠心でもなく、勇気でもありません。犬という動物が甘えた仕草をしても、大地を蹴って走るのが遅くなることはなく、その支配は善意であり、哀惜であり、絶望であり、陰鬱な悲しみであり、情熱による雄弁というものであり、全てが感情の宝です。全てそれは〈判断〉によって祈り、立て直し、取り消されていくものです。〈判断する者〉、それが獵師です。

その時の犬を観察して下さい。特別な許可を貰って、休息する獵師の足の間で犬は座っています。大変厳格な主人を、犬は大いに自慢しているのです。何と犬は自分の目的と場所をうまく見付けたことでしょうか。この犬の誇りは主人に従うことであり、スープや雌犬を望むようには決して望んでいません。この犬は、犬としての自分の役割を愛しているのです。鉄砲と同じように道具でしかないものであっても、支配している権力者を愛しているのです。犬と人間の関係は、如何にして両者の情熱が高度な秩序に結びついているかが解ります。この強制から自然な関係を取り戻すことになれば、より一層満足することでしょう。

自然に考えることとは、犬のようになることです。それを愛するには一つの方法があり、最も低次に向かう思考を齎します。例えば退屈している詩人です。詩人は印象やイメージや一連の言葉といった、自ら提示していくものを全て採用します。詩人は、自分の愛する自我の花を咲かせるのを眺めます。彼は自我を愛しているのではありません。もう少し自我を愛しなさい、と私は言います。姿を表してくる考えを立て直し、支えなければなりません。はっきりと分からないでぼんやりとした薄暗い姿から、恐怖心によって大変容易に解釈されて、行くべき道が変えられ、私は夕暮れに生命の樹を創ったり消したりします。私は怒りを否定します。欲望を足蹴りにして批判します。門の隙間で呻いている犬と同じように、私は憂鬱な声を聞きません。私は絶望する者に、横になって眠りなさい、と言います。一日中仕事をしなさい。それは人間性が目覚める基本になります。反対に、愚かな人間は考える儘、感じる儘、夢見る儘でおります。夢想家は全てが悲しい者です。一般的な意味で宗教とは、思考、予感、衰弱、漠然とした希望を生むゲームから、自己を放棄することではしかありません。このことは余り注意深く考えられていませんが、思考とはこのことを全て否定することで、常に恐怖や希望を人間の意志でやり返すことです。農民として立派な者は、アザミに悲鳴を上げません。彼はアザミを刈り取ります。

(一九一三年八月十五日)

六 知性 (L'INTELLIGENCE)

考えることは、信じることではありません。そのことを理解している人は多くありません。殆どの人々、つまり宗教というものを排除しているように見える人々は、彼らが信じる事が出来るものを科学に見出します。彼らは或る種の激しい怒りで思考にかじりつきます。そして、もしも誰かがそれ等の怒りを思考から排除したいならば、彼らは正に思考にかじり付こうとします。「旺盛な好奇心を持っている」と彼らは言い、問題点をはっきり言う代わりに謎めいたことを言います。彼らはイシス(1)のヴェールを持ち上げることに語りますが、それは恰も禁断であったかの如く、そして彼らは奇跡のような喜びをそこに見出したが如くです。それ故、あなたは話をするときも彼らが微笑するのを見ることはないでしょう。彼らは山を持ち上げるティタン(2)のようにピンと緊張しています。

私は、知性についてまったく別の考えを持っています。私は知性をもっと自由なものとして理解していますし、もっとにこやかなものとも思っています。私はそれを若さであると理解しています。知性とは、人間で言えば常に若さが失われずに残されている人です。私は蝶のように軽々と飛ぶ動きにその知性を見ます。ただ単に、事物に屈服させられるのではなく、蝶は今にも折れそうな物の上に止まります。それは医者が患者を診察するときの熟達さと、神経が良く行き届いた繊細さを持っている手と同じであり、掴むと形を変えてしまう荒々しい手とは違ふと私は理解します。人は信じるや否や、胃はその気になって反応し体全体がピンとします。信仰を持っている人は、枝の上にぴったりと付いているキヅタ(3)のようなものです。信仰と思考とは全く別のものです。それは次のように言う事が出来るでしょう。思考することとは、信じることではなく発明することです。

或る高邁な物理学者を想像して下さい。彼はガス性の物体に熱を加えたり、冷ましたり、圧縮したり、希薄化したりして長い間観察しました。ガスは非常に小さな無数の弾丸を作るようになり、すべてが管理されていて勢い良く発射させられ、容器の壁にぶつかるようになることを彼は理解するに至ります。そして、直ぐに彼はそれを定義付けます。彼は計算します。分解し、そして〈完全なるガス〉に再度作り直しますが、それは時計職人が腕時計を作るのに似ています。そうです、この男は獲物を待ち伏せる猟師とは全く似ていないと思います。私は物理学者が微笑し、自分の理論を楽しんでいるのを知っています。彼は興奮することなく仕事をして、反論を親友のように受け入れるのを私は知っています。それは実際に体験して吟味することがなくても、自分の結論を変更する用意があるということであり、メロドラマのような悲痛さも無く、非常にあっさりと言います。「そのガスについて、その様なものであつて欲しいと思いませんか」と彼に聞けば、「その様なものであつて欲しいとは思いません。私はその様なものであると考えます。」と答えるでしょう。精神のこの自由は殆ど何時も誤解されており、懐疑論者と見做されています。解放奴隷は今まで長い間、奴隷の歩き方を体に残しています。鎖の思い出が、今でも足を引きずるようにさせています。物理学者である彼は、キリスト教の神を悪魔へ売り渡して仕舞いましたけれども、今でも地獄の火が彼の頬を赤く染めることなく熟考しないことはありません。

(一九〇八年一月十五日)

(1) 死者の守護神。古代エジプトの女神で、ばらばらにされた夫オシリスの骨を集めてミイラとして復活させました。

(2) オリンポス神以前の巨人族の神。ウラノス(天)とガイア(地)の間に生まれた十二人の巨人の一人。ゼウスとの戦いに敗れ、冥界に追放されました。

(3) つる性植物の総称。ウコギ科キヅタ属で、特にセイヨウキヅタのこと。

七 懐疑 (LE DOUTE)

精神の自由とか知恵とは、懐疑することです。このことは一般的には良く理解されていません。しかし、何故でしょうか？ 粘り強さもなく、継続することもなく、遊び半分で考える人々を懐疑論者のように受け取られているからですが、結局のところ彼らは怠け者なのです。この混同に良く気を付けなければなりません。懐疑することは吟味することであり、歯車が良く噛み合っているように思想を証明することであり、再び組み立てることであり、一人ひとりの裡にある恐るべき途方もない人のことを信じるのではなく、落ち着いて先入観をなくすことなのです。

モンテーニュは正しく理解されていません。多分、彼の作品が良く読まれていないからです。彼の如何なることが理解されているのでしょうか。彼の「ク・セ・ジュ（我何をか知る）」は、結論としての言葉が何もなく、決まり文句には少しも肯定すべき内容がないように、詭弁法という遊び心で全てを疑ってみたくなる人々に単に問題提起しているだけです。更に、懐疑というものについて言うなら、「頭の形を良くするための柔らかい枕」になるのでしょうか。しかし、これらの決まり文句は、本を読んで得るものよりも力強い思考の中では非常に害あるものになっています。何によってでしょうか。率直さそのものであると思われています。実際に思考するのは人間であり、他人のために思考するのではなく、自分自身のためであり、思想の明細目録を作成してそれらを吟味し、引き延ばし、批評の攻撃の火を浴びても、そんなことには構わずに、何ものにも囚われずに思考することです。そのときは懐疑するために必要とする人間の力を上手に手に入れて、それを継続していくときです。懐疑することとは、鉄を打つ鍛冶屋のように力仕事なのです。

ルヌヴィエール（1）は力強い思想家ですが、それ以上にその方法は抽象的で、自然に則さず、鍛冶屋ではありませんが、大変に簡潔で驚くべき指摘をしました。それは、愚かな者は決して疑わない、ということです。愚か者とは、精神に齎すものを全て信じて仕舞う人間です。この状態は大変に異常であると私たちには見えますし、極めて縁遠いものです。妄想や夢が多種多様で、支離滅裂であることを考えるとしても驚くことはないでしょう。睡眠中は全てを信じています。それ故に目覚めて自分を取り戻すこととは一体何なのでしょう。それは信仰を放擲することです。ノン（否）とすることです。それは今ある観念に対して思考することです。それは懐疑することです。

恐怖とは、怯えてばかりいる動物の感情です。そして、何が齎されるのでしょうか。信仰が直ぐに齎されますが、恐怖は専制的に断定的なものを強要します。私は物事を大袈裟に映す拡大鏡を恐れます。拡大鏡と分かると、私は大急ぎで逃げ出します。そこから逃げるために走れば走る程、信じるものが見えてきます。私の逃走は、証明することと同じです。独断というものには、この動きがあります。断定し、拘束され、逃げ出します。兎を追う犬のように、自分というものを観念に投げ出します。この荒々しさは雄弁家を生みます。有害な人種で、驚くべき人です。興奮すること、叫ぶこと、信じること、これらは全て動物がやることです。モンテーニュは大胆にも次のように書きました。「頑固に激しい意見を言う人は、愚かであることを最も明瞭に証明している。彼には確実なもの、毅然たるもの、偉大なもの、沈思黙考するもの、重々しいものは何も無く、驢馬のようではありませんか？」。そして、あなたは微笑する人を見て騙されては不可ません。スポーツマンは微笑していても、重いバーベルを持ち上げます。

（一九一二年六月八日）

（1）シャルル・ルヌヴィエール。一八一五年モンペリエ生まれで一九〇三年プラド没。フランスにおけるカント以来の批判哲学の先駆者。

八 (ニュートンの話)

万有引力の法則を如何にして発見したのですか、と或る日著名なニュートンが聞かれたので次のように答えました。「何時もそのことを考えていたからです」。その解答は素晴らしい。一から崇められようとすることを決して望まない謙虚な人の解答です。博物学者のビュフォンも同じ意味のことを次のように言いました。「才能とは長い忍耐でしかない」。高邁なデカルトはこの謙虚を学説の中に取り入れて、良識は誰でも同じように持っていると言って、平凡な精神や愚鈍でさえある精神の人が成し得ないのを決して認めませんし、誰もが系統立って継続して探求するものを持っているのです。

その上、知性を騙すものは、科学を理解するために自分自身を判断するのが大変に遅く、愚鈍で、沉んや新しい真実を発見するためには一層そうであり、そうあらねばならないような時のことを考えないのです。私たちが教育と呼んでいる鸚鵡の調教においては、デカルトの二十講を超えて繰り返す言うのが本場で、恵まれた才能を持っている人々もひたすら繰り返すことややり直すことを行っています。そして学校で全て良い成績を取ってからそのことを望んでも珍しいことでなく、要するに三十歳代になっても愚かな儘の人はいるものです。

最も些細なことでもよく理解するには、何年も必要としなければならないこともあると思います。欲望を激しく持っていながら、学ぶことをしない者たちは大変に忙しい人々で、もしも天分に恵まれていたとするなら、直ぐに何でも構わずに理解するに違いないと想像しています。反対に私はデカルトと共に次のように言うでしょう。もし時間があって粘り強さがあるなら、人は何時でも天分に恵まれます。誰でもが、望む限りおいて才能を持っています。

靈感の奇跡や「心理学の発見」について、まるで隠語を言うように長々と話すのを聞くと、私はこの格言を思い出して慰められます。それというのも、それは至る所で神秘を身につけていることが流行でもあるからです。そしてそれらの格言が正しく望んでいるのは、数学者とか物理学者は或る種の詩人に違いなく、方法からは何も見付けずに、一挙に僅かな思考の瞬間に恩恵を受け取ります。それは主任司祭、貴族、アカデミー会員の教義であり、各々が自分の場所に戻って、自分の仕事場での仕事に釘付けになります。

観念はミネルヴァのようにあらゆる軍隊を生む者となる、と彼らは言います。方法はそこでは何も生まれず、神秘的な〈無意識〉が創造の果実を準備しています。私は、彼らが言いたいことをよく理解したいのです。私は、些細なことを気にしないので有名な超人たちの一人を或る日目にしました。彼は私を見詰めていたのですが私を理解することはなく、私が言ったことには耳を傾けずに答えましたので、私は自問しました。「彼は何かの観念に囚われており、その観念に従うこと以外は知らず、彼が私に話していることしか知らないのだ」。極端な気配りは自分自身を見失うが、それは非常に自然なことです。人が強く注意力を発揮する時は、注意力を発揮するものにしか気配りが出来なくなります。人が何を考えているのかを知るのは、休息している時です。そして、休息している時は何故素直に誠実になるのか、彼は次のように言います、「私が市内電車に乗った時に、一度に全てを発見したのです。そのことを一週間前には思ってもみませんでした」。本当に彼らは何を知っているのでしょうか？ 彼らは口に出して言う方法を選択しているだけなのです。何故ならその方法は、彼らに感動を齎すからです。司祭たちは拍手喝采します、何故なら彼らは平等でないのが好きだからです。そして愚か者たちも拍手喝采します。何故ならニュートンが二十年かかって理解したことを十五分で理解しようとするが、それは無理な事であるからです。控え目で謙遜する人は、短気でいらいらしてくる娘なのです。

(一九〇九年七月二八日)

九 真の共和制 (LA VRAIE REPUBLIQUE)

一般的に、自分の意見を変えずにいる忠実な者は評価されます。一般的に、大した理由もなく意見を変える者は軽蔑されます。この種の倫理的変化は、モラリストにはありません。少なくとも一般的倫理の要素ではありません。その中にある良識は、若い哲学者のぐらぐら揺れる精神よりも洞察力があつてしっかりしていますが、若くして完成した精神はあらゆるものを反射して映し出す鏡のように直ぐにそれに従うようになり、如何なる苦難にも抵抗することがありません。それと言うのも、詩人はどちらかと言えば鏡であり、生き生きとしたイマージュには決して逆らわないからです。埋葬のミサにいる詩人は、不吉な壁掛けやディエス・イレ（1）の言葉を聞けば少しも疑うことをせず信じて仕舞います。しかし、常識があり悟性がある人間は、少しも容易にその扉を開けたりしません。

デカルト又はデカルトの弟子のやり方というものは、信じることに陶醉することよりもむしろ信じることを拒みます。そして、モンテーニュが言うように、法や礼儀作法や偏見を習慣として信じなければならぬとするなら、それらの行為を生む必要性しか信じないことです。しかし、それは思考行為を行うことであり、正しいと判断することがふさわしいと思考して、身を守ることです。そこからモンテーニュの精神は柔軟であることが解ります。自分自身に寛大に見えますが、実際は決してそうではありません。反対に、内面的には断固たるものがあり、心の扉を閉じて判断していますが、彼自身のことを証言する人はおりません。

私が見るところ、デカルトは自国を出て、前例になつていた証拠からは逃れましたが彼は成長したのであり、自分から進んで祖国を離れていることで既に、より美しいのです。他からの慣習を消すために、自らの規律によって旅に出て彷徨しながら、神を信じないで行動する習慣を身に付けるために、より好みなどせずに戦争にさえも参加します。

同じ思想においても、更に何度も祖国から離れるようになります。「私は眼を閉じて、耳を塞ぐでしょう」。〈悟性〉の英雄として自分自身を限定することは断じて考えないで、その代わりに詩人がやるように熊手でそれらの観念を引っ掻きます。偏見の力を理解し、それ自身に代わって行われる或る種の誓いの力を理解するのは、純粋な幾何学においてです。それというのも測量士が行うように、経験を試みないことが大変容易に上手くいくからで、「上手くいった、それ故それは真実です」と言うことになります。しかし、そのことは純粋な精神を裏切ることになります。従つて、そのように教育された人が、世論という風に弄ばれていると分かると、多くの人々は直ぐにそのことを無視して正しい判断をするようになるでしょう。

もしも〈共和国〉が存在し、あるいは存在しているように見えるのに理由があり、あなたが共和主義者であることに理由があるのでしたなら、あなたは共和主義者ではありません。真の共和国とは一つの先入観であり、しっかりとした規律があり、それに経験が加わつたものだと思います。そして、もしも共和国が弱く、正しくなく、実際に墮落しているなら、それは思想的な善を手に入れる時です。さもなければ最早それは思考する人のものではなく、世論の風というものにぼろぼろになった腑抜けです。そこでの選択が秘密に行われても同じで、執拗な君主制擁護者であつても観念だけで満足しており、経験に基づいて法則化することがありません。全体的に楽観主義は安っぽく、楽観主義を熱愛して教義とするのは最悪です。

(一九一四年四月一日)

(1) Dies ir ラテン語で怒りの日。死者のミサ続唱の冒頭句。

十 本質 (LE NATUREL)

私にとっての或る親友は々、大変に過激な考えを言ってくれます。それは、人間は決して変わらないということであり、二十歳から亡くなるまでは何か考えたとしても、何時も同じことを考えていると言うのです。この主張を聞いて私は最初不快でした。しかし、自分の友人たちとか、自分自身に当て嵌めてみようとする、何らかの意味で誰でもそれが本当であると理解するのです。

共通観念というものがあれば、個人的なものもあります。一個人が知性に恵まれると、全てを理解することが出来ます。その意味において彼が仕事をすれば、一生豊かでいられることでしょう。そして、誰もが共通観念を手に入れる方法を心得ていますし、誰もが自分の指で指紋を押して認めるか、あるいはそれを認めないかです。私が話をしているその友人といると、私たちは言葉半ばで理解するでしょう。十五文字もいかない少しの言葉で、私たちは重要な観念を理解します。恰も同じ足跡の上を同じ目的に向かって、二人とも走っているかの如くでした。ある時は彼が最初に目的を達成し、又ある時は私です。勿論、何時も発着点は同じです。そして一人の手はもう一人の手の上に置かれます。その中の一人として、私は三番目の人を引き合いに出すことにします。彼と親しくなってそんなにも長くありませんでしたが、彼も私と同じ道を探求しています。この経験によって、私は常識というものを教えられました。

しかし、それとともに私たちは筆で、気分や趣味や口調や文体から、十人十色の三銃士を生みます。二〇年後も、彼らは昔の儘で変わっていないのですが、只少しばかり明確に彼らを再認識します。三銃士の一人ひとり、馬は馬のように、鱈は鱈のように、彼自身なのです。

それ故、人間においては他者の根源よりも自らの根源に確かな思想をもっており、そこからより良く導かれていると言わねばなりません。各人の精神は、各々の地層のように、自然に生まれたものです。あなたは他人の思想の種子を自分の土地に蒔いて耕すから、収穫することも出来るのです。自然の植物は家庭菜園でも穫れますが、そこではもっと密生して育ちます。多分、人間の手による栽培は、個人にとっての幸福や精神的安定のためにはより有益であると言えるでしょう。しかし、自生で芽を出す若木は接木などによって、人間にとってもっと有益になるのです。

家庭菜園のことについては、今はこの儘にして置きましょう。誰でも人は自分にあった考えを持ちますし、本質は更にもっと自らの意志で生み出そうとするものです。本質は、他の考えも理解出来るのですが、本質しか幸福そうに示せるものは決してないでしょう。そして、その時は力強く、気分的にも調和がとれていて、身振りや事柄も調和がとれるようになるでしょう。正しい心象を示すのは誰でしょうか。それは陰で味方する本能に違いありません。従って人は自分の裡に天才を所有しますが屢々、度を過ぎすと元の木阿弥です。そこから出てくるのがカーニバル的発想の思想家です。

天才は本能や気分的なものによって共通観念を維持し、育てていこうとします。もしその観念が共通観念でなかったならば、彼は狂人か奇人でしかないでしょう。従って共通観念が本能や気分に対抗する時、それは恐らく道理ある常識的な個人になるのですが、退屈でもあるでしょう。両者がなければなりません。感情としての情熱は真実の観念に結びつかなければなりません。そうでないと、あなたは雄弁な講演も詩作も出来なくなり、他人の受け売りだけになるでしょう。この様にして皆が歩く町の通りのように、昔からある常套句は本質によって奥深くて美しいものになるのです。

(一九一一年三月十三日)

十一 食堂の匂い (L'ODEUR DE REFACTOIRE)

食堂には匂いがあります。すべての食堂が、同じ匂いをしています。そこで食事をするのはカルトゥジオ会の修道者であったり、神学校の生徒だったり、高等中学校（リセ）の生徒だったり、優しくて若い娘たちであったりするでしょうが、食堂には何時も食堂の匂いがしています。その匂いのことは、上手く書くことが出来ません。食器を洗った汚水の匂いでしょうか？ かびの生えたパンの匂いでしょうか？ 私には分かりません。もしも、あなたが一度もこの匂いを嗅いだことがないのなら、私はあなたに何も言えません。盲人に光のことを話すことは出来ません。私にとってこの匂いは、青が赤と違うように、それと分かれます。

もしも、あなたがその匂いを知らないならば、あなたは幸福な人だと言えます。あなたは、学校に幽閉された経験がなかったことを証明しているからです。あなたは人生の初めから、匂いの囚人や規則を敵にせず済んだからです。以来、あなたは良き市民、良き納税者、良き夫、良き父親として振る舞い、社会の権力者たちの行為を受動的に受け入れることを少しずつ覚えていきました。憲兵の中にまで、あなたには友人が出来ました。それと言うのも家庭生活は、あなたにすすんで楽しむことを教えたからです。

しかし、食堂の匂いを知った人々がいますが、あなた方にはどうしようもありません。図に乗って何でも出来た子供時代は終焉していました。美しい日は、遂に姿を消していました。そして、彼らの人生はこのようにして開始されましたが、主人に忠実でない犬が紐を引っ張っているようなものです。彼らは何時も苛立っており、この上もなく美味しそうな餌を前にしている犬と同じです。彼らは秩序や規則というものが、決して好きではないでしょう。彼らは一人ひとりを大事にしない権力を、非常に恐れることになるでしょう。彼らが法や規則、礼儀正しさ、道徳、古典、教育、そして教育功労勲章に対して何時も激怒しているのを見ることになるでしょう。何故なら、それらにはすべて食堂の匂いが付いているからです。そして、この匂いからくる病は、毎年或る危機によって感染していきます。それは丁度、空が青空から灰色に変わる時であり、本屋が古典書物や小学生鞆を陳列する頃（1）です。

（一九〇七年十月十一日）

（1）フランスの新学期は九月であり、秋から冬にかけての空は、曇や雨の日が圧倒的に多く、陰鬱です。

十二 誠実さ (DE LA FIDELITÉ)

或る人が昨日、私に言いました。「アランよ、どうしてあなたは急進的なんだ？ あなたは頑固でしかない。何故なら、結局のところ全てはあなたの回りでことが運んでいるからで、私は純粹に生の儘の自然が教義という岩のように、思想が非常に大きな流れとなっている真ん中で鎖で繋ぎ止めて置くことが出来るとは思えません。あなたは驚きたくないのですか、あるいは賭に勝ちたくないのですか？ 勿論、私はよく知っているのですが、あなたは如何なる神学者もあらゆる行いを自分の教義に連れ戻して考える、とよく言っています。しかし、気高さもなく仕事をするにはよくあります。そして、私はそこに自由を見出すことはありませんが、その自由はあなたが別の主題を論じる時に自分で気付くものです。それ故にあなたは宗教的なものとして政治的な信条を持つこととなります。結局、あなたは今、全てに誠実なのではありませんか？」。

思想には翼のような飛躍があることを私は認めます。しかし、その翼は鳩小屋へ戻ってくることを私は愛してもいます。自由には拠点がないように私には思えます。要するに党派に何もなければ、必然的に人は別の体制へ行くこととなります。人は思想の間を旅します。人は思想の旅行者です。私がそのことを愛することは決してありません。本質と余りにかけ離れていて、琴線に触れることが余りに少ないからです。従って、社会主義、アナーキズム、王政主義、そして様々な思想を大きく一巡りすることになるのですが、何も得られません。それに反して私の本質に従って思想を整えて作り出して行くことは、障害物を取り除いて立て直すためのより良い機会を持つようになると私は思います。

素直さについても言うべきことが沢山あります。何時でも何かにつけ非常に素直なことがあります。即興という素直さがあり、まるで飛び跳ねているようで、時として鋭い知性を見せ、この方法によって情熱の感情から逃れることを考えます。しかし、次から次と現れる意見によって、私は屢々その情熱と同じものを認めます。それは情熱に変わりないのですが、出来ることなら人はそれを理性に変換しなければなりません。

私は生まれながらに急進的です。私の父もそうでした。母方の祖父も同じでした。これは私の意見だけではなく、クラスの中では社会主義者だと言われていました。それというのもクラスの皆は、小市民で大変に貧乏であったからです。私は何時も暴君に対して大変激しい感情を持っていましたが、それは平等への情熱です。私は直ぐにそれを持って生徒全員が善良であることを主張するでしょうし、私は巧みな演説家であり、何でも構わずに理解して証明する素質があると十分によく分かっています。既に私は現在も、その情熱を持っていない作家のものは力強いものであっても、殆ど読みません。根本から間違っているのですから、私は別人のように全てうまく飛び立つことが出来ますし、高く評価された或る教義を選択して自分の身をうまく置くことも出来ます。しかし、本能は私を根源的なものによって堅く力強いものにして、私は熟考する度に、本質を進展させない思考は余りに自由すぎますし、余りに気儘で、結局は必然的に力がないものになると自問します。それ故に、少なくとも私が信じる政治的見解においては、逆説を好む独創性というものは決してありません。従って、私は郡選挙の投票で〈比例代表制〉に反対ですし、行政上の専制君主に反対であり、国家の秘密に反対するのは急進的平等のためであり、そして服従の代わりに予測、情熱、熱狂を獵犬の本能と同じ位に明確になるまで発達させます。これらの感情はその証拠を生んでくれませんが、証拠を見つけ出してくれるのです。

(一九一二年二月七日)

十三 若者 (LE JEUNESSE)

現代において人は喋り過ぎです。私は昨日も又本を読んでいました。私たちの青春時代は行動するためには食欲が沢山あり、信仰も同じように持っていました。二十年前の青春時代です。スポーツも多くの人がやっていました。より実践的教育が、恐らくスポーツにも貢献していました。何よりも自由という実用性が希望と勇気を与えていました。それも大変に良いことです。

しかし、それを喜ぶ多くに人々は、そのことを解っていません。それというのも信仰という美しい言葉には何時も断念とか諦めというものを聞き入れ、行為という美しい言葉のには何時も情熱の感情を聞き入れ、取分け戦争には情熱だらけで一杯だからです。その点、多くの人々は或る種の予感を見分けるのが大変に下手ですが、若者たちが所有しているのは解放されて邪魔なものを取り除いた一本に道です。

信仰は何時も手探りであろうと目的に向かって歩いていましたが、それが正義です。その意味で〈フランス革命〉は信仰の働きによるものであり、尋常でない行為です。そして、恐るべき戦いが続くその種の倫理的病が取分け若い先生方や若者自身の中に存在していて、極端な反省やめったにない希有な感情を育成させる方向へ向かう傾向があるのは確かです。現在、この種の病気には有害な芸術家がいる、と明示されています。私が学生だった時、廻りの連中が崇拜していたのは実証主義者のテーヌとルナンでした。バレスもこの毒を愛しました。私は決してその毒に触れませんでした。流行の思想よりももっと力強い本能によって、彼らの心理学を無視しました。思想や感情を大きな見世物の単純な反影としています。そのような見世物と見倣したいと望むことは常軌を逸しているように見えました。事物は、反応のない強固なもので、重量があつて、抵抗があります。同時に、障害になれば役にも立ちます。誇りもなければ権限もありません。その意味では無神論者であり、唯物論者です。しかし、無意識の世界と同じように、私は決して流行の言葉によって思想、感情、〈魂のあり方〉を考察することはありません。反対に、その世界には意志が存在しており、固有に領域にあるかの如く、そこでは単に在るが儘の真実を形作る方法を容認したり、否定したり、削除したりしなければならぬだけでなく、在らねばならないものが真実であり、正義となるのです。そして、次に事物と同じになるのではなくて、職人が一輪手押車とか滑車を創造したように、この世に正義を生まなければなりません。如何なる障害があつても私が守っていくものとは真実の信仰であり、そして真実の宗教と呼べるものです。そこから緊張感が生まれ、最も充実した行為へ向かうことさえあるのです。それというのも行為と呼びたくなるようなものは痙攣のようなもので、短時間の狂気でしかないからです。精神も同じであり、私はあらゆる失敗から救われましたし、現在も成年になったばかりの若者たちはそのことが分かっていると私は信じています。そして、私はそのことが嬉しいのです。

(一九一三年一月二三日)

十四 素朴な信仰 (LA FOI DU CHARBONNIER)

人々の宗教上の意見について考えながら、或る生真面目な男が時々言いました。「人々はどのようにして困難なことや、不条理なことを見ようとしなのだろうか」。だから素朴な信仰を持っている人は良く言われるように、或る種のことには大変精通していると考えようになります。最も明白な観念は物事を明るく照らし、眼に映る太陽光線のように精神を照らしにくるという間違った考えを人は持ちます。それが真実でないのは本当です。観念を探求しなければなりません。それは心の中のことであり、そのことが分からないと決して見出されることはないでしょう。眼を閉じて、眼に見えるものを見ないことも出来ますが、そのことには気を付けて下さい。そうではなくて反対のことを望むことです。観念の世界にあっては、正に眼を閉じる必要はありません。拡大鏡とか顕微鏡を使わなくても良いのです。要するに、証拠を必要としないで拒むこと位、簡単なことはありません。

私が知っている或る男は、自分が望めば見事な思考を展開しますが、精神活動が最も鈍化した善良な老女のように、教会でミサの話を聞いていました。私は確信したのですが、物事が順調に実現すれば、決して宗教に賛成とか反対とか考えることはなかったのです。しかし、何故宗教は生まれたのか？ と人は言うでしょう。この質問は間違っています。私は注意深く、そして命令しても良いと思って言うのですが、考えないために生まれたものは何ものでもないということです。困難なのは思考することです。

知りたくないと思えば、最も明白な事柄でも知らないでいることは可能です。大変教養があり、半生を田舎で暮らしてきた或る男は、星々の運行について話をしている人に次のように言いました。「星が回っていると言うのは真実ではありません。星は動かないと言われていました。しかし、もしも星が地球の周りを回っていても、そのように認識するのでしょうか」。従って、大変明白な真実を認識するには、両眼でそれを何度も探求しなければなりませんし、その知覚を記憶と比較しなければなりません。それ故に木にぶつかるように、偶然に真理にぶつかること決して信じてはなりません。ぶつかるためには歩かなければなりません。そして、それを心から望むのでしたら、その考えを押し通すためにしか歩いてはなりません。この広大な観念の国においては、自分が散歩する場所は選択出来て、本当に気に入らないものは決して見なくて良いのです。つまり自分自身の裡で一つの意見を打ち倒すためには、はっきりとそのことを望む必要があります、そこに戻ってあくまでそれに拘らなければなりません。そして、愚か者が話をする時には、古狸の老練家が話の内容を変えて仕舞わないように十分注意することです。そういうことをやる者は、数々の証拠から上手に逃れていく最も知性的な者なのです。

(一九一三年十一月五日)

十五 光の祭典 (FTE DE LA LUMIRE)

冬の終わり、それは光の祭典です。森の奥まで照らす明るい太陽、樹木の幹は生き生きとした影を映し、小川は輝き、梢と梢の間には青い空が襲いかかっているようです。遠くに見える人々は、金色の霧の中に消えていきます。太陽は燃えています。微風は止んでいます。でも優しいとはいえない力が感じられます。まだ春ではありません。

私たちは穴の中に座っていましたが、立ち退かねばなりませんでした。冷たい風が、水のように斜面に沿って流れていました。その時、或る人が次のように言いました。「冬の太陽は嘘つきだ。太陽が輝けば輝く程に、寒さが身にしみる。冬の中で私が好きなのは、黄昏の光と低く垂れ込めた雲で、それ等は大地が着る外套のようだ。その時、人は寒くて縮こまっているし、マーモットの毛皮が作られる。しかし、嘘つきの冬の太陽は、私たちを家の外へ連れ出す。私は暑くない光が嫌いだ」。

賢者は言います。「太陽は決して嘘つきではありません。出来得る限り暖かくします。しかし、その利害は纏れ合っているはずではありません。私はよく知っているのですが、真冬の日中で一番寒い時刻は正午頃です。それは当然です。太陽は大地を暖め、大地は空気を暖め、暖かい空気は上昇していき、冷たい空気は居場所を失うようになります。それ故、太陽の最初の効果は、肩先に冷えた空気で出来た外套を私たちに投げつけ、その効果は日中の正午頃にピークになります。一日にとっての真実は、一年にとっても真実です。太陽が地平線上に昇るにつれて、極地からの風が私たちの処に吹いてきます。そこから寒波の次に美しい春が続いてやって来ます。あなたはご存じですが、太陽は手の下しようがありません。正直に私たちを暖めます、それは正確で合理的な神です」。

別の人が言います。「正確で合理的とは、私がしている腕時計のようだ。それと言うのもそれ等の歯車は各々が平然と自らの機能を働かせているからだ。そのことは私の腕時計が上等であると証明していることにもなるのだ」。

最初の人と言います。「しかし、粉末状の穀粒がもしも歯車の中に入ったら、全てが止まって仕舞うが、この粉末状の穀粒も正確で合理的であり、恰も冷たい空気が正確で合理的であるかのようだ。何故なら、冷たい空気の働きは、最も暖まった大地の方に向かって流れるからだ。そして、風邪も正確で合理的である」と、くしゃみをしながら付け加えて言いました。そして、「いや、それは違う。正確で合理的なものは何もない。これらの自然の働きは、全てが粗野な盲人のようなもので、人が言えることはそこまでだ」と続けて言いました。

賢者は言います。「私には分かりません。もしも私の祈りが何かを成し得たのなら、私は自分の祈りを恐れたことでしょう。もしも私が或る神の気まぐれを確認したとするなら、その後は如何に生きることが出来るのでしょうか。私を安心させるものとは、完全なる組み立て、全ての物事の嵌め込み、善悪を組み合わせた鎖です。

〈正確で完全なるものは歯車であり、髪の毛一本の隙間と言えども歯車が離れることは無い〉とキプリングが書いたラマ老人は言いました。私はそのことをよく理解するにつれて、次第にこの〈世界〉で失うものは少なくて済むと感じるようになりました。そこに私は人間の真実の顔を理解しました。もしも私が太陽という酔ったサチュロス(1)が梢から出てきて林間の空地で跳んでいるのを見たならば、尚更そう感じたことでしょう」。

(一九〇九年三月二日)

(1) 野羊の角と耳、長い尾に蹄のついた脚を持つギリシャ神話に出てくる若い成年男子の森の精霊。野性

的、好色的で酒を好みます。ローマ神話のファウヌスに当たります。

十六 テンペスト (LA TEMPTE)

昨日、私はよく引用されるシェークスピアの言葉に偶々出会いました。「私たちは、夢想と同じ内容の布地を作る」。これは妖精アリエルが、好きなように風を起こし海を荒らす夢想劇のような『テンペスト』の中に出てくる言葉です。この乳母の話には多くの思想があります。劇中には二人の恋人が出てきます。この世の者ではなく、夢の中へ迷い込んだような彼らの夢想は観客まで魅了します。そして、物語はまるで恋人たちが想像するように起きていきます。全てが上々に終わります。精霊はこの世の王様です。醜いカリバンは野性的な面を演じ、腹這いになって動き回ります。このようにして観客は物語を理解し、その時から人々は物語を愛します。そして、一人の女性から生まれたそれ等のものは、そこでの幻想の申し子たちです。カリバンが力を得るや否や、そして腐った魚の匂いが夢幻劇を妨害するや否や、子供が創られます。子供は幾つもの夢の中から創られ、劇の中で別の内容の布地を創り、その順番で他の子供たちが創られるでしょう。このようにして純粹精神のアリエルは最上の婚礼を迎え、次から次へと妖精が集まります。そこには〈神学〉というものが要約されています。少しも即物的ではありません。

私が、もしも〈神々〉を追い払おうとするなら、先ず夢想を追い払うことから始めるでしょう。そして私は、詩人とは反対にこう言うでしょう。「私たちの夢想は、事物と同じ布地から出来ている」。私に起きたのは、ホテルの部屋で眠っているときに恐ろしい夢を見たことでした。何人かの兵隊が銃撃しており、赤い閃光が銃から発射されて、人が負傷し、家は燃えていました。私は目を覚まし、銃撃の音を聞きます。それは左程遠くない処にある歩兵射撃場で兵隊たちが出していた音でした。私のベッドは窓の正面にあり、赤いカーテンは太陽によって光り輝き、部屋を照らしていました。それは私の夢の緯糸でした。私は夢を見たのだと思いました。実際に物事をそう認識していましたが、良く分かりませんでした。私は銃撃の音を聞き、瞼に映っていた明るい赤い光を見ましたし、何時もやっているように私はその後で起きたことを再構築しようと努めました。最初はうまくいきませんでした。最後は本当のことに辿り着きました。それは目覚めと言われているものと同じようなものです。

その理屈で言うなら、私たちは毎日絶えず小さな夢を沢山見ているのです。私は一人の男の背中を見て、その男と話をしようとして前に出ますが、男は私の友人ではありませんでした。それは何と言っても短い一寸した夢のようなもので、直ぐに目覚めたのと同じようなものです。市内電車の中でも間違えます。短い夢、次に目覚めです。私たちの夢は、この世に私たちを連れ戻すのであり、〈神々〉の処ではありません。夢を見るのは私たちの怠惰です。弛緩した間違った精神はそこからやって来ます。アリエルはカリバンの子です。真実の正しい精神は、真実の正しい世界を照らします。〈正義〉の理想は人間性です。〈正義〉が照らしているものは、神のように素晴らしいものです。

(一九〇八年十一月七日)

十七 観念の流れ (LE COURS DES IDEES)

人は望み通りに決して考えません。望み通りに考えると思わせているのは、人間の精神に現れてくる思想は殆ど何時も状況に適しているものであるからです。もし私が港を散歩したとするなら、私がみる海辺のクレーン、山積みの石炭、船々、貨車、樽という事物は、私の観念の流れにあつては多くの違いはありません。もし私が何か夢想をしていたなら、最早一羽の燕の影も追えないでしょう。直ぐに何らかの生き生きとした印象を現実の事物の真っ只中で私は思い出します。そして、私が自分の会話に注意する間に、上昇し、下降し、回り、軋み、ぶつかり合う大衆の真っ只中で、私の注意力はそこから秩序を保つ規律を見出し、現実の事物の間の本当の関係を私の精神ははっきりと見ます。

しかし、時折私の知覚を貫いて行く夢想というこの空飛ぶ鳥は、何処からやって来るのでしょうか？もし私がよく探したなら、殆ど何時も何らかの現実の対象で、一瞬にしか分からなかった空中の鳥、遠くに見える樹木、あるいは私の方に振り向いた一瞬の一人の人間の顔を発見したことでしょう。そして、希望、恐怖、怒りを満載した船荷が稲妻の光の中を私の足元を流れて行きます。私たちの思考とは、現実の事物が複写されたものであり、私たちが夢想するための力は人が言うほど現実とかけ離れたものではありません。

私はこのことを一人の友人と語り合ったのを思い出します。私たちは森の中を冒険して歩いていました。現在の事物による救済がなかったなら、宝石箱のように私たち自身の宝を取り出せるかどうか彼は尋ねました。この時、私の精神に〈ビルル〉という言葉が生じましたが、それは樹木や鳥たちとの如何なる関係も確実なものではありませんでした。私はそのことを彼に言いました。私たちはもっと議論するようになりました。枝々で半ば覆われて浸食されたような廃屋に近づきました。私は、そこを見た時、壊れたガラスの代わりに窓にボール紙が釘で打たれているのを見ました。そこに〈ビルル〉という言葉が読めました。それ以後、私は母なる大地に敬意を表すようになりましたが、それは私にやって来る思考全てのためでもあります。

観念は、時には私たちが眼で見たものの反映でもあります。或る旅行者が私に語ったところによると、乾燥した砂漠や焼けた太陽の下で彼が考えたことは、眼を閉じるや否や、月に照らされた雪景色のノルウェーのような処のことでした。それは多分、私たちが太陽を見ると直ぐにベッドから起きるように、黄色のイメージの反応が強烈だったためでしかありませんでした。激しいイメージの痕跡は何時間も続きます。光が消えた後でもそのようなイメージは恐らく、私たちの夢の元の素材になるのです。深くて音が聞こえない静かな夜に、もしも私たちが動かないでじっとしていたならば、私たちの思考は遠くへ行くことはないでしょう。もしも眠りたいと思う人々が自分の心配の原因をもっとよく知ったならば、恐らく我慢するのは五分でよいでしょう。夜の波がそれらを取り除き、漂流物のように揺らして気持ちを静めにくるでしょう。

(一九〇八年十二月三日)

十八 室内遊戯 (UN JEU DE SOCIT)

これは雨が降っているときのための或る種の室内遊戯です。同一の方向に見る時であっても、もっと遠くから対象を見詰めたり、近づいて見たりする二つの方法で確認することが大切です。この考察は物事を生むための大変な助けになると私は信じていました。しかし、この二重のイメージは屢々、偶然にも善良な信仰を否定するようになると確信するに至りました。そして、それは理性の働きでもありました。ある人は言いました。「一本の傘しかないのに、何故二本の傘を眼で見たいのですか」。私としては、そのことを見ながら自分なりに自由に書くことで十分で、いわば私が見るものを額縁に入れて、二本のペンを使って自由に書くためなのです。しかし、私はそれを何時も他人に簡単に見せたりしません。この抵抗が齎されるのは、視覚の理論について考えるのではなく、眼で見るのが不可能なその姿を二本のペンで判断し、法令によるが如くに一つを削除します。私はティマゴラスという名の古代の哲学者が二重のイメージを否定していたのを読んだことがありますが、それも同じ理由からです。

外見を通過して対象の内部に到達するためには、時間と勉強が必要です。子供はそこに記憶を持ち続きません。しかし、生まれつきの盲人は、この研究にとっての証人に成るように思えます。盲人が手で物を探ることは、眼で見る外見に一つの意味を与えます。

ところが少しも気付かないことですが、外見を見分けるためには、そのことを知るために一度は教育を受けるための時間と勉強が必要となります。例えば一般論として、絵を描いた経験がない者たちは、遠くの森や平原を描くために空気を介在させて選択した色彩を否定します。彼らは言います。「本当の樅の木は青くありません」。遠近法も同じです。或る日、サン・チレルという若者がデッサンの練習をしているとき、黒いイメージの対象を斜めに置いて描くと更に小さく見えることを彼に認めさせることに、私は大変苦勞しました。彼は言いました。「絵は何処から見ても何時も同じ大きさではないですか」。

彼は恐らく、自由思想家たちに対しても同じように何らかの抵抗を生むのでしようが、そのとき自由思想家たちがお互いに納得していることは、宗教には目的が無いということです。それ故、彼らは表面上の外見、例えば祈りの結果というものを否定します。何故なら、如何なる〈神〉も祈りに耳を傾けないのは、はっきりしているからです。勿論、そのような行為から、如何なる〈神〉もいないと十分説明し得るものがあります。その感情は表面的で、遊んでいるときにも〈神〉に関しては真実であつたり騙されたりします。〈神〉は極めて現実のものであり、機械化された私たち自身の肉体にとっても有効に役立つだろうと思いません。ですから授業計画の会議においても、私の考えの基本となるこの疑問を知りたいのです。つまり〈宗教〉の真実ということです。それと言うのも二つのイメージを否定しながら、ティマゴラスは最初のイメージにとどまっていたからです。それ故、外見も同じように最初のイメージをとどめて理解しなければなりません。

(一九一二年八月二二日)

十九 猫の思考 (PENSES DE CHAT)

この登場人物の裡にある力強い表現のせいで、興奮することなく猫を見詰めることが出来ませんでした、と昨日或る人が言いました。「彼らは何を考えているのか？ まるで私たちとはかけ離れているようだ」。私はこの種の感情を決して体験していないので幸いです。私は猫が考えることなど全然気に留めていません。人間が考えていることを言わなくても、同様に私は全然気に留めません。もしもこの種の感情を持ったならば、私は席を立ちます。それらは心理学的遊びで、確実さもなければ男らしさありません。動物たちは何も考えないばかりか単なる機械であるとデカルトが言うと、そこから箒で強くさっと掃くようにすっきりしました。その同じデカルトは最早不条理な夢を見たりしませんでした。そして、私は不条理な恐れに同意したりせず、夢想とか錯綜した思考を研究することが理性的であるとは思いません。実際に現実の人間は、あらゆる事物を整理して考えます。

座っていてじっと動かない猫ですが、その尻尾は蛇のようによじらせていて、それは大きな謎です。しかし、もしも私が両手で私の頭を猫のようになでることを考えたならば、それも大きな謎であり、もっと多くの驚きを与えます。もしも人が薄明かりの中で見ようにはっきりしない思考に逸れて行き、対象もなく、注意力も散漫に働かせるならば、動物を崇め、空想を意味あるものにして仕舞います。しかし、それは機械というメカニズムでしかない、とデカルトは断言しました。私があくびをする時、急いで瞼を閉じる時、猫の尻尾も動きます。それは刺激とその反応でしかありません。そして奇妙な夢も、それと別のものではありません。私は確信しているのですが、夢とは名状しがたいもので、次から次へ興味を持てないもの、つまり直ぐに忘れて仕舞い、想像力を満足させるものではないのです。それは狂気を生む弱い精神です。それというのもそれらの不幸は変わりやすい気分と、あなたにも私にもある一瞬一瞬に夢の素描を描く波のようなものを持っています。しかし、それらは最も生き生きとした興味に結びついて行くものです。その上、じっくりと思考するものです。狂気とは、心理学者そのものです。もし純粋な機械論に帰すならば、狂気は治ります。

本当のことを言えば、学習は彼にとって良いものではありません。しかし、自分自身のことを余りに沢山考えて多少なりともノイローゼに陥っている者たちには良いものです。不眠症は、不幸だと考えなければ不幸ではありません。平然としていることです。そして、動物は誰の世話にもならず、自分一人だけで治します。悲しいことを口に出して言うのは、疲れているからです。不安なのは、胃が余りに重苦しいからです。予感があるのは、偶然と関係しているからです。予感のことを考える方法とは、最早そのことを考えないのがそのやり方です。同様に猫の本当の思考とは、私が猫と呼ぶ機械論（メカニズム）の思考です。もしも私が自己の中で結論に達しない思想の多くを軽蔑するなら、それは或る種の死産児たちであり、私が仮定している猫の思想を今以上にもっと軽蔑することになります。要するに眠るか、目を覚ましていなければなりません。私にとって半分眠っている中での神秘という表面的な豊かさは、全く偽りの豊かさです。それらのものは尾で腹を打つと言われてるように無駄な努力であり、至る所に写し取られている平凡な神学しか生みません。或る狂人が私に言います、「私はガラスで出来ている。私は自分を壊すだろう。私はバターである。私は溶けるだろう」。それは何ら注意すべきことではありません。私はこれらの話を論じるに、偉大なるスピノザが書いている次の文章を使用します。「私の家は、隣の雌鶏の中に消えた」。間違っていないし、不安とか薄暗くてはっきりしない思考でもないのですが、そのメカニズムは乱れていて単純そのものです。動物を産みなさい、そして最後には機械を生むことです。無宗教は、この考察の中にある全てです。

(一九一三年九月二一日)

二十 夢遊病者たち (SOMNAMBULES)

もしも夢遊病者のびっくりする話や予感話、あるいは何かそれに似た話をしようとするなら、誰でも何か話すべきことを持っているでしょう。しかし、私はこの種の話が好きではありません。本当のことであっても、私は嬉しくないのです。それらのことを私が確認すれば、ここに引用するのですが、私の記憶は結局消えて覚えていませんし、少なくともそんな信仰は消えて仕舞いました。そうです、私は落書きされたような曖昧な知識を消しますが、それは私にとって一番の野蛮さ、不公平、戦争を消すようなものです。そして、もしも何処かで奇蹟が生まれたとしても、私はそれを見に行くことはしないでしよう。

私は今、宗教的精神が私に向かって飛んでくるのを理解しています。「その精神は大切でしょうか。正体は何なのでしょう。しかし、そんなにもそれは本当のことなのでしょう。狂信的行為か何かではないのでしょうか」。それは本当に、狂信的行為を全て遠ざけることが狂信なのです。精神は真理のためのごみ箱ではありません。真理の秩序、そして認識する方法は多くのものを齎します。恐らく、狂人たちが未来を認識するという古い偏見にも何らかの真実がありますが、未来というものが明らかにされる時、私は決して狂人でありたくないのです。「未知を知ること」。この言葉は良き金言です。

如何なる生物も、その構造は電波、音、光、熱、嵐の匂いというものを受信する驚くべき受信機です。そして、もしも自分の体の音を聞くために立ち止まっているなら、多くの物事を見抜き予見することのない理性など私は決して理解しないでしよう。何故なら、前兆というものは至る処に現れるからです。昨日、私は郊外に行き二つの丘の間から針の穴のように見えるパリの方を見ながら、自分に言いました。「この時間、エッフェル塔はメッセージを送信している。もしも私が全て絶縁された銅線を長くぴんと張っていたなら、そして、もしも大地に敷設された銅線に近づいたならば、私は多分、小さな電波の火花を浴びることになるだろう」。私たちの肉体もアンテナであり、何度でも雨を予感する電波を受信します。それ故、自分の印象に身をまかせて、選択の余地なくそれに反応して全てを増幅させていくしかなく、要するにそれなりの予言者になるには、狂人になるしかありません。それと言うのも、人は何時も悲劇的感情を抱きながら奉仕し、特に他者への信仰心から奉仕し、人は予言を言うようになるからです。芸術が科学の代わりをした文明がありましたが、それは平凡であることを全部取り除き、悪の中にも真実があることをはっきりと見分けることを許容するものでした。そこにあるのは専制君主であり、野生であり、情念の支配でした。

私たちは、そのようなものを完全に排除した別の種類の文明を発展させています。選択しなければなりません。知性は先ず、血液や気分の流れによって持続して変化する数え切れない知覚が拒絶されているかどうかだけをはっきりと理解することが出来ます。その者は魔術師を辞めて賢者に成りたいと願います。選択しなければなりませんでした。人は選択しました。私たちは誰もが、一瞬一瞬を何時も選択しています。そこでの決心は感動させ、多分、最も美しい勇気です。どんな代償を払っても見分けることです。動物の知恵を拒絶すれば、狂人や悪人の支配に連れ戻すことになるでしょう。恐怖や期待の的が督促するものに耳を傾けてはなりません。信者とは、その人間に固有の気分を明らかにして証明することに価値を見出す人のことです。そしてティベリウス(1)やネロ(2)やヘリオガバルス(3)のものとなった悪しき知恵に対して、只、意志をしっかりとさせねばならないだけです。如何なる運動もそれを開始する前には、試験的なことや議論をやらずに、負けない組織を手に入れて、信じることを拒否し、そして信じるための感動も拒否することです。断固として不信心であることです。「神と予言者を倒せ!」。今は実りある果実に倣って判断することです。〈正義〉であると言われていることを疑ってかかることです。

(一九一四年三月三日)

- (1) ティベリウス・ジュリアス・シーザー（紀元前四二年頃～三七年）。第二代ローマ皇帝で、治世後半は恐怖政治を行いました。
- (2) 生涯は三七年～六八年。ローマ皇帝在位は五四年～六八年。残忍で暴虐な性格でした。
- (3) 生涯は二〇四年～二二二年。ローマ皇帝在位は二一八年～二二二年。統治は乱脈で市民の不満から暗殺されました。

私が学年を終えた時、生まれ故郷の町で幾つかの賞状をもらいましたが、町の思想家たちと共に儀礼的な夕食会に一度か二度出席しました。私は何回も教会管理人である弁護士の話を書き聞きましたが、彼は食事の済んだ頃に〈形而上学〉の話をしたがりました。「全てのことには原因がある。しかし、もし各々の原因が一つでなければならぬとするなら、何も説明できない。それ故に原因がないとしても、一つの原因はなければならず、それは〈神〉である」と彼は言いました。私はそのことに答えて言いました。「全てのことに原因があります。それ故に〈神〉にも原因がなければなりません。でもその時、〈神〉はもう〈神〉になっています。さもなければ、もしも〈神〉に原因がないとするなら、全てのことに原因があるというのは真実ではありません」。周りにいた二、三人の食料品屋の主人たちは慇懃に素晴らしいと感嘆していました。彼らはそこで私たちを馬鹿にしていたのだと私は思っています。私はそのことを仮定して言っているのであり、確信があった訳ではありません。単純な人間たちはよく自分自身を信じませんし、饒舌な人間を尊敬しています。

もし私が、当時の食料品屋の主人だったとしたら、二人の神学者に次のように言って喜んでいただこうでしょう。「あなた方は何のことを話しているのですか？ 私は原因というものが何かをよく知っています。例えば、夏の雨による悪天候は、干しスモモが高価になる原因であるのを私はよく知っています。円錐形に固めた砂糖の塊は底辺の処より頂点の方が甘くて美味しいのを私は知っています。その原因は、水が高い処に取り残されるのに反して、砂糖は頂点になっている鑄型の底に沈んで行くからです。しかし、あなたは全てのことについて話しています。全てとは何でしょうか？ 全てとは全てであると私はよく理解しています。しかし、実際に私が全てのことを考えたいと思っても、何も考えていません。その時の全ての原因とは何でしょうか？ 私の頭はそこで訳が分からなくなります。論証も反論も理解されません」。

それ以後、私は今までよりももっと緻密な論証を何度も聞きました。或る神学者が私に証明したのは、この世は私が話をして一瞬一瞬に始まったのであり、一瞬が際限なくあつて流れているのではないと理解するのが正しい理性であるということです。何故なら、無限に増大し続けるのが一瞬であるなら不条理であるからです、と彼は言いました。

言葉の綾が価値あるものになる一つの例として、私はあなたに分からせたいと思います。曖昧な数学的概念しか持っていない大変若い人に私は次々に質問しました。四角形の一辺を二倍にしたら、面積はどうなるでしょうか？ 「二倍になります」と彼は答えます。ソクラテスの時代にも、既に弟子はこの愚かさには陥っていました。言葉しか考えなければ自然です。もしも一辺が二倍になれば、勿論、面積も二倍です。もしも一辺が三倍になれば、面積も三倍です。もしも四角形という観念が無限の観念とか、全てとか、〈神〉と同じようにぼんやりとしたものであったならば、そこでのそのような理性の働きは正しいものと見做されることでしょう。私はそう言いながらも、そのことを強調することも出来ます。面積が増えるには原因があります。それは辺が伸びることです。原因の中にしか結果がなく、それ以上でもそれ以下でもありません。それ故に、辺が二倍の四角形は二倍の面積になって仕舞います。只それだけです。私は今、この話を聞かないで四角形を考えて見ます。イメージをはっきりさせるために、砂の上に四角形を描いてみます。辺が二倍になると面積は四倍になるのが分かります。私は神学者の言うことを意に介さないことにします。

教訓：あなたの眼が事物のはっきりとしたイメージを認めなければ、直ぐに自分の耳を塞いで余分な話を聞かないことです。

二十二 ノイローゼ (LA NEURASTHIE)

世界はノイローゼ患者で一杯です。彼らは想像力の病人なののでしょうか？ いいえ、違います。病人たちは自分を騙しているのであり、そして疲弊した知識人と見做します（あるいは、もしあなたが好感を持っているとするなら、頭脳が疲れていると見做します）。それは十回に九回が眼の疲れです。それでは何故眼が疲れるのでしょうか？ 本の読み過ぎなのです。

良書は決して眼が疲れません。というのも思考させるからです。そして、読者は読めば読む程考えます。眼が疲れるのは、大急ぎで読んで行かなければならない長ったらしい文学書を、一気に三行も読まなければならないからです。確かにそのように読んでも才能ある人なら疲れませんが、眼をすり減らし、そのことに気が付きません。更に、車に乗って読む時や歩いて読む時は、もっと早くなります。町にいる時は、夜も眼を休めることはありません。文明人は朝から夜中まで貪るように本を読みます。何でも読みますが、何でも読み返しません。読み返す時は、よく見えない時です。

過労になれば直ぐに結果が現れます。先ず始めには注意力が不安定になります。それというのも知能の役割と信じられている注意力は、その殆どが眼による機能であるからです。しかし、その眼が最悪です。読書三昧の後は眼のことをよく考えて下さい。その時は眠ろうとするでしょう。あなたは深い夜の底で、光輝く植物の素晴らしい開花を見るでしょう。そして、それが夜のものでも昼のものでも、私たちの夢を織りなすのは色々な豊かな色彩であることをよく知って下さい。その様にして本の読み過ぎは夢の見過ぎを齎し、生物学的観点からも怠惰となり、悲しい気持ちになります。

薬はあるのでしょうか。先ずは読書と呼ぶような近距離の慌ただしいせつかな知覚をもう眼に与えないことです。遠くを見ることです。それは魂に休息を与えると詩人たちは言っています。それは本当のことです。何故なら、それは眼に休息を与えるからです。

そして、次に本の中から教えて貰う代わりに、人間や馬や犬や家や樹木を見て下さい。これらのものは丁度良い距離にあつて色々な色彩に変化していて、あなたの眼は均衡して平静になるでしょう。そんなにも昔のことではないのですが私は、深い考えを持った人が次のように言うのを聞きました。「ノイローゼ患者は思い出や計画によって生きます。最早、現実の知覚がありません。ノイローゼに効く本当の薬は、実際に存在する対象だけを考えることなのです」。

(一九〇七年三月二一日)

二十三 完璧な宇宙 (UNIVERS IRRPROCHABLE)

浜辺に座っているミシュレは、波が疲れを知らないように大地を行ったり来たりしているのを見ながら自問しました。「あなたは何をしたいの?」。そして次のように答えて、その声に同意しました。「私はあなたの死を望む」。この言葉は半分しか詩人のものでなく、恐らく冷酷なものでした。現世というこの世の劇場で一寸した悲しみを歌わせたり踊らせたりすることは悪い悪戯です。あるいはそれは寧ろ悪い夢です。もっと良く見てみましょう。事物は私たちの情念に応えてくれません。それらは私たちの観念に応えます。

私たちは理解したいのです。それはもう一つの欲望です。その中で私たちが腐敗することはありません。私たちは十分明瞭に報告しなければなりません。その足し算の結果は、それを足したものによることであるとしか誰も考えません。真実の結果です。全ての統一性が明らかになるに違いありません。力を入れて言われるように私たちはそれを明らかにしたいと思います。私が認めないこと、許さないことは、水滴が一滴でも失われて行くことです。洗面器の中でも波は行ったり来たりします。各々の水滴は他の水滴の上に持ち上げられて均衡するまで行われ、波一つない水面になります。浜辺で私の足元のこの底の浅い海は、ハンケチのように広がって大きくなり、絶えず縁をくっきりと浮き立たせて、小石や貝殻が周りを囲み、完璧な英知の力に従っています。広大な大洋も同じであることを私は知っています。何処までも遠くて奥深い処に月があり、太陽があり、潮を引っ張っていきます。私はそのことを見れば見る程、そのことを知りません。全ての歯車が噛み合い、接合してぴったりと合って、私としては満足です。〈宇宙〉は非の打ち所がなく完璧です。浅瀬の海は私の足を濡らすことが出来ますし、大洋は溺れさせることが出来るのも私は知っています。しかし、それらの非難は全てが的を外れています。私は足を濡らしたくもなければ溺れたくもないと望めば望む程、私は満足がいく説明を求めて順序立てて考えて答えることになります。波は完璧によく答えます。最も激しい嵐の時は、一滴一滴が潮の流れや風や岩とともに生まれる単独の場所で、単独の動きが正確に生じます。洪水は雨と土地の傾斜によって発生し、雨は風や雲や気温によるものです。そこには事物にとっての正しい解答があり、美しい人間の言葉が生まれます。私たちもそこに繋がっていて、人生そのものです。物凄く気まぐれな水の流れや、突然に斜面を遡ってくる水の勢いから助かろうとするのは誰でしょうか。恐怖の中で祈り続けて生きようとするのは誰でしょうか。

私たちには二つの望みがあります。宗教的な救いと秩序です。〈宇宙〉は確かに秩序を与えております。それは全てではありませんが、些細なことでもありません。ヴォルテールの戯曲「カンディッド」の登場人物であるこの愚か者のパングロス博士が全て良いと言うや否や、全てが混乱します、しかし何かを言ったのです。全てが良いのではありませんが、全てに秩序があります。部分的には不完全でも、それが良くなっていくのです。(一九一〇年十二月五日)

二十四 祈り (LES PRIRES)

女友だちとともに他人の所有地に迷い込んだ内気な若い女性は、遠くからやって来る一人の男を見て叫びました。「田園監視人でないように、神に祈りましょう」。そのような祈りが馬鹿げたことであることは、分かり切ったことです。何故なら、私たちが男を遠くから見るとき、現在の状況では誰であるか分からないことに変わりないのですから、ピエールでもありポールでもあるかも知れません。そして、「それはピエールである」「それはポールである」という二つの断定の間で私たちは躊躇します。ある時はピエールであり、又ある時はポールであるように、二つの成り行きの間で躊躇しますが、それは私たちが想像力を働かせるからです。

しかしながら、その内気な若い女性を馬鹿にする多くの人も、屢々彼女と同じように祈りますが、田園監視人でないように祈るだけではなくて、雨が降ったり寒くならないようにと祈ります。或る人は雪を降らせそうな雲が町の上空で雪にならないようにと祈り、他の人は雲の主である神について考えることなく自分自身に向かって次のように言うでしょう。「明日は雪にならないように、私は何かを捧げることでしょう」。

何人位の人が雨や風を告発し、次のように言うでしょうか。「しかし、何と事態が大きく変わってしまったことか!」。そのようなことを考えていくと、事件の前後に起きる情念に力を与えて、傷口を大きくしたり眠りを駆り立てます。つまり一言で言えば屢々、事件そのものよりも悪い事態を招きます。そして宗教上の精神の本質は、物事の中に或る種の自由があると信じることであり、ヨシヨア(1)のように何時も折ったり希望を抱くことで、太陽を遮ることも出来たのだと本当に私は信じています。

もしも、すべての物が緊密な関係にあると理解するなら、そのやり方を良く知らない時でも遠くからやって来る人を若い女性たちが見るように、未来が私たちの処へやって来ると考察するに至るでしょう。その時は遠くからやって来る人は、田園監視人でも散歩をしているピエールでもポールでもありません。しかし、私たちの中で一番賢い人は、既にその分別からは遠く位置し、世の中の秩序と自分の夢想の中の無秩序とを混同させます。かくして、祈りは〈神々〉よりも長く続いていくことになるでしょう。

(一九〇八年一月五日)

(1) モーゼの後継者で、イスラエル人を率いてカナンの地を征服しました。旧約聖書にヨシヨア記があります。

二十五 事故（必然性）（L'ACCIDENT(NCESSIT)）

煙突が風に揺れています。遂に崩れて、小石が通行人の頭に落ちて亡くなりました。この事件は六行の新聞記事になって読まれましたが、この種の事故は日常的なありふれたものと思われれば思われる程、最早そのことを考えません。

しかし、もしも煙突の石で殺されたのはあなたがよく知っている誰かであったなら、その時あなたはこの事件のあらゆる状況を注意深く見るでしょう。そして、あなたはこの出来事を容認しなくなり、否定しようとしめます。あなたは次のように自問します。煙突はもう少し長く耐えることが出来たかもしれない。風がその時もう少し強くなく吹けば良かったのに。その人が別の通りを歩くとか、古本屋へ這入るとか、歩道を歩くとか、漬をむために立ち停まるとか、水溜まりを避けようと引き返すとかすれば、事故は起きなかったのでしょうか。そして、これらの変更が可能で、実際に容易であつと思えた時に、私たちはこの事故以外のことを望まなかった何か宿命という敵を告発します。

その場合、私たちが騙されていると感じることは、この事故が発生させられたものである限り、事故にならなかった他の行動というものが可能であったように思えて仕方ないのです。或る人にとっては同様に、水溜まりの左側を通ることよりも右側を通ることの方が難しいことではないと私たちは考えます。

その様に判断するのは、私たちがそれらの間の全ての事物の関係を良く知らないからであり、どのように人間の行動がそれらの自然と状況とに綿密に起因するかを良く知らないからです。近視の人は足元を濡らすでしょう。ぼんやりしている人も同じように濡らします。しかし、原因は別にあります。右側に傾いて行きます。何故なら彼が水溜まりを発見した瞬間、地面を支えていたのは左足で右足は動いていたからです。そして、この姿勢は彼がとった足の動きによるものでした。各々の歩みは順番に前の一步に続いて行われ、彼が見たものや聞いたものも同様に順番に行われます。あらゆる状況が別のことに結びついておりました。風と雪と時間と季節がそうです。この様にして用心深い人間が歩いて行く処を知っていたかの如く、通りに沿って自分の歩く道を見出している間、幾つもの状況は彼を事故へ向かわせていたのですが、それはまるで風が、乾いた枯葉やふわふわした雪を運んで行くようです。

あなたという人は、石が落ちてきた時、一メートル以上遠くに離れた場所にいることも出来たのではないかと尋ねますが、あなたは何てつまらないことを尋ねるのだと思います。実際にその時のあなたは、別世界のことを言っているのです。それというのも全ては結びついてからです。そして、一瞬前には別の場所にいるのであり、一瞬から一瞬へ別の場所になり、何世紀にも亘って別々のものが存在しているのです。そして多分、これらの変化したもののうちの一つがあなたを殺したことになり、あなたは大変に正しい推論をしているのです。

それ故に存在しなかったかもしれないもののことなど信じてはなりません。それは子供の思考です。子供の思考は誰にも残っているとあなたは言います。その通りです。私も同じことを言います。それでもなお英知は、それを所有する者たちの役に立つものです。

（一九〇八年四月二四日）

二十六 (可能事と不可能事)

十世紀程前に彗星が現れて殆どの人々は狂ったように大騒ぎしました。彼らはびっくりするような奇跡を待ち、そして全てのものが崩壊するのを待ちました。その点で彼らは決して狂気に陥っていないと思っていましたし、反対に極めて理性的だと思っていました。彼らにとってこの世の秩序というイメージとは、何よりも天体の規則正しい運行の他はないと認めなければなりませんでしたが、彗星は既にその秩序を崩壊していたものの一つでした。

狂気は何時も自然に科学的状態、つまり常識の教育と相対的に関係しているものでした。私たちが夢と言っている観念を誰も生み出さない時間があるのを私は理解しています。そして、恐らく彼らが現代の私たちのように夢を見た時、つまり疲れた眼に具合の悪い胃、冷えた足の指先、そして喧しい騒音が彼らを襲っても目覚めさせることがなく、すっかり眠った儘刺繍をしたなら、あなたは彼らが蓄積した経験に一つの観念を生み出すことができます。それというのも彼らは自分たちの夢が、この世の実際の出来事だったと信じていたからです。その時代にあっては、最高の狂人たちが良き時代を作っていました。

それから私は、どんな猟師が夢を見ながら眠っているように狩をしても、獲物を見分けるようになるのか分かりません。彼は跡に何も残しません。本当の狩猟は獲物を残していきます。しかし、そのことは何かの言葉を残して行われるべきものではなく、お互いに理解しているか、他者とに社会性がなくてはなりません。孤独な人間は、視力を自由にして眼で見るが出来ないと思います。要するにそれはだんだんと個人がもっと先見の明を持って、安定した社会になることを想定し、狂気が限定されること、つまり可能事と不可能事が口に出して言われるようになることでした。嘗てその役割は宗教や司祭たちのものでした。そして、彼らは常識という敵、つまり一般的意見の敵として、大変上手に二種類の人間を焼き殺しました。一つは不可能事を可能事にする狂人たちです。もう一つは公職にない学者たちで、彼らは狂人たちと反対に一つや二つの奇跡から免れることを主張しました。進歩も又ゆっくりとしていました。侵略、ペスト又は狂人の何かの予言による偶然の成功は、〈神々〉を低い地位に連れ戻すのに十分でした。

常識が最後には教義となるためには、安定した学校教育が確立されなければなりませんでしたが、世界は殆ど奇跡とは係わりがありませんでした。ハレー彗星のことを考えて下さい。この奇跡を現実の世界のものに変えるためには、地球に接近して来る計算をして観察し、一致させねばなりませんでしたが。ハレーやクレローやパングレやポンテクーランにとっては、只単に念の入った長い計算という方法ばかりでなく、余裕とか安全とか毎朝玄関に来るパン屋の子供も必要としていました。私の友人たちは皆同じで、一人ひとりが仕事に就いていて、この共通の〈智慧〉を築き上げるために働き、最後には彗星の軌道を描いたり、奇跡をその秩序の中に戻したりします。女神コンコルディア(1)が〈神々〉を追い払った美しい神話を私は想像しています。

(一九〇九年十月十九日)

(1) ローマ神話に出てくる和合の女神で、市民の間の和合を表している女神。

二十七 (伝統による正しさ)

消毒についてが一番新しい研究は、学者たちを導いてオーデコロンや火で赤くなったシャベルの上で燃やしていた砂糖を、近代のものにさせていきました。半賢者はプロポについて次のように言いました。「あなたは伝統を全て軽蔑すべきものでないことを知っている」。しかし、伝統はどのようにして軽蔑すべきものになるのでしょうか？伝統は蓄積された経験によって生まれたものです。毎日の経験が反対することを主張して、真実として繰り返すことは少しも本当らしくありません。誤りを消去することは創造を欠くことでしかなく、真実を知ることは大変にゆっくりしたものです。手探りで行う模索するようなこの方法は嘲笑されます。何故なら現代は、真の原因と真の法則を探求するためにお金が支払われる専門家の時代であるからです。しかし、手探りの模索的な方法が、小麦農業文化や帆船操縦や放牧の品種改良のように、びっくりするような発見が私たちに齎されたことを忘れてはなりません。そして、私は良く分からないのですが、例えばどのようにして伝統から星々や太陽や月や惑星の運行という問題を解決し得たのでしょうか、オリオン座とその三つ星は一月の夜空を飾るもので、大犬座のシリウスもそうです。誰でもそれを確認することが出来ます。火星は今、夜が始まる頃には東の空にあり、午前二時頃には天頂を通過することを私は新聞で読みます。私は惑星を探し、そして見付けます。私たちは家にいても、人は眼に見える日食を教えてください。私は煤を付けたガラスを持ってきて見ますし、もしも私が知らなかったとしても、ありそうにない話ではなかったと認めることが出来ます。それらの計算は高度のものですが、その結果ははっきりと見ることが出来ます。眼を開くだけで十分です。そうです。天文学上の伝統は、そんなにも過去を遡らなくても、何時も科学的雰囲気があります。

絶対的に間違った伝統が経験から言って肯定出来ることが問題になるや否や、少しも本当らしくないことを言うことさえ出来ます。ですから私は当てにならない薬を先入観から馬鹿にしませんし、薬草の煎じ薬も馬鹿にしません。

それに反して、決して経験に陥らないで断定することが大切であるとなると、私は如何なる伝統も信用しません。何故ならどうしても間違いが除かれることが出来たかを全て理解しないからです。〈神〉とか幽霊のことを話す人は、何でも構わないでよく話せます。同様に同じ人物が幽霊の出現とか奇跡を、別の驚嘆した出来事の後で話を続けて、何もリスクを冒しません。何故なら彼が話す出来事は、繰り返して行われることがないからです。例えばキリストの復活とかラザロの復活とかは、現在では経験から理解できる出来事ではありません。というのもその話は繰り返すことが出来ないからです。それ故この種の認識においては語り手の気まぐれが自由であり、彼が王様です。そして、私たちが神学とか宗教的な話を何らかの点で調査するのに労を惜しまない時、恐らく狂人の話も調べることになるのでしょうか。ですから実証的な確実な認識が重要となる時は、伝統が高い価値を持つようになると私は言いたいのです。しかし、歴史とか宗教が重要になると、伝統は何の価値もありません。そして、その点についてもっと言うなら、私は反対のことを言う人々を正にかなり沢山知っています。

(一九〇九年九月七日)

これは私が考え出した歴史の一頁ですが、それでも真実です。ことの起こりはシシリア島で、その島の中の何処かです。数字についての高度な研究をした後に、ピタゴラスは正義と不正についての高尚な対談を誰かとするために一息入れていました。私は、香気に溢れた庭とか岬で彼ら二人の姿を眼にします。私は沢山の弟子たちの中に、プラトンを入れたいと思います。プラトンの魂はピタゴラスと一緒に旅をします。多分、アルキメデスも入るでしょう。しかし、歴史家はその中に入っていない。何故なら、お互いが実際に歴史的に出会うことがないなら一緒にすることは出来ない、と歴史家は言うからです。でも、お互いが実際に会う方法は沢山ある、と私は教養のない歴史家へ説明しなければならないのでしょうか。あゝ、年表なんか私は気にしません。

それは夏の夜でした。昨日のように多分、月は岸边から火星と土星の間の空へ移動していました。恐らく、彼らは大地の起伏の上や、疲れを知らないかのような波の動きの上に眼を据えていました。彼らが人間として運命の方へ腕を伸ばして受け入れる間に、星々は回転し、ついに太陽が出てきて彼らを驚かせました。私にはその朝、蝉や蜜蜂が美しいコンサートを開いているのを考えることは喜びであり、羊飼いは笛を鳴らし、山羊たちの鈴の音がそこに巻き込まれます。かくして思想家ピタゴラスは、弟子たちとともに足取り軽く戻って来て、あらゆる苦勞が報われます。

ド！ ミ！ ソ！ 村の入口にある道の曲がり角で、鍛冶屋の槌の音が歌っているようでした。これ等の偶然がなかったならば、私たちは多分何も創り出せなかったでしょう。ド、ミ、ソは詩法と結び付いています。ピタゴラスは立ち止まり、槌の重さを量り、それ等の重さは各々がどれも皆同じ重さであることが分かりました。そして突然に、槌の音のハーモニーには数字の法則があることを認識しました。これはもう一つの日の出であり、全てのものの上を照らすもう一つの光でした。「つまり全ては数字である」とピタゴラスは言います。それ以上は言いません。しかし、最も美しい人間の歌のように、これ等の言葉が私たちの裡に鳴り響きます。

それは難解でした。不確実なことでした。この数字の力について考えて見ると、今日でも人々は沈黙して仕舞います。数字が是非とも必要としているように、何故数字通りの新しい惑星が生まれるのでしょうか。何故これ等の夥しい量の炭化水素が、いわば坩堝の中に現れる前にペン先の机上に生まれ、数字上の量と一致することが分かるのでしょうか。数字が全てです。全てが数字に従っています。

地球の表面の土を搔いていた思想家は、多分それに値するまでの探求を他には決して行いませんでした。二〇〇〇年以上経っても、この見事な思想は再び新しい小枝を付け、果実を実らせました。王様も今では立像や墓石になっただけです。勝利者も敗者も腐り果て、死骸の上に死骸が重なっています。しかし、ピタゴラスの精神は今でも私たちとともに生きて、現代を旅しています。彼は先日、プラトンに次のように言いました。肉体は滅びる、しかし思想は何世紀も跳ぶように生き続ける。これが真実の歴史です。しかし、歴史学者はそのことを軽視します。歴史学者はヘロドトス(1)が楽しむために書いた繰り返す言葉を、真面目腐って出版する方が好きなのです。

(一九〇九年十二月一日)

(1) 古代ギリシャの歴史家で、『歴史』を著しました。

昨日の夜、大熊座が地平線上に横たわっていました。カシオペアのジグザグ状の舷燈のような星々が、北極星と反対方向の上方に輝いていました。青い星のベガは上空の天辺に輝いていました。西方の空には牛飼座のアルファ星が、冠座と真珠座の間に沈んでいきました。その上方ではアンドロメダ座が長々と横たわり、沈んでいきました。その北方ではペルセウス座が欠けた首飾りのように輝いていました。これ等の名前は古くからあるものですが、空の装身具のようなその輝きは、名前が付けられた時よりも古くからあります。古代バビロニア地方のカルデアの羊飼いたちが見た星々の光も、私たちが今見ている光と同じです。今の季節のこの時間、宵の始めに古代ローマの詩人ヴェルギリウスも海の中に沈んでいた星々が昇ってくるのを見ることが出来ましたが、古代トロイアの英雄アイネイアスの水先案内をしているかのような光景でした。

大地へ眼を戻すと、全てが変わっていました。全てが刻一刻と大変に早く変わっていき、その対照が心の底にまで感動を呼び起こさざるを得ません。急流は岩によって二つに分かれ、岩そのものも砂へ姿を変えていきます。花崗岩の鋭峰がその形をやっと見せますが、雪や雨に耐え、石灰質の斜面はふくらんでいて、粘土が縞になっていて、まるで水が流れているように見えるのは、少なくとも悠久の日々を送ったからで、十世紀は一瞬に相当しました。水面に映る光のように私たちの情熱は移りゆき、欲望は未来の時をむさぼり食います。しかし、もしも新たに星々を見たならば、時の流れは突然に停止して、私たちは星の世界と永遠を知るでしょう。

神々が私たちに星々を与えたのは規範のためであり、事物は自然と流れてゆくが、私たちには自分の考えに秩序や休息が必要であることを示しており、そのことを強調したのはプラトンでした。もしもプラトンが詩人について語ったとしても、そして心の底で私たち自身が神であると一瞬信じたとしても、そのことは認識することが出来ないのです。何故なら、彼が人々と話をしている間に、乳母や小さな子供たちに対しては訳もなく微笑む動作をしていたからです。彼はいつも思考の偉大さと奥深さについて語っていましたが、それ等は明らかに大空の動きであり、事物を探求する道筋にとって最初の観念を人間に与えるものであるからです。そこから権力や正義という考えが出てきて、実際に大空から落ちてくるように見えますが、それは聖職者たちが言っていることとは全く別のことなのです。

それ故に、既に今日では本当のところ星空は人間の一生を左右しなければなりません。さもないと大人たちの気まぐれや子供たちの叫び声が、現代の私たちを悩ませることになるでしょう。そこには人間性というもの、人間機械というもの、人間の知恵というものの規範があります。そこに関係しているのは町の立法者であり、自分自身の立法者であり、詩人であり、そして善良な老母であり、全ての人たちが同じものを探求します。或る人たちは〈神〉が支配者であり、他の人たちは〈法〉ですが、すべては人間が王杖であり、冠であり、各々の人たちがそれを望んでいるようです。或る者はそのイマージュを思い描き、又或る者はその本を読んでいます。

(一九〇九年九月十五日)

誰でも最近眼にすることが出来たのは、月が昇ってくると、大空の始めの四分の一は月が木星の傍にあることです。最初は木星の右側にあり、次には左側にあつて、黄道帯に沿って沈んでいきますが、それは太陽や惑星や月が昇ってくる軌道です。これより前の二太陰月のときも殆ど同じ運行が観察されましたが、どのようにして月は三日月から満月になり、それと同時に金星から木星へ接近し、そして遠くへ離れていくのかが観察されました。これらの現象は大変容易に眼で見ることが出来ます。人は自然に大変感動させられ、自然について勉強するための入門のテキストを利用することになるでしょう。月や星々は急速に変化します。勿論、それは規則に則したものであり、狂いが無く正確で、余りに複雑なので人間の精神が自由にさせられることが少なく、その中で法則を発見するのでしょうか、神の救いというものには殆どありません。そして、恐らく人間が現実的認識という初歩の観念を身につけたのは、その法則を見詰めているうちです。それと言うのも、私たちを取り巻くものや私たちが取り扱うことが出来るものは、その方法によって私たちが望んだり、人々が行う意志と同じものであるからです。それは柔軟に対応する必要性です。しかし、上空の月は柔軟に対応出来ません。この柔和な月は私たちの手の外にあり、そこから私たちは端倪すべからざるものを掴む別の方法があることを理解します。しかし、単に知ることは見たいということであり、本を読んで知ったと言うことではありません。月が東から昇り、天空から西へ回るのは何なのでしょう。地球が自転し太陽の周りを回っているのを人は知っています。月は地球の周りを回っているのを知っています。しかし、それは抽象的な知識です。美しい月は丘にはっきりとした影を落とし、谷の中の湖の白い霧は全てのを覆っています。情操という感情は決して観念を温めることがなく、観念が情操を明るく照らすことも決してありません。月影が一つの方法を理解させる時は、一瞬が純化した時だったのです。

私たちはナイチンゲールが鳴く夕暮れ時に、高いテラスの上におりました。月はじっとして動きを止めた如くであり、若木が落とす影がはっきりと見えました。そして、私はその影に沿って正確に杖を下に置きましたが、その影の動きは直ぐに敏感なものようになって私を驚かすまでになりました。年老いた女中は知識もなくそこで夢見ているかのようでしたが、奇跡を見るように感動し、彼女の視線は何度も曲線を映す影からじっとして動かない月へ向かっていました。詩人ウエルギリウスは美しい湖のような所におりましたが、そこでは全てのもので映し出されておりました。しかし、現代の詩人たちは真夜中の月なら三日月を望み、その夜は金星が地平線に昇ってくるのを望みました。私たちの心はこのように無秩序でしかなく、私たちの精神は計算をするしかないのです。

或る夜、私は科学という小さな荷物を労働組合に与え、天文学を始めようとする、生真面目な人が私に次のように言いました。「私たちが知っていることは、太陽が正午になれば、発砲させる大砲が一台あるということだ。それが天文学だ。しかし、友よ私に言ってくれ。正午に腹が減っても食べるものが何も無い。これが天文学なのか?」。私は一瞬答えに詰まりました。しかし、現実に来ることしか考えないということ、それが人間の能力なのでしょう。か?」

(一九一一年七月八日)

沢山の海藻や、きらきらと輝く水溜まりや、小さな溝を残した儘海水が引いて行く時の浜辺で、小学校の教師は天文学者に出会いました。小学校教師は学び、天文学者は教え、二人とも誠実でした。何故なら彼らは友人だったからです。教師は言います、「私が、行ったり来たりするこの海水を見て既に何年も経ちますが、ある時は海水量が多く、又ある時は少なく、カレンダーどおりです。海水量が多くても少なくても、私がここで小さな子供たちに何年もの間教えてきたのは、月と太陽の引力の結果この地球の水の部分に潮が起きることです。子供たちは私を信じています。何故なら私を大変に愛しているからです。子供たちにとってはジャンヌ・ダルクとかアンリ四世とかでも同じように信じます。しかし、私は自分の言葉が彼らの経験とは関係ないことも良く理解しています。彼らにとっては二つの潮があります。年に一回私が彼らに話すものと、一日に二度彼らの足元を濡らすものがあります。そして、それは自然なことです。何故なら私も又自分の最善を学ぼうと思ったのですが、話は空中に舞っているように余りに漠然としていて、余りに事実から遠く見えます。本当の思想を子供たちに与えるためには、あなたのような能力のある人間がいなければなりません。少なくとも教師を教育して下さい」。

天文学者は空に眼を上げ、続いて地平線の方へ向けましたが、それはまるで大地との境を吊しているように見えた無数のさざ波を生んでいる震えた大量の海水を捕らえたがっているようでした。その次に視線を泡の広がりに戻しましたが、それは自分の足元を流れて行きそして交差していました。海藻の香りは強壯剤となって彼の裡に染み込んでいきました。彼は爽やかな大気を吸い込み、世界のあらゆる力を受け入れました。

彼は言います、「潮は余りにゆっくり進みますから、最初はあなたもそのメカニズムを感じる事が出来ました。しかし、あなたはもっと見慣れた揺れた光景を与えられることになります。ご覧下さい。海の水の水面は、鏡のように平らではありません。海水が山となり谷となって私たちの方へやって来るのがあなたには分かります。あらゆる水滴が高い処から低い処までバランスをとって各々の水の一団が上がったり下がったりして、まるでお盆を手に乗せてバランスをとって持ち上げたり下げたりしているようですが、あなたはこれらを良く見ることから始めて下さい。それと同じことが私たちの足元でも行われています。海水量が高くなってくると、その時は山のようになった海水の麓部分が私たちの処まで滑り込んできて小石の間を流れ、そして小さな流れとなって遡って行きます。海水量の山が低くなると、同じ海水ですが再び下がって行きます。それは私が描写する方法を覚えることよりも早く行われてきたことを分かって下さい。それが潮の動きです。小さな流れに沿って子供たちは港を幾つも持っていて、一分以内に海が上がってき一杯になっては下がって行き、そして再び一杯になります。多くの波の中で最も高い波を想像して下さい。その底には最も大きな土台があって、約六時間は前進して来て、そして次に六時間後退して行きますが、それは数キロメートルにも亘っています。それが潮です」。

彼はつけ加えて言いました、「しかし、小さな波は風によって起きますが、それに反して潮による波は月の引力によって起こります、と言ってから彼は、砂の上に円を描きました。地球には液体の広がりがあり、地球自体は回っていないと単純化して仮定しましょう。あなたはご存知のように、地球はある意味で月との距離を保つ速度で水の方は月の方へ落ちていきます。ですから最も接近した時の水の部分は最も速く落ちて行き、最も遠くなった時も速くなくなります。水の球体が二つのふくらみを持っていること、あるいは二つの潮を持っていることとは、一方は月の側のふくらみであり、他方はその反対側です。今は地球が回っていることを仮定してみましょう……」。

「話を止めて下さい。私は波が高くなったり低くなったりしているのを何時も見えています。そして、何

かを理解するだろうと信じています。しかし、どんなに小さなことでも理解出来るまでには時間が必要です」と教師は言いました。既に太陽は沈みました。人生は短いのです。

(一九〇九年七月二七日)

「何も自分では失いませんし、何も作り出せません」。私は自分の周りで起きる出来事にこの法則を上手に当て嵌めようとするのですが、既にこの法則を私は本で読むことはありませんし、あなたもそうです。それというのも表面的には多くのものを生んでいるからです。小鳥たちが生まれます。子供たちも生まれます。花々が咲きますし、芝生も生えます。私のペン先は、一寸前には書かれなかった言葉を書いています。一匹のまるはな蜂が矢車菊の花から花へ蜜を漁っています。私も花もまるはな蜂も現在の時間を再び取り戻すことはありません。全てが過ぎ去り、全てがすり減ります。そして、谷間の先に突き出ている岩だらけの岬も同じです。小石だらけの穴の中にもよく分かります。全てが一瞬一瞬に新しくなります。全てが次から次へと変わっていきます。全てが失われ、全てが生まれます。そこから尋常でない恐れや大それた希望が生まれ、祈りや後悔が生まれます。「何故それらのものは他のものではないのでしょうか？」。スーザンは移り気で結婚が駄目になった、とフィガロが信じて言ったように。

この古い考えを打ち破るためには長い時間がかかりました。その考えは少人数の人たちが打ち破っただけでした。というよりも全てを打ち破るのは不可能です。太陽の熱はコオロギを暖めるが、他の面では消費や冷却や太陽の衰退を誰が仮定するのでしょうか？ 石炭は二度暖めてくれないし、一抱えの木材は何時も殆ど同じ水量の水を沸騰させるのを私たちはよく知っています。しかし、何と多く同じだけの例外や気まぐれがあることでしょう！ 何回も新年を迎えますし、パンも増産してきました。

全てをきちんと整えるには、何世紀も必要としました。アメリカの物理学者リユムホールのように、大砲の砲弾が掘る穴から水を沸騰させることが出来る熱量を量らねばなりませんでした。量ることとは応力と仕事と同じで、結局何千回も確認することであり、不自然で奇妙な原因を追い払って同じ仕事量が何キログラムで、そして何メートルであるかを算定し、常にその水と同じ量の氷に変えますが、同じ水は水蒸気にもなります。黒色火薬は最早悪魔の缶詰ではなく、その燃焼は非常に早いものであり、ガスとなって熱し、何時も同じ法則に従った当量で砲弾を発射するための決められた仕事量を行います。ここで引き合いに出すことが出来るのは、何時も一致した経験という最良のものです。以上の考えから出てくるこれらの変化には、エネルギーと呼んでいるものがあって、それは消費することも生産することも出来ません。以上のことから新しい知恵が生まれて、何か奥深い考えを持った学問に通じるようになりますが、それでも表面的には普通の方法でしかありません。

私は既に再販までしている作品が称賛されているのを見ながら、このことについて考えましたが、その時に基本となっていた法則は、人が言うところのラジウム(1)による急激な変化によって破滅させられることです。美しい奇跡です。そこでの法則に対して十回に九回は表面的には本当らしく見えます。走るのに最も優れた犬は、エネルギーを生む雰囲気を持っています。しかしながら学究する多くの人々は、法則性が無いと思われる生命力について何回も話をすべきものであると思っています。人生の活動の中に心の糧となる絶対的なエネルギーに等しいものを見付ける人は少ないです。狂人が私を驚かすとすれば、それは狂人が示す非凡な力です。しかしながら私がそれを上手く把握するには、私の方程式に整理することであると信じるばかりです。その様にして私が少しばかり裕福になれば、ラジウムを扱うようになるでしょう。しかし、人をびっくりさせることしか望まないほら吹きという者がおります。そして、私たちの心の底には古くから拍手喝采を望んでいるところがあります。しかし、私としては最早奇跡というものを理解したくありません。最新の船舶を研究する二人の物理学者は、私の前で次のようなことを言いました。一方の球が他の球とぶつかる時、その衝突は二つの球にとって多分同じ瞬間ではありません。その点についてアカデミー会員たちは大きな眼を開いてはつきりさせることでしょう。しかし、ものは言い様でしか

く、彼らの話は人々に理解されることもなく、あっという間に手品の球のように消え失せて仕舞います。

(一九一〇年十月四日)

(1) ラジウムは、一八九八年にピエール・キュリー、マリー・キュリー夫妻によって発見されました。

或る人が言いました。「あらゆるものは崩れていく。あらゆるものは滅んでいく。そうです、全てのものは消えて無くなる。正午を告げたこの大時計も、やがて動かなくなる。その重りは可能な限り下へ降下していく。そして、もう一つ別のもっと重い重りが同じように降下していくことによって再び上昇することになるが、それは可能な限り行われる。あなた自身は再び上昇させ、一番低い時点で糧となる水準に戻して、何か別のものの落下によって時計そのものを再び上昇させることしか出来ない。つまりあらゆる動物の食料となる植物は、太陽光線という大きな滝によって植物自身は再び上昇して行く。多分、太陽は均衡方向へ落下する質量として別物にはなり得ない。時計の重りが落下するのと同様に、微妙な物質が太陽の上に降下するのであって、その均衡によって熱を出し、空間を通過して熱の波動の活動となってエネルギーを散逸する。全てはそれで終わりである。熱は発散し、より熱いものからより冷たいものへ移行して行く。化学的な変化は、全てこの法則で生まれる。重量が静止に向かって降下していくのと同様に、化学的変化の均衡も常により低い方へ転げ落ちて行く。爆発物は最後に爆発し、最早無害な大地に帰るしかないのだ。あらゆるものは燃えると言うことが出来るが、その意味で結合ということが行われ、何時も最も熱い熱を発散するものになる。そして、例えばニトログリセリンを製造するように体を元気にするには、熱を発散しながら何か他の落下を何時も必要としなければならない。大きな爆発を準備するためには小さな爆発がなければならないし、何時も熱の発散が伴う。つまり全体を均等にすることであり、相違を解消することであり、そして次に均衡になるまで最も冷たいものを、常に最も熱いものが熱している。私は全ての世界の終わりを予言するが、それは全ての活動が摩滅することによって、全ての温度が均等化されて行くのだ」。

もう一人が次のように言いました。「ユダヤの予言者エレミアにとって法則は一つだけでは不可能です。それというのも、もしも全ての相違が常に同じ意味の中での生成によって消されねばならないとすれば、既にそれは現実のものであるからです。そうです、それは既に事実となっています。この世は既に均衡状態にあります。何故なら、考えてみて下さい。時間が不足することは決してないからです。大昔に遡ってあなたの法則に従えば、全ての変化は既に熱の発散や均衡化や平等化が行われてそうになっていたのです。しかし、何かのエネルギーが此処や彼方に遡ったならば、それは表面的なものでしかなく、別のものの落下による水切り遊びでしかなく、全体の中の平等化になりますが、零れた水は波にも渦にもならず、決して平等化しないことが分かります。ところがもし平等化するのであったなら、それは既に過ぎた過去のことであって終わったことです。何故なら、その背後にある時間は人が望むのと同じ長さを持っているからです。一度に均衡が確立されて、何ものもそれを変えられないためです。もしもこの世界に決して始まりというものがないならば、そして均衡へ向かっているとすれば、既に今はそうになっている筈です。ところが今は決して均等化されてそうになっていません」。この様に二人のピタゴラス派の学者は議論していましたが、その間に既に大空の中空に月が昇ってきて、それと同時に火星も土星も昇って来ました。

(一九一一年八月二一日)

三十四 (野菜の皮)

雷雨による最初の突風が吹いた後に何分か経つと、砂を撒いた中庭に侵入してきた様に土砂降りの雨が降り、無数の水の流れが生まれ、勢いよく広がっていきます。それは一寸した大洪水でした。その間、ピエールとポールのように誰もが城門の下に非難し、木の葉の渦巻にびっくりしました。大空の周りの端はぎざぎざとなって日が照り、それらの足元に少しずつ秩序が生まれます。その場所で最も弱いものは吹き飛ばされましたが、それと同時に水は今でも眼に見えない谷に落ちて行きました。一番速くて強い流れは、直ぐに穴を掘りました。小さな流れが皆そこに流れ込んで行きました。それらの水は一杯になって大河になり、兩岸や支流もあります。このようにして乾燥した所と水気のある所とが分かれ、世界が混沌（カオス）から抜け出しました。

ピエールは「そこには創造があります。物事はまるで常に何かの〈摂理〉がこの世を住めるように力のゲームを解決したかの如く行われていきます」と言いました。

ポールも「そうです。〈摂理〉は少し不器用で、川にとって最良の土地はどんな所かを探しながら検索することでしょう」と言いました。——そして、ポールはつけ加えて言いました。「斜面を下って行く水は全く単純です。私たちが今、あらゆるものの必要性を手に入れたなら、最も優れた哲学者の視線にはどれ程の渴望があつて、そして洞穴の入口でどれ程止まっていることでしょう！」と言いました。

ポールは更に言いました。「しかし、次から次へと神々を追い出す訳ではありませんでした。何故なら、もしも水が流れるのは可能な場所であるのが明白なら、眼は見るために上手く作られているように見え、耳は聞くためにそうであり、あらゆるものが人間は生活して考えることが可能なように創られているように見えるからです。そして、私たちは小川の川床のように、物質の逆流や渦巻は人間の眼によって創られていたと想像すべきではありませんでした。それ故に最も優れた学者たちは、物事や労働者の仕事に計画を見ざるを得ませんでした」。

ピエールは言いました。「何故ですか？ どうして見る者は見ることを自然な行いとして理解しないのですか？ 私たちが知る限り、この小石は見ることをしません。そして、そのことは決して私たちを憤慨させません。此処にある小石はその形を保持しています。彼処には水の流れが齎した砂があり、その上の方には水の流れのような大気の塊が広がっています。此処には光が輝いていますが、彼処にはありません。此処に私がいて、彼処には眼で見たものがあります。各々の事物の周りやその中で全てが何時も整えられています、それはあるが儘のものとして見做されます。というのも如何にして別のものになるのでしょうか？ 人が野菜の皮を掃く時、各々の野菜の皮はあるが儘のものとして、纏まった渦の中で全てが折り合い整えられます。もしも野菜の皮が思考したなら、恐らく箒で掃かれている間、その野菜の皮として存在し続けていることが許されていけばいる程、その秩序に驚嘆します。そして、もしも秩序が二つに切られたならば、野菜の皮も二つになるでしょうし、もしも思考することが出来たとするなら、その箒も又皮を崇めることになるでしょう」。

ポールは言いました。「宗教的本能には、大変な力があります」。

ピエールは答えて言いました。「私は信仰のことは何も知りません。私が信仰するのは、宗教的感情を理性的に考えることが出来るようにするためです。しかし実際には、私が若かったなら、それを確かめることは決してなかったでしょう」。ポールは言いました。「実際に、私は最早確かめたりしません」。雲の下から明るい光が射してきました。二人とも予言者のように笑い出しました。

(一九〇九年八月二四日)

青い小さな花が傾斜地に咲いていましたので、教授はその花の名前をラテン語で言い、ラテン語で祈するために立ち去って仕舞いました。しかし、彼は細心であり、間近に小さな花を見て、その種の性質を語り、その花の固有の特徴を言いました。その小さな花は自分を思い出しましたし、彼も思い出しました。この様にして良く晴れた朝には、彼は全ての春の花々を暗唱させて言う授業をしていました。

畑で暮らす哲学者は、連のようなこれらの繰り返しを馬鹿にしていました。彼は思い出を持たない人間で、眼で見たものしか思考しませんでした。あるいは別の思い出を持っていたのであり、彼の好みは全てが現在や未来へ向いていて、それは植物の持つ記憶力でもあります。というのも植物は何も暗唱して覚えないからです。植物は何とかして芽を出します。風に身を任せます。太陽を探します。植物の原子は、一つ一つが樹液と空気と光による一瞬の化学変化によって自らの栄養分を手に入れます。植物の新芽は、一つ一つが炎のように揺らめきます。哲学者の思想もこのようにして生まれ、事物の背後で彼は理解します。彼の構築物は太陽に脆く、花粉を塗りつけていく蜂の訪問によって思いがけない婚姻や窮余の策や大変異は刻一刻と大地の粒となって流れて行った土手の上であり、それは全てが思考に反映していきましたが、既に今では忘れられています。かくして思考の源泉は各々の雲の一瞬の動きに反映し、一本の草に気を留め、青や白のスカーフを敷き詰めたような砂利を気にしますが、泉から湧き出る水はもう同じ水ではありません。哲学者は言いました、「何も変わらないと説明したがるラテン人は消え失せろ。そして堇の花は彼らの先祖に似て変わらないと言いたがるラテン人も消え失せろ」。

それに対して教授は答えました、「植物の全てを創っているのは記憶です。ここに太陽に向かう土手があります。炭素や酸素や振動して揺らめいている窒素の原子からなる雨が降ります。何故ここに堇があり、あそこにアネモネがあるのでしょうか？ それは常に或る決められた方法で炭素と窒素が整えられたものでしかありません。しかし、各々の新芽が記憶を持っています。その芽には植物とその歴史が含まれています。恐らく本来は各々の植物が決められた場所を示し、必要な光と、化学反応が行われる或る種の偶然を手に入れます。しかし、そこに駆られる植物によって失ったものは何もありません。各々の植物は自分の思い出を持っており、固有の歴史をやり直したがっていて、そしてそのやり直しは可能です、そうでないと死んで仕舞います。あるいはこう言った方がよければ、風や小鳥や植木屋によって別の場所へ運ばれて行くのも同じ植物に変わりありませんし、新天地でも今までの場所と同じものを示します。歴史の驚異はその花に表れます。そして、そのことを理解したいと思うあなた自身は、ここに別の歴史を自分で示しますが、それはあなたの思考を示すもので、あなたの祖先や神々に執着することは少しもありません。私にはあなたの日頃の習慣が分かります。新しいことが古い観念に這入ります。あなたは感謝の心で自分のことを理解します。ラテン語の名前が私の何の役に立つのか、あなたはそれを嘲笑したいのです。あなたの冷笑はスコラ学者と同じものです」。

この様にして歴史と地理が、それらが青い花冠で創られているかの如くに議論されていました。しかし花が過去と共に、現在と未来を創るのに対して、教授は現在と共に過去を創っていました。それらは凋落する秋の思考です。春の思考は歴史を書くのではなくて歴史を創ります。古い小石で新しい家を造ります。伝統を救済するのは独創であり、発明です。

(一九一一年四月二七日)

私は胚芽の成長について、実に素晴らしい物語を読んだ時、個人的に生物学の研究をやってみました、それは顕微鏡を使うものではなく、道に沿って歩いて行いました。足元のキツタが低い壁を張りめぐらして、とうとう低灌木の姿になっているのをあなたは観察することがあると思います。大地から最先端の梢までその葉を良く観てみると、一番低い処にある葉は大きくくびれていて、小さな掌そのもので長くてほっそりした指をもった掌に似ていることにあなたは気付くでしょう。反対に、一番高い処にある葉は全然切り込みがなく、殆どリラの葉のように伸びています。今、高い処から低い処まで、大地へ再び降りてくると葉はだんだんと大きくなり、そしてくびれもだんだんと大きくなってきているのが分かります。あなたは長い指形をした葉と裂片の無い葉との微妙な変遷が明らかに分かる葉のコレクションを、作ろうと思えば作ることが出来るでしょう。

大変に異なったこれ等の葉をよく見てみると、同じ低灌木の中には様々な娘たちのような葉があり、終わりのない省察へあなたを投げ入れるでしょう。何故なら、生き物でも人間でも昆虫でも葉でも、それ自体が持っているプログラムによって成長していると私たちは信じるようになるからですが、それはまるでクロード・ベルナール(1)が言っている〈眼に見えない建築家〉が決められた場所に部品を組み込んでいるようです。この仮説は何も解明されていないのですから、気を付けて下さい。確かにこの仮説は、それ自身としては皆が期待するとおり謎の儘です。胚芽とか発芽は、人が推測するとおりに小さく、単純なことであり、予め〈知る〉ということは成るよう成るだろうと言わざるを得ないことです。この〈指導理念〉に従って栄養摂取と排泄、味方の細胞と敵の細胞の闘い、そして世界中の変化までも規定することになるだろうと言わざるを得ないのですが、その中では石工たちの作業台はたいしたことのない理念しか与えないこととなります。換言すれば卵や芽は伝統主義者です。それは自己を思い出すことであり、祖先を模倣して自分の器官を構築し、木彫の彫刻家のように少しづつ今日のゴシック様式の図書館を造っていると仮定しなければなりません。

ところで私が発見し得る限りでは、私が見たキツタはすっかり決定されたプランに沿って成長してはおりません。各々の葉は、自らが存在する場所に合わせて自分を形づくっています。キツタの娘とも言うべき葉が大地の近くにあるならば、つまり風や、乳母のように育ててくれる太陽の光が余り当たらない処にあるならば、細長い指のような葉を広げています。それはまるで高い方にある葉が作る網の目を通過して来る細い光線を探しているようでした。梢の天辺に付いている葉は、大変に単純な構造をしています、それは多分、空気と光が四方八方から一杯に当たるからでしょう。キツタの葉は楽観主義者です。成すが儘に成長していきます。大変に単純で、成るが儘に生きています。自分が生きている場所の状況と比べて、祖先や伝統を考えることは少ないのです。キツタは歴史学者と言うよりも、むしろ地理学者です。自分で望む代わりに、環境を受け入れます。

この事例を良く考えてみることは大切です。もしも私たちが思い出による支配や、活発で生き生きとした伝統を容易に想定しなければ、既に有機体として存在しているものによって構成され、周りの多くのものによって構成されている環境が、多分唯一の設計者ではないだろうかとは私は自問します。歴史学者は次のように言います、現在の家の屋根が尖っているのは祖先がそうしたからであると言います。しかし、地理学者は次のように言います。現在の家の屋根が尖っているのはノルマンディー地方には雨が沢山降るからであると言います。歴史の書物は閉じることにしましょう。そして、キツタの葉を見に行きましょう。

(1) 近代実験医学の祖で、生理学者（一八一三～七八年）。『実験医学序説』（一八六五年）は、近代科学の方法を説き、思想界にも大きな影響を与えました。

三十七 (蚕の話)

ヒースの枝にしがみついている蚕が自分の周りに糸を紡ぎ出すと、一方の枝から他方の枝へ糸を伸ばし、綿状の絹の雲の中に身を隠し、最後には繭の中に閉じ籠もり、その中で蛹になり、その外見を見た人は大変に出来が良いと判断します。蚕の大きな頭があちこち動いてバランスをとっているのを見てご覧なさい。まるで糸を繋ぐ前に熟考して長さを測っているようです。

しかし、それは蚕にとって大変重要なことです。物事は思っている以上に簡単に行われていくのは確かなようです。蚕はコロジオンを分泌します。つまり糸を乾かす一種の液体のようなものです。蚕が行うのは僅かな動きで、その糸を枝へ引っかけます。そして、蚕の動きが活発でなくなると、間もなく何処へも行けなくさせる軽くて薄い織物で自分の身の回りを囲むようにします。そこに自分の未来を見出します。常に新しい糸を張り、主に日の光が少しでも明るく残している方を張ります。この様に手探りで繭は極めて規則正しく一様に作られます。あなたはその営みが一本の糸で生産されているのを理解しますが、私はその原因となるものを眼で見ます。繭を作るのはその中に閉じ籠もるためでもなければ眠るためでもありません。繭を作るのは絹を分泌するからであり、蚕が眠るのは閉じ込められるからです。蚕の大きな頭には思考や計画はあり得ず、多くが無駄であるとあなたは考えることでしょう。

蚕の話は、蟻や蜂や小鳥や犬たちが何をよく考えているか、を求めている者たちに勧めなければなりません。しかし蚕や繭は、行為によって人間の考えを見抜くことを求めている者たちにも勉強になり得ます。それというのも戦争に勝った後に計画を立てる将軍にはこと欠きませんし、田舎に引っ込んで自分の計画を仕上げ、やってきたことを考えている政治家にもこと欠かないからです。彼らが重々しく頭を上下に振るために私が騙されたのではありません。私は熟考するのに決して躊躇いはありません。彼らが思考するために空気を入れている間、糸は乾きます。状況に応じて繭を作る必要があります。中に這入るのは一回です。そして、既にミイラのようになっていますが、それを望んだから繭を作ったのだと言います。しかし私は、繭を作ったからそれを望んだのだと信じています。

(一九〇七年十二月五日)

大物釣りに出掛けるブルターニュ半島のグロア島（1）ブリトン人の小船は、甲板を付けた大変に良く出来た機械船です。私は或る技術者の言うことを聞きましたが、美しい甲艦の線は素晴らしく、優雅で、鳥の卵の殻のようです。その曲線や勾配や厚味は何処でも理想的とのことです。人は蜜蜂の働きに感嘆しますが、船を造った人間のこの働きも、蜜蜂の巣の六角形の小部屋と大変良く似ています。蜜蜂や釣人を観察してご覧なさい。理論の足跡はなく、幾何学もありません。単にそこに見出すのは、愚直なまでの習慣への熱心な没頭ですが、仕事の発展とか完成を追求するためには大切なことです。ここには実践的な方法があります。

船というものは、別の船を複写したものです。船の学問はそこで止まっています。複写することとは、常に人が作ってきたものを作ることです。ダーウィンの方法について更に推論を進めて見ます。余りに出来の悪い船が一度か二度の航海で海の底へ沈んで仕舞うと、その船が複写されないのは明白です。古くから船体の形は、この上もなくたいそう完璧な形であることは大変良く分かっており、それは人が産み出すものの中で操作するのに最も適したものであると聞いております。手探りでやっとなだ方法とは、理屈のない盲目的な方法ですが、常に最大の成果を齎すことでしょう。それというのも数々の偶然によって平凡だった船体がだんだんと風の勢いを逃れて、悪い型が分かるようになっていくのは可能ですが、あくまでそれは例外的です。思ってもみなかった経験が何回も重なれば、偽りがその儘存在し続けて解消されないことはあり得ません。良く製造された船は暗礁に乗り上げることはなく、制動装置によって暗礁から逃れることが出来ます。そして、いずれにせよ十万の船が波に投げ出されても、どんな小船にも波は襲ってきますが殆どの船は沈みません。そうなるまでには、造ったものが常に沈んでいたために奇跡が必要とされてきました。

つまり、もっと正確に言うなら、海が船を造り上げていくのです。船は、その他にも色々と取捨選択したものを模倣して、造られたものです。換言すれば、精鋭の中にはもう一つの精鋭があり、何千回と続けられていきます。各々の前進は眼には見えません。職人の前進は何時も模倣であり、船の形は変える必要がないと職人は何時も言っています。進歩とは、正にこの型に嵌った仕事への専心によって齎されます。かくして亀の才能が、兎の科学を追い越して行きます。

(一九〇八年九月一日)

(1) ブルターニュ半島の南側に位置するロリアンの沖にある島。嘗ては漁業で栄えたが、今は観光開発が進んでいます。

ブルゴーニュ地方の葡萄の木は、多くが病気になっているとされています。虫や蠅のような小動物がおかしくなって、葡萄の木の根や花や果実を襲います。ニュー・サン・ジョルジュやボヌの町は、哀れな人の膝のように直ぐに擦り切れるだろうと予想出来ます。私が先日読んだ記事を書いた記者は嘆いていましたが、更に古本を読んだら奇妙なことを言っていました。それはブルゴーニュの葡萄の木が既に十六世紀に、ヴージョの町のほんの小さな閉ざされた地域を除いて、滅びたということです。辛うじて其処では葡萄の木の保存に成功して、新しい根を育てて貴重な金色の葡萄畑を斜面に作り直したということです。その記事は、それらの事件を気候のせいにしてその事実を指摘するにとどめていました。

私は寧ろ、〈自然〉の上を連絡船のように行ったり来たりして歴史を描いて刺繍する規則正しい動きの一つと私たちが対峙しているのだと信じます。最初に見た時は、そう見えませんでした。もし植物が永遠に消滅しなかったならば、雨と霰と霜だけが邪魔になるような仕組みによって、植物の敵と妥協するようになると人は信じるでしょう。しかし、もっとよく考えましょう。私たちは葡萄の木を食い尽くす小動物たちに、一般的な理論とも言われるマルサス人口論を応用することが出来ますが、それは次のように言えるものでもあります。動物たちは食料の増加よりも早く増えていきます。もしも物事がこのように進むなら、葡萄の木はそれが広がっていくのに応じて、葡萄の木よりも直ぐに勢力が強くなる敵の食料になります。葡萄の木は死にます。しかし、死んで葡萄の木は敵を飢えさせて殺します。ですからもしも何処かの葡萄畑が死なずに管理されているなら（そして常に最良のものと評価されているなら）最後には敵に勝って勝利が与えられる予感のもとに、新たにその葡萄の木は分けられて、平原に広がっていくことでしょう。そして次に、新たに敵はそれに追いつき追い越していきますが、もしも本当ならマルサスが望んだように動物たちは2、4、8、16のように等比級数となって増えていきます、その間、食料は2、4、6、8のように等差級数となって発育します。

そのことは惑星である地球上に起こることに或る思想が生まれます。進歩は決して継続しないということです。何事も満ち潮と引き潮によって行われます。それは私たちよりもはるかに大きな巨人であり、もしも彼の顕微鏡で私たちの葡萄畑を観察するならば、私たちにとっての一世紀は彼には十秒でしかないものですし、葡萄の木が波のようにになっているのを見て、葡萄の木は震えて波打つものでしかないと言うでしょう。それとは反対に、小動物たちがもしも哲学やアカデミーの学校を持っているなら、恐らく進歩は継続され、結局のところ種は勝ち残るに違いないと教えることでしょう。実のところ小動物たちは種の進化のためによく働き、その種は最良のものを閉じ込めて保存され、最良の葡萄酒を作り出しますが、決してそのことに疑問を持ちません。小動物たちの時計の針は、大変に早く回っているからです。

(一九〇八年十月八日)

四十 ダーウィンの魔法 (MAGIE DE DARWIN)

最近、ダーウィンの本を読み直してみると、豊かな哲学的美しさに心惹かれました。この思想家は、如何なる詩人よりも良いものを沢山呼び起こしてくれます。何故でしょうか。それは書かれていることと関連した事例を幾つも見せてくれるからです。猫は野鼠の敵です。野鼠は、まるはな蜂の敵です。そのことは、まるはな蜂の巣は常に猫を飼っている私たち人間の家の辺りにあるに違いないということです。しかし、何より都合が良いことは、まるはな蜂は花蜜を求める昆虫たちの中にあつて、単独で行動すること、赤い花が咲くクローバーを受粉させることが出来ること、つまり花から花へ花粉を運ぶことが出来ることです。そして、他家受粉は植物にとっても都合が良く、恐らく病気にならずに安定して子孫を生んでいくためにも好都合であることを理解しなければなりません。それ故、猫たちは赤い花のクローバーの見方です。このように物事は、あなたがダーウィンを読むのに応じてぴったりと歯車が合ってきます。森林はあなたの目の前にありますが、それは対立する植物の群生と共に生まれ、多くの種子が浪費されて無駄に終わり、昆虫たちが現れては葉と花と実と樹皮を貪欲に食べます。そして、これらの昆虫を食べる別の昆虫がおり、虫を食べる鳥たちは両方の昆虫を追い続けます。鳥たちを狩るのは肉食獣たちです。詩的ともいえるこの関連の魔法は、何処から齎されるのでしょうか。それは創造主自身の神が物語るものであり、神の眼は細部まで何時もじっと見定めます。そして、些か手探り状態であっても多分長くは続かず、誕生の思想というものは何時も比類なき力と一緒にです。それというのも創造主もその力は、観念の藪の中で押し進めるからです。かくして節くれ立った両腕によって、一本の柏の木が障害になったり、負傷させたり、勝利を導いたりします。そこから創造した者と同一の思想を常に学ばなければならない、という重要な法則を私は引き出します。次から次にやって来る人々、時として大変に知性的な人々は、大地に立てられた棒が樹木に似ているように、その思想を大変に分かりやすく極めて明瞭な概要を作成し、抽象的な表現形式で要覧のように作成します。

真の思想は、人間的救済もなく、全くそれだけで取り残されていると信じてはなりません。それは懷疑によって生まれるもので、模索や行ったり来たりする観察が、思想を生き生きさせるのです。反対に、教条的に教えられた者は思想という樹木の葉をすっかり失うこととなります。強靱な精神は、押葉標本よりも寧ろ、実際の茂みに似ているに違いありません。

これらの特徴から、学者ぶるペダンチックな人と教養ある人との相違を正しく言うことが可能になります。学者ぶる人は、その概要を通して性急に学びます。一度学べば理解します。二十年後に、同じ表現形式、同じ梗概を思い出すことでしょう。これらの習慣が、優秀な小学生の家で強いものとなっているのであったなら、先生はこの上なく心配するようになります。観念の可動性や多産性は、際限のない忘却という力と、常に何度も何度も再開される探求を前提としています。人生のために戦うことを良く考えるならば、一人ひとりが観察することによって再発見するのは注意力を二倍にする必要性をダーウィンが言う時、それは学者ぶる人を笑わせることとなります。何故なら、彼はそんなことは知っていると言いますし、主文のように決まり文句を言うのです。しかし、これ以上彼は何も生み出しません。彼は何も把握しませんし、何も考えません。勿論、これは一般論であり、抽象論です。

そして、自然の結果として、学者ぶる人は書くのが下手です。彼の文体は、思想に対象がないためにイマージュもありません。正確に手際良く書かれたこれらの書物を人々は引用することが出来ますが、何ら感動もなく退屈でたまりません。そして、子供たちが与えられるものは殆ど何時もこの種のもので、そこから解ることは、子供たちは何の喜びもなく平凡に書くようになり、ついには言葉へ何の注意も示さなくなります。そんなことでは、最後には綴字法や文構成法を失墜させることとなります。美しいイマージュが

正しい文体を生むのです。美しいダイヤモンドを乗せるのは白金であって、銅の上ではないのと同じです。

(一九一二年五月十五日)

四十一 自然の力（労働） (LES FORCES NATURELLES(TRAVAIL))

私は科学の名において話をする無邪気な予言者たちの話を聞いてびっくりします。或る人は言います。「ラジウムは何も失わずに私たちを暖めてくれます」。そうです。もしも私たちが何も失わずにラジウムを手に入れれば、そうなります。別の人は次のように言います。「液体空気は私たちを安価で運んでくれます」。そうです、もしも私たちが安価な液体空気を手に入れれば、そうなります。

不幸なことに人は苦勞しないで手に入れるものは何もありませんし、私たちは労働して労働の代価を購入するだけです。経験がそのことを教えてくれてから、私たちはそのことを知るようになり始めました。成る程ラジウムはこの上なく素晴らしい特質があります。しかし、ラジウムだけを抽出するには、多くの労力を費やさなければなりません。液体空気は強い圧力を供給します。そうです、でも液体空気を手に入れるには、強い圧力に働きかけなければなりません。

蒸気機関車は、私たちが腰を下ろしてゆっくりと新聞を読んでいる間に、長いレールの上を引っ張って行ってくれます。そうです、石炭や鉄鉱を採掘しなければなりませんでした。鍛え、ヤスリをかけ、磨き、グリースを塗らなければなりませんでした。土を掘り、鉄を切り、枕木を並べてレールをボルトで締め、橋を造らなければなりませんでした。現在もそうですし、旅行者はのんびりしていますが、何百人の人間、技術者、転轍手、駅長、駅員、制動手、踏切番たちはあなたの旅行が快適であるためには必要です。

私の家にはストップウォッチのように動く古い柱時計があります。その時計は私のお気に入りです。何故なら規則正しく私に時間を教えてくれるからです。何もしなくても容易に動いてくれます。その時計のメカニズムは大変に単純です。重りが少しずつ降りていくのが分かりますし、一日中私のために働いてくれます。私は夜に、その重りを単に上へ上げなければならぬだけです。それは私の仕事になります。その重さは疲れを知らず何時までも消耗しないに決まっていますが、時計の重りが下に着くや否や、殆ど時計の時間が進むことはありません。

家の梁になる木を生長させるにしろ、水車を回す水を蒸発させて流れを生み落下させるにしろ、実際に仕事をするには太陽の光が十分必要であることを私は知っています。そこには善き奉仕者がいるのです。そして、彼は私たち以上の働きを継続してやってくれます。全てに同じことが言えますし、もしも私とその仕事を利用したいなら、私も同じように私の仕事をする必要があります。私は木を四角に切って運ばなければなりません。私は堤防を造り、水門を造って水面を調整し、水車を回すその歯車を調整しなければなりません。タービンは旧式の木製の車輪以上に回転が速いのは本当です。しかし、家を建てるにはそれと同じ仕事量が必要です。言葉に酔う代わりに、私たちの利益を考えましょう。労働が全く自分一人で孤独に行われるなら、時間は気にならなくなります。しかし、昔からある諺は何時も真実です。「天は自ら助くる者を助く」。

(一九〇七年二月五日)

四十二 帆船の力 (PUISSANCE DU BATEAU)

風のそよぎに身をかがめるように、水を切って前進する船というものは、美しい機械です。傾いた帆の上で風が動き、竜骨は抵抗し、風圧の基で帆船は竜骨の方向へ滑るように進みます。風に対して斜めに前進することで、帆船は少しの距離を稼ぎ、直ぐに方向を変え、何度も繰り返します。このようにして風は風と戦います。巧みさと忍耐のお陰で、ここには優美な勝利があります。帆船が斜航すること、それは自然の力に対する人間の巧妙さであり、政治的なものです。

このように私が話したのは、技術者が次のように言った時でした。「アランよ、自然の力が多額の報酬を要求することもなく、時として私たち人間のために働くことがあることをあなたは大変に良く分かっている。何故なら、私たちは船の舵を取ったり、曳いたり帆を揚げたりするロープや、舷から舷へ通す帆桁を巧妙に操ることを、重労働とは思っていないからだ」。

私は言いました。「あなたは、極端な譬えに陥っています。その船の機械は一番優良です。しかしながら、竜骨や小刻みに震える船体や、風に歌う船具の中に隠されているあらゆる労働を忘れてはなりません。凡そ一万年もかかってきた船の観察と実験のことを私は触れないで置きます。木材は、船の運航を百年保つことが出来ます。木材を切り出す樵は、船に少しは手を加えたこととなります。船大工は船の梁を四角に切り、アーチ型の側面に曲げ、マストを据え付けました。風の力を受け止める帆となる麻布もあります。これ等の入り組んだ労働の所産が、何と多いことでしょう。布地を織るときの行ったり来たりする音が、私の耳には聞こえてくるような気がします。織られる糸が生産されるのも容易ではありませんでした。鋤で地面を掘り起こし、種播く人が行った来たりして、それが終わると仕事をするのは肥えた土地であり、権力の父である〈太陽神〉です。かくして麻が生産されます。次に新たな仕事が行われます。麻は引き抜かれ、水に晒され、乾燥され、煮て押し潰され、梳(す)かれます。それは既に、軽々とした髪となって風に運ばれていくようです。紡ぎ手の女性は、糸巻棒を使って、紡ぎながら歌うに違いありません。

帆船の力は、幾つもの労働が重なって生まれます。直接的に船を動かす人間の力は大したものではなく、帆船の中で歌い、帆は先ず風にたなびき、ぴんと固くなって風を受け止め、船を動かし、波を越えて前進し、幾つもの渦を作り、塩分を含んだ泡を吹き出します。航海している昼の数を数え、夜の数を数えなければなりません。紡ぎ手の女性が歌っている間の糸巻棒や、指の間で縫(よ)っていった軽い麻糸は、その時から既に、風を受け取ることに繋がっていたのです」。

(一九〇八年四月二五日)

四十三 馬と犬 (LE CHEVAL ET LE CHIEN)

良く栄養が取れていて、十分ブラシがかけられて、鹿毛が太陽に輝いていて、皮膚が浅黒い馬を想像して下さい。これ以上に力強さを示す驚嘆すべきイマージュはありません。大きなお腹には野菜汁が煮つめられ、さらに濃縮されて血となり肉となっていくます。いかつい胸は鍛冶屋のふいごのようです。頸部の太い盛り上がりも見事です。肉付きの良い臀部をしています動きは素早く、一匹の蠅がいると波のように筋肉を動かします。蹄は蹄鉄で囲まれていて固く、輪の形をしています。馬のその力は何ものにも属さず自由であり、手綱などの馬勒の外に馬具はなく、歩道の端を行くときはぞっとする動物でした。

ところが、それは直ぐにおびえる動物になりました。一匹の犬がきんきん鳴くと、何匹もの犬が鳴きます。一匹に一撃をくわえると静かになり、血を流す犬に鼻を近づけてくんくん鳴き、次に新たに激しくきんきんと鳴きます。一撃をくわえられた犬のことを考えてくれと言わんばかりに鳴きます。しかし、誰が犬のことを心配するでしょうか。その次に、私が見たのは見事な激情でした。四本足が舗道を打ち付けています。馬のこの筋肉の塊が大騒ぎしています。首は弓なりです。両耳は狂ったように揺れ、黒くて大きな両眼はぶかっこうで恐怖に溢れ、口は押さえつけられているようで何も声が出ません。乱れた無秩序な大きな恐怖と、頑固な苦痛の間にあるのが権力というものです。馬の頭脳は小さいです。余りに小さく、愚かな頭脳は選択を知りません。かくして、その馬は歯ぐきを不自由にするはみから逃げられるだけ逃げまわりました。暴れる馬の姿は美しく体を縮めた激しい動きがあり、見事に体をねじり影と光が巻き付き、そして解かれ、画家がいれば何か心を奪われたことでしょうか。犬は羊の群の周りを囲むように距離を置いて回転します。馬丁の頭だけは後を振り返ってその馬を見ようとしませんでした。彼は仲間の一人と世間話をしていたのだと思います。彼は小さなパイプを吸い、時々唾を吐いていました。

小さな頭脳であるがために、そして余りにも栄養がいきわたった体であるがために、この地上には何という奴隷制度があることでしょうか！ 労働と休息を互いにはっきり決めないために、何という悪が生まれていることでしょうか！ そんなものには無分別な行動をとることです。足蹴りにすることです。あるいは通り過ぎるのを待ち、眠っていれば良いのです。お前だけを傷付ける心の裡のこの喧騒は、一体何なのでしょう。お前はベッドの上で寝返りを打っている哀れな恋人であり、まるで自分の悪が直ぐ横で眠っているようです。しかし、お前を苦しめるのは自分の悪から逃げ出そうとする、そのことです。良く見ることです。休息をとることです。時間は直ぐに過ぎていきます。別のことをやることです。お前のベッドは今でも以前より固い訳ではありません。人間の偏見から眼を覚まそうとすること、距離を置いて物事を見ようとするのです。

このようにして私は井戸のように深くて黒い眼をした馬を前にして、情念についての哲学を考えました。私のために窓は馬の上を開かれているのですが、馬のために私の上や全てのものの上を開かれた窓があるわけではありません。ここまで私が考えると、嵐の〈主人〉である馬主は手綱を取って、犬を前にして馬をその後につけて、確かな足取りで第一歩目を歩き出していたのです。

(一九一〇年八月二四日)

四十四 動物の群れ (COLONIES D'ANIMAUX)

もしも或る事件があなたの皮膚と筋肉を傷つけて奪い取ったならば、あなたのものであったその肉体部分は、直ぐに死んで仕舞うでしょう。しかしそこから、あなたの肉体が記憶にとどめている分割出来ない人生をそれが共にしていると理解してはいけません。この小さな肉体部分は動物の群れと同じです。もしも動物たちが死ぬとすれば、生きられる水のある環境の外へ放り出されるからで、丁度、水から取り出された魚のようなものです。同じように、もしもあなたがこの小さな肉体部分をあなた自身のもので血液が流れているのと同じ環境を保有しているとしたら、この小さな肉体部分は生き続けていくことでしょう。このことが実験によって直接証明されたのは最近のことですが、実際には既にそのことを人々は知っていました。

独立して自活している動物たちの生活の証は、各々が自ら証明するものです。動物たちを信じるものが何もなくても、信じようとするのが大切です。そうでないとあなたがおっしゃるように、あなたの意志は徒労に終わることでしょう。良く噛んだパンとか、単に喉の通りを良くする僅かな唾液というものは、口の奥の方へ食べ物を流してくれます。あなたは飲み込めるようになります。あなたの口の奥には、厳密に言うなら餌食を待ち続ける動物がおり、餌食に触れると直ぐにものにして仕舞います。良く見てご覧下さい。事はあなたの意志にお構いなしに運ばれます。あなたの意志なしで胃は食べ物を消化します。あなたの意志なしで腸は食べ物を押し流します。あなたの意志なしで心臓は脈打ち、血液が流れるための鼓動は心臓そのものが生んでいます。あなたの意志なしで眼の瞳孔は日陰で開き、明るく光り輝く日向では小さく閉じます。あなたの意志なしで眼に何かは今にも迫ってくると、瞼は素早く閉じます。あなたの足は歩くことを知っています。大変上手に歩きますし、あなたがやろうと思えば小刻みに震えさせることも上手に出来ます。

もしも私たちがこのことの全てについて考えるならば、私たちは群れをなし集団と化した生命体としての動物であり、岩場にしがみついているイソギンチャクとか牡蠣のように、殆ど一人の人間の骨格にしがみついている生命体であるという考えを自然に持つでしょう。そこから怒りや恐怖が突然に襲ってきます。それは網の中の魚のように最初の動きで行動して目覚め、そして興奮する海の怪物たちの群れになります。海の怪物たち、と私は言いましたが、それ等は血液の中一杯に広がっているからで、血液は液体として海水に大変に良く似ているからです。

生理学者たちが結論を思い止まらせたのは、長い間これ等の自然に関する考え方に次のような共通の錯覚があったからです。つまり彼らが探求していたことは部分部分を動かしている何らかの原理原則であって、意志というものでないのは確かです。それというのも意志は言葉でしかないのですが、それは生命という或る種の液体が何千という水路を通して先端にまで達することが出来た主要な要素であるからです。そこから脳の観念というものが感じられ、欲求が生まれ、最後に思考することになります。しかし、これはスコラ学の固定化された考え方でしかありませんでした。これだけは言えるのですが、脳は神経にとっての中枢であり、その媒介者を通して海の怪物たちは、近隣同志の軋轢を通すことよりも更に一層緻密にお互いを興奮させるようになるのです。そのことは一般に、一方の激しい感情を他方の激しい感情によって制御します。そして脳は命令すると決して言う必要がありませんが、只、脳によって一部は全体に従っているのです。行動するのは脳ではありません。行動するのは全体です。私の拳を受けるのは脳ではありません。私の拳を受けるのは他の器官です。私という人間は表面的には〈君主制〉ですが、実際は〈共和制〉なのです。

(一九一〇年十二月四日)

四十五 悲しいマリア (MARIE TRISTE)

〈循環狂気〉について考察するのは無駄でなく、取分け「悲しいマリアと楽しいマリア」は、心理学の教授の一人(1)が幸いにも臨床の中で発見したものです。多くの人々が既に忘れていた歴史は良き保存庫です。マリアというこの娘にとっては、時計のように規則正しく一週間は楽しく、次の一週間は悲しいのです。彼女が楽しかった時は全てが上手くいきました。雨の日も、天気の良い日のように好きでした。どんなに小さな友愛の言葉でも彼女はうっとりしていました。もしも裏切られた愛のこと考えたとするなら、彼女は次のように言いました。「私にとっては何て良い機会なのでしょう！」彼女は決して退屈しませんでした。どんなに小さな思考でも愉快的色彩を手に入れていましたし、それはまるであらゆる人を喜ばせる大変に健康的な美しい花のようでした。友人たちであるあなた方に私が願う状況の中に、彼女はおりました。何故なら、あの賢人が言ったような二つの取っ手が付いた壺そのものであるからです。どんな出来事も二つの側面があるのと同じで、言うならば何時も耐え難く辛い思いをしますが、反面何時も慰められ元気づけられます。そして、人が幸福になるために行う努力は決してなくなりません。

しかし、一週間後には全て変わって仕舞いました。絶望的な憔悴に陥って仕舞いました。最早興味あるものは何もありませんでした。その視線は生気がなく、何を見ても萎れていました。最早幸福になることなど信じられませんでした。愛情など信じられませんでした。誰もその一週間は愛しませんでした。そして、人々は正しかったのですが、その一週間は愚かで退屈であると判断しました。そのことを考えながら、その不幸を悪化させていました。或る種の恐ろしい方法で隅々まで至る処が健康を害していることを知りました。「あなたは私に関心があることを、私に信じさせたいのですね。しかし、私はあなたが演じる芝居に決して騙されません」と言われていました。挨拶とかお世辞は、意に介さないで無視するためのものでした。好意とは、その人に従属させるためのものでもあります。秘密とは、非常に腹黒い陰口の言葉でした。想像力という病気には、付ける薬がありません。その意味において最良の出来事は、不幸な人間には意味もなく微笑することです。しかし、幸福な人には信じられない程沢山の意志があります。

しかし、心理学の教授は勇気ある熱心な精神を、今までよりももっと厳しく恐ろしい実験で発見することになりました。彼は沢山の観察と人間としての短い一生を測定する中で、一センチメートルの立体中の血球の数を数えるようにしました。そして、法則が明らかにされていきました。喜びの時期の終わり頃には血球の数は少なくなり、悲しみの時期の終わり頃には再び多くなっていました。血球が減ったり増えたりする様なことは、全てこの想像力という幻影が原因していました。従って医者は次のように熱心に答えることが出来ました。「元気を出しなさい。あなたは明日幸せになります」。しかし、信じたものは何もありませんでした。

心の中では自分は悲しいと思いたい友人が、更に私に言いました。「もっとはっきりと信じて良いものは何か？ 私たちは何も信じられない。私は熟考しても血球を自分に与えられない。だから哲学は全てが空しい。この大宇宙は冬や夏のように、雨や太陽のようにその法則に従って喜びとか悲しみを私たちに齎すのだ。幸福でありたいという私の望みは、最早散歩をしたいと望むこと以外は期待しない。私は谷間で雨を降らせることもない。心の中で憂鬱になることもない。私は憂鬱を受け入れ、そして忍耐することを知るのだ。何と美しい慰めの言葉だろう！」。

この言葉は、そんなにも単純ではありません。厳しい判決や不吉な予言や陰鬱な思い出を反芻すると、自分だけの悲しみが生まれるのは明らかです。いわば悲しみの味を見ているのです。しかし、もしもそこに血球があることを良く知っているなら、私の推論を笑うでしょう。私は体の中の悲しみを退けますし、最早疲れたり病気になることはなく、如何なる美辞麗句も要りません。人の裏切りよりも胃の不調の方が

もっと都合が良いと思います。本当の友がないと言うよりも、血球がないと言う方が増しではありませんか？ この方法のファン（熱狂者）は、理性もブロマイドの写真も同時に拒絶します。私が言うこの方法によって、二種類の薬のための門戸を同時に開けることしか注目すべきことはないのでしょうか？

（一九一三年八月十八日）

(1) フランスの精神科医ジャン＝ピエール・ファルレ（一七九四～一八七〇）が、躁病性興奮のサイクルと落ち込みのサイクルの状態を一八五一年に「循環狂気」と命名して発表しました。

四十六 情念の力 (FORCES DES PASSIONS)

情念の動機を面白半分に考えてみても、情念の力はよく理解されません。しかし肉体的興奮は、行為によってしか治すことが出来ないやっかいな病気です。日常は大変物静かで、善悪の問題には正しい判断を下す男が々言いました。「私と何の約束もしていない女性と視線が合っただけで恋愛感情を試すことは出来ません。もしも彼女が私に全てを捧げたなら、私は諦念と信頼で一杯の甘美な夢の世界へ簡単に落下するでしょう。私は決して嫉妬しないから幸福ですし、彼女が私に言うことは信じて聞き、人が彼女のことを言うことは決して信じないで聞きます。ところが最も凡庸なその女性は、彼女が期待したように私を直ぐに情念の地獄へ投げ入れます。注意力、この上なく慎重な行動、間違っただけ、騒音の感じやすさ、転落、目的もなく何時までも抵抗するこれらの動きは、私を直ぐに希望と絶望の中へ投げ込みます。私は直ぐに狂気が起り、自分の思うように行かないものについて熟考するようになります。この心の動きによって、少なくとも真実と思える色々な考えが信用を得ます。あらゆるものが私を捉え、その物音に動揺します。この心の嵐を鎮めて穏やかにさせるものが姿を現しますが、大変に美しいものです」。

もしもあなたが情念のメカニズムを知りたいのなら、良く認識出来る情動を考えることですが、情動は大変に厭なものです。最早言いたいことが何もなくなると、如何なる講演者も構わずに情動を捉えて勝手なことを言います。それまでの言葉や動作を妨げます。そして、動きのないこの動揺は実際には大変な病気です、誰でも知っているように、最も奥深い生命に不可欠な機能さえも動揺させます。情動の鎖に繋がれた〈女予言者〉のように、彼の肉体は質問されることなく話し出すと、精神は最早想像力を働かせることさえも出来ません。彼は何も認識せずに言葉を押し出します。彼は夢の中のよう、作るのと同じ速さで解体します。その時は苦い屈辱感を抱き、情念の炎の中で生まれるものは、非常に軽蔑されるものであると何時も信じて仕舞います。この感情は直接的なもので、その原因も曖昧なものではなく、想像上のものと何か違います。人は何時も自分の情念に復讐され、そして他人の上に落ち、何時も公平ではありません。

そうです、このメカニズムによって誰もが自分の怒りにいらいらして、自分の不安が不安なのであり、自分の恐れを恐れます。何であれ、行為が救ってくれます。兵士が、死を予想して恐れることによって、死に向かって歩いていることを私は知っています。予想することは、今は本当の悪なのです。それというのも死は人間にとって何ものでもないからです。同様に、行為は本当の善です。それは喜びであり、安堵でもあります。復讐も同じです、情念を行為へ変えるだけです。必要なのは肉体を動かすことです、それが情念を鎮めてくれますが、恐らく歩き続けることとか仕事に没頭することによって全てが具合良くいくことにもなります。しかし、人は決してそんな風に考えません。それ故に復讐は不条理で非常識であり自分の目的とは反対であることをあなたが示したい時、あなたは評価されます。それは雷の大音響の後に、辺り一面に名状しがたい穏やかさがくるようです、この様にして罪を犯した後にも、ある種の眠りが何時も突然に襲ってきます。戦争の後も同じで、平和がやってきます。平和は戦争と一緒にありますが、平和だけが大切であると私は言います。そして、奥深くまで考えてみるなら、戦争は何時も戦争に対する人間の激しい情念に応える力です。

(一九一四年三月十九日)

六ピエ（1）もある男は大きな腕、丈夫な手、柱のような足をしていますが、この機械のような人が単に考えるために創られていないのは明白です。逞しい動物のような人でも眠ったり、ベッドで考えたりしなければならぬのですが、肉体の構造がそれを決して容認していません。もし部屋の上から小さな光が射し込んでいたなら、全然眠れなくなって目を覚まし、手足を伸ばして、取り敢えず順番にやっつけていこうになります。恐らく、不眠症が辛くなる理由もそこにあります。何故ならやる事が無く、ぶらぶら遊んでいる大きな動物は、頭で考えたことをその儘続けて、それに応じた行動を直ぐにとるからです。そこから齎されるのは答えの無い行動で、絶えず苛ついて逆らっています。

肉体の法則とは直接的な行動です。しかし躊躇すること無く、内部矛盾も無く行動を思考することは、最早思想そのものではありません。従って私が歩くことを考えて歩くなら、その思考は直ぐに行為の中に溺れて仕舞います。思考することは行動することを我慢することである、と或る人は言いました。しかし、それでは肉体という機械には大変に具合が悪いことが分かります。肉体はその時、自分自身で収縮して固くなって仕舞います。その様な習慣が無い者には、思考することは直ぐに狂気となり怒りになって仕舞います。

そこには情熱という拷問があります。それらは矛盾する思考でついた決心が、外のことによって直ぐに取り消され、結局のところ行動という強い欲望と共に躊躇という不具合が生まれます。日常の平凡に慣れて麻痺した人間の裡では、思考することは拷問でしかありません。他の人間の裡では、腕や足を使って思考し、肺や心臓や腹に結びついて影響を与えることで拷問となります。何故なら全てが関係してくるからです。筋肉の拘縮によるこの思考が、他方よりも此方の方が遅くやってくると、単に正しく気付くだけになります。思考するという習慣を持っていることによって彼の苦痛は、単にそれだけで考えるのです。穏やかになることとは、そこに戻ることです。

方法とは、手で行う仕事のことで、苦しみで気が狂いそうだと感じている女性は、床の上の洋服ダンスを空にして、あらゆる服を其処の場所に置き直して仕舞いました。もしも一本の木を根こぎにするように何も無くなったなら、その人間は幸福でもあり、不幸でもあります。何故なら彼には望ましい二つの結果が平等に姿を現すからです。あるいは思考は両手に従い、木の割れ目に入り込みます。あるいはもしその思考が何度も苦痛を感じるものであるなら、少なくともその動物は機械的な仕事によって規制されます。それらの活動は、自分自身を締め付けるマッサージのようなものです。思考は解放され、重荷を下ろしたようになります。年老いた賢者は、朝のベッドを整える時間は公平で正しく判断する時間であったと言いました。その力はベッドを整えるためであったということで、情熱による熱狂的な活動によって思想を形成するためのものではありませんでした。考えるだけで行為することが何も無い大男を、私は気の毒に思います。彼は全身で思考しますが、私は彼が幸福でないから心配です。それは多分、暇であることは有害なメカニズムのためであり、回り道をして彼らは軍人になります。鋤いたり草取りをしたり釘を打ったりするように、私としては何か他のものを構成し創りながらでないと、きちんと考えられません。それは犬に投げられた一本の骨でもあります。

(一九一三年十月三日)

(1) 一ピエは三二・四センチメートルであるから、六ピエは一九四・四センチメートル。

四十八 ドン・ファン (DON JUAN)

ドン・ファン(1)は、美しいエルヴィールに自分の愛を証明するという狂気に近い状況に身を置いていました。彼女は大変に美しく、その思慮深さは知恵の女神ミネルヴァとも比較されるほどです。しかし、彼女は決して大理石で出来ていませんし、自分自身に思い上がることもなく、彫像でもありませんでした。反対に、きりっとした顔立ちには豊かな感情の血が流れ、両眼は希望に溢れた情熱の炎が一杯に輝いていました。勿論、それと同時に明らかに分かっていることは、ドン・ファンの思惑はもの見事に外れ、美しい宝石のエルヴィールは誰のものでもありませんでした。ドン・ファンには、女を我がものにしてとことんつれなくする権利を身につけていましたが、今回は叶いませんでした。ドン・ファンは驚き、それでもはっきりしない気持ちにとりつかれ、自分自身に誓いを立て、期待することに腹を立て、待つことに打ちひしがれ、エルヴィールは自分が愛する唯一の女であると考え、決めつけるまでになりました。結局、ドン・ファンは、大学に入学したばかりの若者と同じくらいに、愚かになっていました。エルヴィールが考えていたことは誰にも分かりませんが、そのことはドン・ファンには最悪でした。

それ故、ドン・ファンが無情さに泣かされ、少しずつ取り除こうと努めてきた自分の苦しみをエルヴィールに語っても、彼女は落ち着き払って分別を弁えて話しました。彼女は、ごく一般的な常識の中で情熱の因果を分析し、来るべき未来を考え、恋人たちの忘恩や裏切りについて語り、世間の厳しい批判と同じように喜びの後に来る悲しみについて語り、そして冷静さ、友情、平和、理性の素晴らしさを称賛して、話を終えました。

ドン・ファンは言いました。「なんということだ。彼女の大変美しい瞳の中には、冷たい好奇心と友情と慎み深さしか見ることが出来ないのだろうか。それとも、私がもしもそこに彼女の狂気の証を見抜いても、それは恋に落ちる勇気への反駁のようなもの、英雄の固い意志を模倣して誓いを立てているようなものなのだろうか。俺は彼女の見世物だ。このようにして俺もそこで終わりになるのだ」。ドン・ファンの夢想を書けばこのようになり、暴力を計画するに至りました。しかし、相手に同意を求めている時に、物質的暴力は何を成すことが出来るのでしょうか。彼に愛の進展は決して訪れず、恥辱が彼の心を噛み砕きました。

ドン・ファンが十分に納得させられたことは、エルヴィールは誠実であり、彼女の品行公正な考え方や、健康的な美しさを乱すことが出来るものは何もないことでした。このとき、最早、力を失った悪魔のようにドン・ファンは地獄の深淵まで落ちていく自分を感じ、自分自身で点した恋の炎を支えきれずに我が家へ逃げ帰り、天井へ丈夫な紐を掛けて輪差結びをした紐の中へ首を入れようとした時、その場からふっと見上げて窓の外を見ると、見知らぬ女でしたが大変に美しい女が彼に口づけを送っていました。ドン・ファンは輪差結びをその儘にして、ネクタイを結び直し、外へ出て、隣家を黙ってよじ登り、見知らぬ女の部屋へ這入りました。彼は跪き、女のために永遠の愛の歌を歌いました。女はお返しに露わなことをして何回もドン・ファンを褒め称え、そこで大地と、海と、星々と、目に見えない力が混じり合い、最後には喜びのうめき声を上げて彼に身をあずけました。エルヴィールのことは、きれいに忘れていました。

しかし、最初の欲望が過ぎると、ドン・ファンは自分が酔っていた興奮のことを良く観察して理解しました。女は正真正銘の狂人であり、ドン・ファンと先程やったようなことを日がな一日考えて行動するために、家族が部屋に閉じこめていたことは疑いようもないことだと直ぐに気付きました。このとき、ドン・ファンは自らの全生涯を稲妻のように理解しました。彼は家に戻り、準備してあった輪差を見て素早く首を通し、そして今度は完璧に首をつりました。

(一九〇七年七月二八日)

(1) フランス語の発音では、ドン・ジュアン。スペインの伝説的人物。モリエールの戯曲やモーツァルトのオペラなどの主人公にもなっています。女たらし。漁色家で不信心者。

四十九 剣の舞 (LA DANSE DES POIGNARDS)

禁欲主義者たちの精神力が強いことは、誰でも知っています。彼らは受難、憎悪、嫉妬、怒り、絶望について考え、馬を操る巧みな御者のように、それ等の感情を抑制していました。

何時も私の気に入りに、一度ならず私にとって有益だった彼らの思考の一つは、過去や未来について言っていることです。禁欲主義者たちは次のように言います。「私たちは、現在を耐えるために存在するものではない。過去も未来も私たちを悩ませるものではなく、過去は最早存在せず、未来も未だ存在していない」。

彼らが言っていることは真実です。私たちが過去と未来について考える時、それ等は存在していません。過去と未来は思考したものであって、事実のものではありません。私たちは、後悔や心配を生んでは大変に苦労します。私は曲芸師を見ましたが、彼は何本もの短剣を一本ずつ上へびったりと合わせていきました。それは曲芸師の額の上でバランスをとっている或る種の恐ろしい一本の木に成っていました。私たちが無謀な曲芸師と同じで、後悔や心配をびったりと合わせて持っています。曲芸師が一分間持っていたのでしたら、私たちは一時間持っています。曲芸師が一時間持っていたのでしたら、私たちは一日中であり、十日間であり、一ヶ月間であり、一年間です。足が悪い人は考えます。昨日は苦しかった、その前も苦しかった、明日も苦しいだろうと考えます。彼は一生苦しみ続けます。これでは人間の知恵は、大したことが出来ないのは明瞭です。何故なら、現在の苦痛を無くすことは、何時も知恵では出来ないからです。しかし、もしも道義的苦痛を問題にするのでしたら、後悔したり怖じけづいたりすることがなくなれば、何が残るのでしょうか。

過酷な目にあつた恋する男は、ベッドの上で眠ることなく、身を振り、復讐心を濃くして夢想します。過去や未来のことを考えなければ、彼の悲しみは残っていないのでしょうか。一つの失敗によって心にとりついた野心は、その苦痛の在処を何処へ探しに行くのでしょうか。自分が蘇らせる過去や、自分が創り出す未来の中でしょうか。山頂へ岩を持ち上げて、何時も繰り返す拷問としてのシシュフォスの伝説(1)を彼に見て、人は理解したように思います。

自らを拷問にかけているすべての人に私は言いたいのです。現在を考えなさい。刻一刻と持続して行くあなたの人生を考えなさい。今の瞬間は、次の瞬間がやって来ます。あなたは現在生きているのですから、今生きているようにやって行くことは可能なのです。しかし、あなたは未来が怖いと言います。あなたは見知らぬ未来のことを喋っているのです。事件というものは、私たちが前もって分かっているようなものではありません。そして、あなたが辛いと思っている現在についても、正に現在は大変活発に動いているのですから、あなたの苦痛も小さなものに成るのは確かなのです。全ては変わり、全ては過ぎ去って行きます。この箴言は、私たちに悲しい思いを与えたことが大変良くありました。けれども非常に稀ではありますが、時には私たちを慰めてもくれるのです。

(一九〇八年四月十七日)

(1) コリントスの王でアイオロスの子であるシシュフォスは、ゼウスによって、地獄で転げ落ちる石を永遠に山頂まで上げ続ける刑罰を科せられました。

五十 楡の木 (LES ORMEAUX)

葉が伸びる。すると小さな緑色をした毛虫のヒゲナガハムシが、楡の木の葉に住み着いて貪り食うんだ。楡の木は息をする肺を無くしたようになる。窒息して死なないように新しい葉を伸ばし、二回目の春を生きているのをあなたはご覧になるだろう。しかし、この努力も無駄だ。新しい葉は大きく成らず、そして一年か二年で楡の木は枯れて仕舞う。

こう言って樹木が好きな友人が嘆いたのは、私たちが彼の庭園を散歩した時でした。友人は何本もの樹齢百年の楡の木を私に見せて、その最期が近いことを教えました。私は言いました。「戦わなくては不可ません。この小さな毛虫一匹には力がありません。一匹殺すことが出来るのなら、百匹でも千匹でも殺せるではありませんか」。

「千匹位の毛虫なら何でもない。そこには何百万匹もいるんだ。そんなことは考えない方が増しだよ」と彼は答えました。「でも、あなたにはお金があるでしょう。そのお金で人を雇うことが出来ます。十人が十日働けば、千匹以上の毛虫が殺せるでしょう。この美しい樹木を守るために、あなたは数百フランのお金を使おうとしないのですか」と私は言いました。

彼は、「私は沢山だ。働くことは沢山だ。どうやってあの高い梢の毛虫を取れば良いのだ。枝刈り専門の職人でなくてはならないだろう。この町には二人しかいないと思うよ」と言いました。

私は彼に言いました。「二人とは、それだけでも酷いです。彼ら二人は高い梢で働くでしょう。彼ら以外の熟練でない人は、梯子を使ってやるでしょう。全部の楡の木を救えなくても、二本か三本なら救えるでしょう」。

「私にはそれをやる勇気はないよ。そんなことはやれない。毛虫の侵略を見ないように、その間は何処かへ行っているよ」と、とうとう彼は言いました。

私は彼に答えて言いました。「想像力とは大変な力です。戦う前からあなたは敗走しているのです。相手にあなたの手の内を見せないで下さい。物事の困難さの巨大な重さや人間の弱さを考えたら、何も手を着けなくなるでしょう。当然と言えば当然ですが、腰を上げて、自分の行動を考えてみなくてはなりません。石工を見てご覧なさい。彼が静かにクランクを廻すと、苦勞することなく重い石が動きます。やがて家は完成して、階段では子どもたちがはしゃぎ回ることでしょう。私は一度クランク軸を操作している職人を見てびっくりしましたが、彼は厚さ十五センチもある鋼鉄の外壁に穴を開けていました。彼は口笛を吹いて道具を廻していました。鉄屑の細い削り屑が雪のように落ちていました。この男の果敢さに私は感動しました。十年前のことです。その穴は開けられ、そしてまだまだ他の穴も沢山開けたに違いありません。毛虫のことも、この穴と同じことを教えてくれます。楡の木にとって一匹の毛虫は何でもないでしょう。しかし、小さな歯であっても沢山いれば森を食いちぎって仕舞うでしょう。小さな努力を信頼しなければなりません。そして、昆虫に対しては自分も昆虫になって戦わなければなりません。あなたにとって働く理由は沢山あり、それがなければ楡の木も生きられないでしょう。運命は変わりやすく、爪で弾くだけで新しい世界が生まれます。どんな小さな努力でも、際限のない大きなものに繋がって行きます。楡の木を植えた人は、人生の短さなど考えませんでした。彼のように自分の足元よりも遠くを見ないで、やるべきことに自分の身を投じて下さい。そして、楡の木を救って下さい」。

(一九〇九年五月五日)

日に当たって体を焼いているか、自分の家の近くでぶらぶらと無為に転がっている人々を、時々道端で眼にすることがあります。老衰して死の影が間近に迫ったような光景を最初に見た時は、恐怖を抑えきれなくなります。私たちは「こんなことをしていて、何故死ななかつたのだ？」と言ってその場を立ち去ります。しかしながら、その様な彼らは未だ人生を愛しているのです。日に当たって体を焼きます。死にたくないのです。私たちが思考するのは苦しい道です。熟考して々躓き、自ら傷つき、苛立ち、不愉快な間違っただ道へ自分を投げ入れます。それは直ぐに起こります。

私が、この様な考えを言った後で、慎重に模索して正しい道を見つけた時、私と話をしていた友人の眼が猛火のように燃えながら、間違っただ話にすっかり震えているのを見ました。ついに彼は叫びました。「全てが悲しい。元気でいる人々は、病気や死を恐れる。彼らはそうならないように全力を尽くす。自分たちの恐怖で失うものは何も無い。それを丸ごと味わっているのだ。そして、この病気を理解してくれ。死ぬことを言うようになるが、決してそれが全てでは無い。それを押し戻すのだ。この恐怖を自分たちの不幸につけ加える。人生がそんなにも酷い時、何故死を恐れるのだ、とあなたは言う。しかしながら、同時にあなたは死が憎まれているのを知っている。私たちが最後を迎えるのはそんな風にしてだ」と彼は言いました。

彼が言ったことは、絶対に彼には明らかに見えたことです。そして、もしもこの私が信仰を望んだとするなら、だんだんと強くなるだろうと思いました。不幸であることは難しいことではありません。困難なのは幸福に成ることです。幸福に成ろうとしないことは合理的ではありません。その反対で不合理です。美しいものは全て困難である、という諺もあります。

私がこの地獄の言葉から身を守るのは正しいのですが、自明という偽りの理解の光によって裏切られます。薬も無く不幸であった私自身が証明されるのは何回あるのだろうか？ そして、不幸なのは何故だろうか？ 多分、女性の眼に眩惑されるか疲労するせいでしょうし、あるいは大空の雲によって暗くなるせいでしょう。それはせいぜい何か平凡な思考や胆汁の活動のためであり、顔つきや言葉によって私が推測した何かの虚栄心を予測したせいです。何故なら私たちはこの奇妙な精神錯乱を全て認識して知っているからで、一年後には心から笑って仕舞います。涙や嗚咽に近い泣き声、胃、心臓、腸、激しい動き、筋肉の無意味な収縮に理性の働きが加わるや否や、情熱が私たちを騙すことを私は考慮に入れます。内因的なことが毎回受け入れられます。しかし、体に良くないこの光は、直ぐに消えて無くなることを私は知っています。病気や死は誰にも共通して自然であり、それに逆らうことは確かに間違っただ考えであり、人間として避けられないのは確かであることも私は知っています。というのも人間としての本当の思考は、何時も人間としての状態と、事物の成行きと何らかのやり方で一致していると私には思えるからです。そして、大変に強い理性は、怒りを強くする嘆きの中に軽率にも自分を投げ入れませんが、怒りは強くなっていきます。地獄の悪循環です。しかし、悪魔は私であり、怒りを集める熊手を持っています。

(一九一一年九月二五日)

五十二 慰め (CONSOLATION)

幸福と不幸を想像するのは不可能です。私は、所謂喜びについては話しませんし、リューマチとか歯の痛みとか尋問による拷問のような苦痛についても話しません。それらは幾つもの原因を思い起こさせながら、考えを一つに纏めることができます。何故なら幾つもの原因から、一つだけの確実な影響があるからです。例えば、もしも沸騰したお湯が私の手に飛んだとしたら、もしも私が自動車に倒されたとしたら、もしも門に私の手が挟まったとしたら、それらの場合は私の痛みが凡そ想像出来ますし、他人の痛みについても私は知ることが出来ます。

しかし、幸福とか不幸とかを生む色彩の見解が問題になると、他人と自分とでは何も予測出来ませんし、何も想像出来ません。全ての思考が空回りして、思うように考えられません。理由を知らなければ満足のいく思考は何もなく、より強力な理性を首尾良く自由に出来ません。例えば劇場で、もしも可哀想な話や背景の絵や怒鳴る男や泣いている女を注意深く見るなら、私たちは釘付けになり、尋常で無い滑稽な者に強く惹かれます。あなたは、これらの滑稽な身振りに涙を誘われます。本当の涙です。あなたは、下手な朗読でも美談を感じて、どんな人でも持っている悲しみを一瞬理解します。その瞬間は、あなた自身が旅行中に日常から遠く離れて感じる一瞬です。悲しみと慰めは、小鳥たちのように心の枝に止まっていて、そして飛んで行きます。人はそれを恥ずかしと思います。モンテスキューのように言って赤面します。「気が散ることなく読書を一時間しても、私は決して悲しんだりしなかった」。しかしはっきり言えることは、もしも本を本当に読むのなら、読むことに没頭すべきです。

有蓋護送車でギロチンへ向かった男は気の毒です。しかしながら、もしも彼が別のことを考えたなら、私の現状よりも彼は有蓋護送車の中でも最早不幸せではありません。もしも彼が曲がり角とか車が揺れた回数を数えていたならば、曲がり角とか揺れのことを考えることでしょうか。遠くから見えるポスターがあれば、彼はそれを読もうとすることでしょうし、最後の瞬間はそのことで頭が一杯に成ることもあるでしょう。そこから私たちは何を知るのでしょうか？ そして、彼も何を知るのでしょうか？

私は、溺れた友人の話を知っています。彼は船と波止場の間に落ち、長い時間船体の下に取り残されました。再び引き上げられた時は、意識を失っていました。つまり彼は死から生還したと言えます。以下は彼の記憶です。彼は海水の中で両眼を開けました。眼の前に一本のロープが漂っていました。彼はそれをめると思いましたが、決して掴みたいと思いませんでした。青い水と漂うロープを見ていると、自分の考えは一杯に成って何も考えつきませんでした。彼が私に語ってくれたことによると、それが最後の瞬間だったということです。

(一九一〇年十一月二六日)

五十三 勝利 (VICTOIRES)

或る人が幸福を探すと見付からなくなります。決して不思議なことではありません。幸福はショーウィンドーの中で売られているようなものではなく、あなたはそれを選んで、買って身に付けられるものでもありません。もしもそれをよく見たならば、あなたの家でもショーウィンドーの中にあつた時のように、青かったり赤かたりするでしょう。それに反して幸福はあなたが手にする時にだけ幸福なのです。もしもあなたが世界中に幸福を探しても、あなた自身の手から離れて外部に幸福であるものは何も無いのです。要するに人は幸福について予想することも推論することも出来ません。今が幸福でなければいけません。未来が幸福であるように思う時、そのようにあなたはよく考えますが、あなたは既にその時幸福なのです。希望を持つこと、それが幸福です。

詩人たちは々、物事を拙く表現します。私はそのことをよく知っています。詩人たちには陳腐な表現を余儀なく留めさせている音綴やリズムの一致というものがあるために、大変に拙いものになっています。幸福は遠く未来の中にあればある程輝いており、幸福を手にとると最早何も良いものはないと詩人たちは言います。それは虹をみたいとか、掌から水の出る泉が欲しいと願うようなものです。しかし、それでは大雑把な話です。言葉で言う以外に幸福を追い求めることは不可能です。特に幸福を求める人々を悲しませることは、望みが全然達成されないことです。トランプで遊ぶことは、私には何の意味もありません。何故なら私はトランプ遊びをしないからです。ボクシングやフェンシングも同じです。音楽も同じです。読書も同じです。科学は遠近法で楽しんだりしません。そこに這入らなければなりません。そして始めは窮屈で、何時も困難でなければなりません。規則正しい労働と、勝利に次ぐ勝利がそこで多分幸福の形を作っていきます。そして、トランプ遊びとか音楽とか戦争のように、行動が皆と共通して一般的になると、その時は幸福が生き生きとしてきます。

しかし、隠者の孤独の幸福というものもありますが、行動、労働、勝利は何時も同じ姿をしています。けちの幸福とか蒐集家の幸福もありますが、それらは多くがもっと似ています。以上のことから解ることは、もしもけちな人が老人たちに金製品を肌身離さないようになると、悪徳を身に付けないためにけちが何よりも重視されるのですが、それに反して人が感動するのは寧ろ七宝とか象牙とか絵画とか稀覯本ではないでしょうか。けちは人から馬鹿にされ、自分のお金を人のために遣おうとしませんが、書物の蒐集家も汚れるのを心配してそれらの書物を決して読みません。本当は、あらゆる幸福がそうであるように、これらの幸福は昔に味わうことが不可能です。郵便切手を愛する蒐集家もいますが、私にはその幸福が全く解りません。同様にボクシングを愛するのがボクサーで、狩を愛するのがハンターで、政治を愛するのが政治家です。人が幸福であるのは自由な行動においてです。それは幸福であると自分が与えている決まり事によってです。サッカーの試合にせよ、学問の研究にせよ、言葉を受け入れた規律によってです。そして、それらの義務は遠くから見ている面白くなく気に入りません。幸福とは、幸福を求めなくなった人々に与えられた一つの褒美です。

(一九一一年三月十八日)

五十四 行動する人間 (HOMMES D'ACTION)

警視總監は、私の流儀から言えば最も幸福な人間です。何故でしょうか。彼は何時も行動し、何時も新鮮で予測し難い状況の中にいるからです。ある時は火に向かい、ある時は水に向かい、ある時は落盤に向かい、ある時は鎮圧に向かい、泥や埃や病気や貧困にも向かうからです。最後には々人々の怒りにも向かいますし、その時には人々の熱狂にも向かいます。この様にして彼の人生の一瞬一瞬に、この幸福な人間は決定されるべき問題に確かに向かい合っているのであり、正しく確実に決定された行動が求められています。それ故に普遍的法則というものはありません。反故になる無用のものもありません。事務的な報告書の中には不平の言葉もなければ慰めの言葉もありません。彼はそのことを官僚たちにやらせるだけです。知覚となり行動するのは彼です。ところで知覚と行動という二つの扉が開かれると、人生の大河は軽い羽のように人間の心を運んで行きます。

そこにはゲームの秘密があります。ランプのブリッジで遊ぶことは、知覚から行動までの人生を映して流れることです。サッカーをして遊ぶともっと良く解ります。新しく予見出来ないデータに沿って素早い行動を心に描くこと、そして直ぐにそれを行うことは望み通りの人生で一杯です。その時、あなたは何を望みますか。心に留めて置きたいことは何ですか。時間が後悔を解決してくれます。泥棒や強盗という内面生活がどんな風にして存在出来るのか々自問します。決してそんなものは無いと私は信じます。何時も待ち伏せているか眠っていて自由に動きません。予想する能力は、全てが自分の足や手を前に出して使わず、偵察する者の中にあります。ですから罪の観念もそこになく、一人ひとりありません。

何故戦争になるのでしょうか。何故なら人間はその時、行為に溺れるからです。彼らの思考が開始する時は、電力が低い市内電車の電灯のように弱いものです。私が言いたいのは、彼らの思いは熟考したものであることです。恐るべき行為の力はそこから出てきます。行為は自分のやり方で正当化します。何故なら内面の電灯の明かりを消すからです。何かが、多くの下劣な情念の光を消すのです。憂鬱、人生の嫌悪とか陰謀、偽善、恨みとか小説的な愛、あるいは手の込んだ悪事のように、思いが育てるのはそれら全てです。そして行為そのものの中にあっては、正義も消えます。警視總監は、水や火を攻撃するのと同じやり方で暴動と戦います。暴徒は自分のランプも消します。残酷な夜です。何故なら隅々に身を潜めて拷問する人々がおり、告白を聞く判事がいるからです。それ故にベンチの上には繋がれた徒刑囚たちがおり、權を漕ぎ続けてそこでわめいて死んでいきました。その外の男たちは鞭で打たれていました。鞭で打たれていた男たちは、鞭のことしか考えませんでした。彼らは自分の居場所があれば、残酷な状態が続いても構いませんでした。警視總監は最も幸福な人間です。でも彼は人間の中で最も有益であると私は言いたくありません。無為はあらゆる悪徳の母ですが、あらゆる美德の母でもあります。

(一九一〇年二月二一日)

ジムが私に言いました。「何故私がまぐれ当たりの賭けの代わりに、本物の馬を賭けるのが好きなのか、あなたは知りたいのだね。大変に生き生きと馬が走る本物のレースは、まぐれ当たりの賭けではないことを先ずあなたに断言出来る。もしそのことが理解出来たら、その基になるのは私の両眼である。もし私が調教師を一人ずつ追って行って、もしレース前の馬を全頭手で触り、もし最終チェックを行った時の馬の体重を知ったとしたら、そしてスピードを測らせて手助けしてくれた馴染みの馬にどんなにか期待が行くことか。その時偶然が働くのは、本当に小さな部分でしかない。しかし、これらの偶然の悪魔たちが全てを隠すんだ。調教をしている馬場で、一つのテストで驚くことがあり得るのは偶然による。人が言っていることを聞いて僅かな真実を手に入れようとするなら、これらの情報を全て吟味して選択しなければならない。残りは私が選んだ馬がどんなに元気があって、どんなに眼と鼻孔がしっかり開いていて、どんな耳をしているか見ながら、どんなに走るか見抜かなければならない。それはあなたが私にトランプを投げて動物のように遊ぶゲームと訳が違う。私はここの馬場で喜びとチャンスを作るのだ。あなたは、知性と注意力がここの芝生の上以上に発揮される場所を、この世に見付けることは無いだろう。

あなたが馬を選ぶ時や馬がスタートを切る時は、私は敢えて言いますが、それはルーレットが回転した時である。それらの馬たちは赤や黄や緑の風船のように木の葉の中で跳んで行く。今は何が起きるか分からない。只、良く見るだけだが、それはもうルーレットの区切りを次から次へ回る玉ではない。引いてきた一枚のトランプではない。それは生き生きと生きている偶然であり、それが起こすことを私は順次読んでいくのだ。私は軽率さを理解し、失敗を理解する。馬たちの一団は縮まってきて、押し合いへし合いをしている。私の馬は勝つだろうか。馬の頭が左へ行き、続いて臀部も左へ行く時、その馬は引っ張られているように見えるが、私は騎手はその動きをやっていることをよく知っている。鞭が高く上がる。馬たちが周りを走る馬場に付けられているリボンを見て、私はゴールまでの距離を測る。私は諦めてがっかりした顔になり、空気を飲み込むように感情を抑え、地団駄踏んで叫んでいる。私の財産のことは私が知っている。その財産には耳があり、脚があり、鞭がある。私は理性の働きに偶然ぶつかる。恐れるかもしれないが、最後まで希望を捨てないのだ。それこそが生きるということだ」。

私は彼に言いました。「しかし、ジム先生、馬券を買う者は皆自分の知性を使います。彼らはあなたと同じ位に楽しんでいますが、あなたよりも利益を上げています」。

彼は言いました。「その通りだ。しかし、人生にも競馬場しかないのだ。ここであなたも時間を無駄にするのだと思う。まあ、それがお決まりだ。次のレースにあなたのチャンスも皆と同じようにある。しかし、人生という悪魔にあってはスタートしかないのだ。損失は損失を導く。だから私はあなたに話すのがいやなのだが……」。

この瞬間からジムは困った顔に成りました。そして、彼が少し酒を飲み過ぎていたことに私は気付きました。

(一九〇八年六月十九日)

五十六 商売 (COMMERCE)

水が小川を如何に流れるのかを見詰めることは大変にためになり、色々なことを教えてくれます。ある時はゆっくり流れ、ある時は速く、さざ波を立て、打ち返し、渦を巻いているのが観察されます。これらの現象は全てが川床の凸凹、兩岸の形状、川幅の広さ、水位の高さによって生じます。これらの状況が同じであると仮定してみると、その地点から別の地点への流れの様子をあなたは大変正確に述べる事が出来ます。この水は流れが大変速くて泡立っています。もっと遠くへ流れて行くと小さな丘々の中で水が一杯に溢れていて、更にもっと遠くへ流れて行くと長い糸になって伸びて行きます。場所によっては流れが迷っているようであり、外の場所では回転し、すり鉢状の穴を作って窪んでいます。

しかしながら、もしもあなたが小さな水の集団を幾つも追って行って大河の中で見失うことがないとしても、恐らく同じコースや流れを二度と観察することは出来ないでしょう。小さな水の集団を辿っていく岸辺の道路は詳細に予見出来ませんが、それに対して小川という水が流れる道は巨大な水滴の集団であり、その流れは予見出来ます。

人間の集団もそれと同じ様なものです。その様に限定された個人、男とか女という個人を通りの中で追って下さい。立場とか管理されている時間を除けば、もしもその人が店の前で立ち止まり、通りを曲がり、あちこちを横切っていくとするなら、あなたはその人が辿る道を正確に予見することは出来ません。

しかし、奇妙なことを言いますが、もし通りを通っているのが集団であるなら、直ぐにその集団の形状やさざ波や逆流や渦巻は認識されます。それらの原因は々見落とされますが、その結果の現象ははっきりと眼に見えます。そして、もしも私が商人であったなら、それらの動きに従います、それらの動きを変えようとするよりも順応して、より賢明になろうとします。私は逆流する水の傍に店を出します。その場所では、見知らぬ原因による動きによって人は流れていて、歩みが遅くなり、迷い、方向を変えます。というのも、それらの動きが私の店のショーウィンドーを見るためのものとなり、立ち止まり、店内に這い入り、購入するようになるからです。そして、私はよく自分自身で次のように予想します。「そのような店は客が少なくなる前に閉店されるだろう」。何故ならそのことを忘れるような者は、流れを観察せず、人々が足早に通り過ぎて行って仕舞うような場所とか、誰も通らない通りに店を構える者であるからです。というのも釣り人は、選んだ場所が悪ければ、釣り糸を垂らしても無駄になるからです。

(一九〇六年七月七日)

五十七 （熟練した販売員）

私は昨日、女性たちの心を捉える可愛らしい罫を観察しました。もしも太陽が季節の約束を守って暑くなっても、今年の夏に青色、薔薇色、緑色、黄色、褐色のぶ厚い麻布を女性たちが着ることになるか、あなたには分かりません。そして、彼女たちが最も自慢しているのは、林檎の形をしたしわくちやだらけの鞆に最も似ている長いジャケットです。

熟練した販売員は、店の入口近くや殆どが通りに出た所に、魅惑的に誘惑を起こさせるこのような種類の洋服を並べます。広々とした売台やその上に積み重なったジャケット、色々な色のスカートを想像してみてください。申し分のない服装には、花から花へ蜜を吸う蜜蜂のようにぶんぶん言う女性たちが投げ出したそれらの服装には値段が付けられていて、広野で虐殺されたように投げ出されていきます。彼女たちが洋服をサラダのようにかき回している間、私は彼女たちを観察していました。一人ひとりが蜜蜂と成った彼女たちは、一つの色を選んで洋服を手に取りました。此方ではジャケット、彼方ではスカートで、似合う物を探していましたが、私が見るところ、良い物が見付からないようで、話をすることもなく、激しい不平の表情をしていました。白いネクタイを締めた美男子は、落ち着いていて驚くような自信で彼女たちに伝えて言っていました。「良く探して下さい。私たちの洋服は全て満足して戴ける物です」。

この混乱と略奪しているような光景に私はびっくりしました。其処から数メートル離れているだけで、素晴らしい秩序がありました。同じ種類の洋服が、列を作った寄宿生のように横棒の下に整然と一列に並んでいました。

私と知り合いの老監督者は、この販売員の知恵のことを私に説明してくれました。彼は次のように言いました。「彼女たちは同時に、洋服を二着見付けることが出来ます。どちらにするか決めかねています。ですからそれらの洋服のうち安い洋服の方は殆ど売りつけません。買わずにいないのを良く見て下さい。彼女たちは近付いて値札やざわめく声によって引き寄せられます。彼女たちは品物に触り、袖を引っ張り、試着しようとしています。狂ったように探し回り、その生き生きした欲求は尽きることがありません。その様にして彼女たちは自分の姿を見て、青色とか緑色とか黄色の服を望み、彼女たちは一人ひとりが運悪く犠牲者であると思います。平然としていた店員は、何度も苛立ちが激しくなります。彼女たちが濃い青の服をどんな風に放り投げるか、見てご覧下さい。黄色とか茶色を手取るのは、ほんの一瞬です。彼女たちは、見当たらない二、三人いる女性販売員たちを、耳が聞こえないで声が出ない者たちであるようなことを言っており、自分は彼女らの犠牲者であると思っています。私たちが服を選ぶのは一時間に二百回を記録することでしょう。この労働は無駄な動作ですが、結局は最後に欲望の好みが変わっていきます。愚鈍と化した一時間後に考えが決まります。何故なら最後はきちんと整理されて、まあまあの値段の洋服に落ち着くからで、それは殆ど似たようなもので、他の人たちも同じ様なものですが、私たちはそれまでの物よりも高い物売ることになります。私たちが期待するのはそこなのです」。

（一九〇九年七月十日）

現実には、何と言っても沢山の不幸があります。或る種の想像力を駆使して、人々がそこに不幸を付け足そうとしていることもあり得ます。あなたは毎日、少なくとも自分のやるべきことが不満でぶつぶつ言う一人の人間と一緒にいれば、彼の言葉は何時もあなたにとっては影響が大変強いでしょう。何故なら、どんなことにも不平を言いたいことがあり、何事も完全ではないからです。あなたが学校の先生であるなら、何も知らないで何にも興味を示さない若き野獣のような子供たちを教育しなければならない、と言うでしょう。あなたが技術者（エンジニア）であるならあなたは役にも立たない書類で一杯の大海に身を浸けさせられますし、あなたが弁護士であるなら半睡状態であなたの言うことを聞いたり、食べたものを消化している裁判官の前で弁護することになります。あなたが言っていることは多分本当でしょう、私もそうだと思います。それらは、人々が何時も言っているだけに、真実でもあります。もしも、そのことであなたの胃が悪くなったり、靴が水びたしになったりしたら、私は大変に良くあなたの気持ちを理解します。そうです、何かに憑かれているのが人生であり、人間です。もしも、あなたが神を信じているのなら、神でさえも同じです。

しかしながら、次のことには気付いて下さい。つまり、それは終わりが無いものであり、悲しみが悲しみを産むのです。それと言うのも、あなたに同情することだけが運命であるなら、あなたは不幸を増大させて希望が微笑んでいることを最初から見失い、あなた自身の胃は更に悪くなるからです。もしも、あなたに友だちがいて、彼があらゆることをひどく嘆いているなら、恐らく彼の気持ちを鎮めようとして、もっと違う目で世界を見させようとするでしょう。何故、あなた自身に無二の親友がいないのでしょうか。いいえ、そうではありません。あなたに親友はいるのです。本当です。私が言いたいのは、些細なことを好きにならなければ不可ないということです。そして、親友と共に元気になるのです。何故なら、すべては人が最初に示した姿勢によることが良くあるからです。すべての事柄には二つの取っ手があり、手が傷つく取っ手を持って運ぶのを選択することは賢くない、と昔の人は言いました。哲学者と命名された人々は常に、如何なる時でも最良の話を選択し、最も元気づける人々のことを言っているのですが、その譬えは的を射ています。それ故問題なのは、そう言う哲学者に有利に働くことであって、不利に働くことがあってはなりません。もしも私たちが哲学者のような道を選択するなら、私たちは満足である理由を大変に良く理解して、極めて立派で話し上手な弁護士になるでしょう。私は時々目撃したのですが、人々は不注意や一寸した挨拶からでも自分の仕事に不平を言います。もしも彼らが自分のことや考えについて話す努力をするようになるなら、不平はなくなるでしょう。彼らは詩人になったのです。陽気に歌う詩人です。

今、小雨が降っています。あなたは通りにいて、傘を開いています。うんざりです。そう言ってみたところで何になるのでしょうか。「それにしても、冴えない雨だ!」。そう言っても雨の雫や、雲や、風にとっては全く関係のないことです。何故あなたは、良い方に考えて言わないのでしょうか。「おお、幸いなるかな小雨よ!」。そんなことを言っても雨降りには何にもならない、とあなたが言っているのを私は耳にします。それはそうです。しかし幸いなるかな、と考えることはあなたにとって良いことなのです。あなたの体は元気になって動きだし、実際に暖かくなってくることでしょう。何故なら、それはこの上なく小さな喜びの動きによる結果であり、これであなたは風邪をひくこともなく、雨を受け入れられるようになるからです。

そして、雨と同じように人間に対しても同じ気持ちを持つことです。簡単ではない、とあなたは言います。しかし、そんなことはありません。雨に対する気持ちよりも、もっと容易です。何故なら、あなたは雨に微笑んでも何もなりません、人間に微笑むと大変な力になるからです。単に人の真似をしているに過

ぎませんが、その微笑みは既に悲しみや退屈を和らげています。それはあなたが自分の心の中を見つめて微笑む口実を見つけ出すのとは別のものです。「私は今日も虚栄心が強い人、嘘つき、不義の人、退屈しておしゃべりな人に会うだろう。彼らは、自分に無智であるから不可ないのだ」とマルクス・アウレリウス(1)は、毎朝、言っていました。

(一九〇七年十一月四日)

(1) ローマ皇帝で哲学者(一二一～一八〇)。ストア哲学に傾倒し、『自省録』を書いた五賢王の最後の一人です。

男性たちに本当の友情は多くないことを、私は認めざるを得ません。それに対して私は、非難の言葉しか聞きません。或る男性が言いました。「その時は俺が、一週間に一日は焼きたてのパンが手に入らなくなるのかい?」。そして、もう一人の男が次のように言いました。「僕が日曜日にハイキングへ行く時、宿屋は門を閉じているのだろうか?」。そして、三人目の男が言いました。「日曜日には全ての商店が店を閉めるが、快適なもんさ。僕に出来たての手袋が必要かい?」。この様な話をしている彼らに新しい法律は彼らの習慣に変化しか与えませんが、彼らが言う程、既にそんなにも重要ではありません。そして、何かを失うリスクを持っている商人たちが、その後で不平を言って暴れて脅すのを見て人々はびっくりします。多くの人たちにとって他人の満足感が、実際にそれ程の重みがある訳でないのは大変はっきりしています。労働者たちは何も辛いことがなければいい程、友人たちに事欠きません。ミルク入りコーヒーとかトランプゲームを犠牲にしなければならなくなると、直ぐに誰もが鐘楼の鳥のようにギャーギャー叫びます。

それは本当のことです。彼らは昔からの憎悪や習慣からの眠りの心を持っている、と人々は言うことでしょう。ところが最も小さな変化に目覚めているのです。あなたはコップを割るとか、箒でいい加減に掃くとか、女性たちのこの上なく何食わぬ声を々聞くことができました。その時、女性とか年若い給仕に言われることは、聞くに快いものではありません。しかし、私はそれらの言葉を気にしません。私を不快にさせるのはアクセントで、激しい情熱というものは全てがアクセントに現れます。喉は締め付けられ、胸が熱く震えているのが分かります。ホメロス風の野蛮な人間が傷ついた敵に言う時には、その様なアクセントで言うに違いありません。「私はあなたを青と緑色の死体にするでしょう。そして、あなたの顔の周りはきれいな女性よりも沢山の蠅がいるでしょう」。

あなたは、私が言うことは大袈裟で、人の怒りは決して人殺しなどしないと言います。私には分かりません。怒りは々人を叩きます。時々、平手打ちは口論した後で行われがちです。多くの人が似たりで寄ったりで同じであり、人を叩かない男性たちや女性たちの間では、敢えて次のように言っています。「手で殴っても良い時がある」。それはならず者たちのことを言っているのが私には分かります。平手打ちとナイフで傷付けること、その違いを生むのが教育です。怒りは常に同じで、常に醜いです。

男性たちも女性たちも次のように自分自身に、絶えず繰り返して言う必要があります。「怒りは病気である。怒りは突然の狂気である。怒りはアル中と同じ位に品位を下げる」。火を付けたように怒る前に、その損害が小さいか、全てを償うためにやるべき仕事は価値が少ないか、他人にその怒りのことを話して虚しいか、そして自分自身を形成する上で悪くないか、その様なことを一人ひとりが判断しなければなりません。

賢明な人の最も単純な一言が、々冷水を浴びせられたように幻滅を生じます。戦争について語っていた或る労働者が幾分力を込めて次のように言いました。「俺は良く働いたし、スープも用意したのに、プロシア人が食べに来るなんて!」。他の人が彼に答えました。「友よ、あんたはスープ一皿のために人を一人殺しに行くことなんかないよね?」。

(一九〇六年九月十二日)

六十 礼儀作法 (SAVOIR-VIVRE)

宮廷人風な礼儀がありますが、良いものではありません。そのようなものは礼儀ではありません。これ見よがしにやることは、全て礼儀ではないと私には思えます。例えば実際に礼儀正しい人間は、軽蔑すべき悪意ある人間には厳しく対応します。そして、手を挙げることもあるでしょうが、それは決して無作法ではありません。わざとらしい親切も又礼儀ではなく、計算された阿諛も礼儀ではありません。礼儀とは、それを考えずに行う行為だけに言えるものであって、私たちがやろうとする意志がなくてもやって仕舞う何ものかです。

最初の感情で行動する人間は、感じたことを全て言って仕舞います。最初の感情に身を委ね、自分が体験することを認識しようとする前に感嘆や好みや喜びを抑えることなく直ぐに表す者であり、無作法な人間です。彼は何時も謝ることになるでしょう。何故なら、彼は故意ではないのですが、自分の意志に反して人の邪魔をしたり、心配させたりすることになるからです。

軽率なことを言って誰かを傷つけることは、それを望まなかったとしても辛いことです。礼儀正しい人とは、取り返しが付かなくなる前にその不快を感じて直せる人であり、手際良く上品に道筋を変える人ですが、言って良いことと言ってはならないことを前もって見抜いていることが、更に礼儀正しい人と言えます。そして、疑念を抱いたときは、話題をその家の主人に任せて置くのが礼儀正しい人と言えます。全てそのことは望んでもいなかった悪口を避けるためです。それというのも、もしも彼が或る危険人物の急所を突く必要があると判断するなら、彼にとっては自由です。そのときの彼の行為は厳密に言うなら道德の問題であり、最早礼儀の問題ではないからです。

無作法は何時もごちないものです。無作法な人は、自分の年齢を誰かに意識させる下らない意地悪な人ですが、望みもせず仕草や顔つき、或いは良く考えもしない言葉でそれをやると無作法な人になります。誰かの足を踏んで歩くことは、もしもそれが意識的に行われるのであるなら、それは暴力になります。無意識であるなら、それは無作法です。無作法は予見出来ない水切り遊びのようなものです。礼儀正しい人間はそんなことをしませんし、自分が確実に手に触れたい処しか行いません。彼は最良と思うことしか行いません。礼儀正しい人は、当然のことながらおべっか使いの言葉を言おうとしません。

礼儀正しきとはそれ故、習慣的に身につけたものであり、気楽に行うものです。無作法とは、食器や骨董品類から手を滑らせて引っかけるように、自分がやりたいこととは別のことをやって仕舞うことです。或いは自分が言いたいこととは別のことを言って仕舞うことであつたり、自分が伝えたいこととは別のことを、ぶっきらぼうな口調、無駄な大声、躊躇や早口の分かり難い言葉で言って仕舞うことです。礼儀正しきとはそれ故に、フェンシングから教えられることがあります。うぬぼれの強い人は、わざと非常識なことをやって、何の学識もないのに言いたいことを言います。内気な人がうぬぼれ屋でないのははっきりしていますが、どうして良いのかも分かりません。何故なら、行為や言葉の重要性に気付いているからです。従って、彼は自分から行動したり話をしないように閉じ籠もって緊張しているとあなたは思っています。それは自分自身への驚異的な努力であり、彼は心が動揺すると汗をかいたり、顔が赤くなったり、普通では考えられない位に不器用になります。優雅な人は反対に、不安な印象や動きが無くて幸福感があり、誰も傷つけません。そして、このような性質は幸福にとって非常に大切です。上手に生きるには、それらのことを怠ってはなりません。

(一九一一年三月二一日)

(次章へ続く)

六十一 盲目の愛とは？ (AMOUR AVEUGLE ?)

「人を盲目にする愛を々非難しながら、何時も憎しみのようなものを留めて、もっと酷い不幸の段階になっていくことを人は忘れていた」。これはオーギュスト・コントの思想を引用したのですが、私が知る限り最も美しい言葉です。スピノザは、愛が何時も憎しみに勝つのは自然であり健康にとっても良いことである、と言っていました。しかし、無邪気な実証主義者たちはそこに何かもっと深い意味を加えます。それは愛だけがそうあらねばならないような一つの性格を照らすものであり、この率先的な思想に従って何時も感じの良い愛情が自然にくっきりと良く表れてきますが、個人を守る情念に対しては力が無く、従って経験がそれらの愛に代わって十分保証することもなく、何時も否定されるかもしれません。もしも私が或る男は裏切られると信じるなら、彼は裏切ることでしょう。もしも私が信用しないなら、私は嘘を付かれることでしょう。結局、刑の言い渡しは事実に従って何時も大変正しいのですが、心の底では何時も不公平だと思っています。要するに倫理的美点を信用しないなら、太陽の光が射さない植物のように死んで仕舞います。

外部の秩序を崇拜したくなると、楽観主義は否定されてきました。そして、ヴォルテールが喜劇『カンディッド』の中で表したのは、破壊者としての彼の才能でした。しかし、人間社会の秩序について言えば、もしも憶測からその才能を真っ先に愛するなら、健全に判断することが出来なくなるでしょう。何故なら彼は限定的に一部分だけ強化された悪徳によって一人ひとりの悪口に答えるからです。ですから全てを斟酌するなら、皮肉が生むのは善よりも多くの悪です。

もしも商人という者たちは泥棒であると私が指摘して言うなら、自然に誠実さはぐらつくようになり、何時も感情的になってあらゆる機会を捉えて猛烈な攻撃を受けるのでしょうか？「そうです、泥棒もいると仮定しましょう。この世は何でも存在すると言われているのですから」。国会議員の世界も同じで、アナキストたちは侮辱され悪口だらけです。アナキストは最悪とされています。そして、もしも人間たちが自然の果実のように混乱や軽薄さや墮落を成長させると信じるならば、悪は絶頂に達します。

戦争が少なくとも憎悪によって照らされるや否や、簡単に人は戦争を甘受します。反対に、もしもそこになお愛や友愛や平和の力というものを理解していたならば、その時は好戦的な美德で戦争に勝利するというやり方が、所謂その必要性を立て直すためにより良い準備を整えることとなります。

ですから現代の作家たちは、未来の〈人類〉の象徴として自分の息子たちを支えてきた母親を推薦するや否や、非常に感動しています。大衆の本能は既にこのイメージを神格化していますが、自然発生的な神学は自然の儘の人間を呪うことになるでしょう。何故なら子供たちが大きくなって立派に成長するのは、母親の視線のお陰であるからです。その時、勇気は希望になって応えます。その代わりに憎しみとか軽蔑を自ら感じる者は、そのことにより組織的に行動し、中傷家を正当化します。情念というこのメカニズムをよく認識した者は、偉大さと奥ゆかしい美しさを手に入れます。

以上をもって、読者諸氏へのお年玉の代わりと致します。

(一九一二年十二月二八日)

六十二 家庭で (EN FAMILLE)

二種類の間がいます。うるさい音に馴れている人々と、静かにさせようとする人々です。仕事をしているときや眠ろうとする時、ひそひそ話の音が聞こえたり思いつ切り椅子を動かす喧しい音が聞こえると激怒する人々を、私は沢山知っています。あるいは、他人の行動をとやかく言うのを自ら断固禁じている人々も知っています。彼らは、他人の会話や笑い声、そして隣人の歌声を止めさせることよりも、貴重な思考や二時間の睡眠時間を失った方がましだと考えます。

これら二種類の人々は、反対の考えを持つ者から逃れ、世の中で同類の人々を求めます。色々と非常に異なる家庭を目にするのも、共同生活の規則や方針が合う人々と合わない人々がいるからです。家族の一人が気に入らないことを、暗黙のうちに全員が禁じていることを受け入れている家庭があります。或る者は花の香りが不快であったり、別の者は大声で叫ぶことを禁じています。夜は静かにして欲しいと思う者があれば、朝を静かにして欲しいと思う者がおります。此方には宗教に関係することを望まない者、彼方には政治について話すと歯ざしりして拒む者がいます。家族全員が一人の拒否権を認め合い、全員がこの拒否権を厳かに行使します。一人が言います。「この花のお陰で、一日中頭痛がする」。そして、他の者が言います。「十一時頃の大きなドアの音で、一晩中眠れなかった」。食事の時間に成ると、一種の〈議会〉に成り、各人が苦情を言います。間もなく、全員が盛り沢山の憲章を理解し、ここでの教育の目的とはそのことを子供に教えること以外にはありません。最後には全員が身動き一つせず、お互いに見合わせ、そして取るに足りないことを言います。そこからは陰鬱な平和と退屈な幸福が生まれます。要するに、単に自分一人が家族全員を不快にする以上に家族全員から不快にされているようなもので、全員が自分は正しいと思い、確信を持って繰り返し言います。「自分勝手に生きてはならない。人のことを考えるべきである」。

別の家庭もあります。そこでは各人の身勝手さは神聖で、愛されるべきもので、自分の喜びが家族の邪魔に成るとは誰も決して考えつきません。だが、彼らのことについては話さないことにしましょう。彼らはエゴイストなのですから。

(一九〇七年七月十二日)

六十三 （船に乗り遅れた人）

アジェノールは船に乗り遅れました。それは些細なつまらない偶然が重なったからです。何故彼は出発する時間を支配人やボーイへ念を押して言わなかったのでしょうか。何故普段通りに車に乗らなかったのでしょうか。儉約家ですね。何故妹のアンヌのように汽笛が鳴って船が出発する十五分前に行って待っているように走らなかったのでしょうか。悲しいかな。私たちは信頼されると、まさしく不幸が近付いて来ます。そして事が起こりました。汽笛が二回鳴りました。船長はエンジンを鳴らしました。車輪は水を打ち、小音楽隊が凱旋マーチを演奏しました。そうです、正にその瞬間に、緑色のエプロン姿のボーイが車の中を横切って姿を見せました。そうです、神が許し乗船させました。

しかし、アジェノールはそれが可能ではありませんでした。ボーイに激しく当たる言葉を言ってから、同じ所を行ったり来たりして、眼のある時は水平線に向け、ある時は遠ざかって行く船に向けていました。そして、何時までも彼の眼の前の運命的な瞬間を思い出しています。彼は船を見ると自分の姿を思い出します。音楽を聞く時や船のエンジン音を聞く時も思い出します。そして次に突然に岸を見直しますが、船は去っています。この悪循環では彼は決して出発出来ませんし、出発したくもありません。

それでもアジェノールよ、あなたの運命は出発出来ずに乗り遅れることになっているのですが、この事実を受け入れて、人生のこの一頁を捲らなければなりません。何故ならその必然性の言うことを良く聞き入れなければならないからです。そして、必然性という言葉の意味をよく考えることです。考えなければなりません。というのもあなたは決して意見を求められることはないからです。あなたは何も出来ないからです。あなたが腹を立てる者は、その気の利かない野卑な状況では、別のものを生むに違いないと信じていることです。しかし、そのことは決して意義があることではないのをあなたはよく知っています。ホテルのボーイの歩き振りは風や雨や雪崩のようなもので決まってきました。そして、あなたの忘却でさえ、あなたが見るものに係っており、あなたが見たもの、読んだもの、教育されたもの、あなたの人生の全てに係っているのです。もしもあなたがよく考えたなら、〈火星〉に存在したり、〈北極〉にいるのと同じように、この船に乗ることは不可能であると判断することでしょう。何故なら、不可能には決して段階が無いからです。

しかし、もっと正確に言うなら、あなたはその時刻に出発するという急を要する理由は全然無かったです。あなたは単に散歩がしたかったのです。二時間経てば別の船が出発します。この頃にはあなたは日中の暑さから免れます。太陽が水面に沈むのを眼にします。昔から言われているように、あらゆるものには二つの側面があります。ですから良い側面から出来事を見ることです。あなたの人生は彼処でも此処と同じようにうまくいきます。私は実際の不幸しかあなたに見せませんが、あなたは悲劇的な詩人のような朗読ばかり身に付けて、悪い気分になっているのです。

（一九〇九年九月二四日）

六十四 (情熱の言葉)

実際に自分自身で実行に移そうとすることを私が説明した時、つまり大声を出すだけで意味を考えないで懸命に話をしなければならない時に、或る友人が私に言いました。「それは何時も可能ではない。情熱は雄弁になる。情熱は々刺激的で、毒を含んだ言葉を生む。そのことを考えれば考える程、人は苛々して侮辱される。大変によく考え抜いて悪口を簡潔な言葉で言うのは難しい。それらは思想である。考察である。情熱はそれらを一時的に開示するだけである。私たちは大変に不愉快な考えを知るが、そこまでは秘密にして無関心の儘で済ますことが出来ない」。この友人は激情的な男で、自分の情熱を愛しています。

その場合、私としては彼を動物機械と見做します。純粹な自動運動は、彼方此方で暗示にかけたり眠らせる不幸な女性たちの裡に々見られるように、多くの才能や雄弁を身に付けられるのかと私は自問します。オルゴールが歌曲とか他の歌を奏でるように、不幸な女性たちは喜劇役者とか悲劇役者です。要するに彼女たちは自分が言っていることを決して思考しません。従って私は何時も、私の同胞が怒って認識せずに話していることを考えて選別します。

そして、表に出ない隠れた意見のことを言うと、怒りは突然に解放されて鎮まるとのことです。でも私は余りその意見を信じません。ここでは過去を回顧する想像力を信用してはなりません。「私はそのことを考えていたので、言ったのである」。他人のことに関する思考は、それらが外見の説明でなければならない程、はっきりしない試論や素描でしかなく、それは訂正されて穏やかなものになり、次の瞬間に反対意見によって和らぎます。悪魔です。自分自身のために誰かの精神の肖像画を描くことは小さな仕事ではありません。情熱的な激しい言葉は、複雑な演劇作品の断片を人々の鼻に投げ掛けることしか生みません。そこで嘘つきになります。他人を騙し、自分自身を騙します。何故なら私たちが自分の雄弁によって納得させられることは珍しいことではなく、悪口を言うことによって敬意が払われことがよくあるのと同じであるからです。これらの理由から、不明瞭ではっきりしない叫び声や罵り言葉と全く同じように、よく支配され統制された悪口を、自動お喋りというメカニズムだけのせいにするのが何時も賢明です。

その時、或る人が別のことを私に言いました。「彼は私を軽蔑している。彼は私に恥をかかせたがっていた。彼は私に、言うことを聞かせたがっていた。等々」。私が言う時は、決して自分を騙しません。「彼はそんなに長く考えませんでした。多分、胃の調子が悪かったのです」。要するに、人間の内面は人が信じている程そんなにも決して豊かではありません。言葉がそこに多くのものをつけ加えるのであり、如何なる場合でも大変に下手にそれを表します。そして、心理学者たちは英知からは程遠く、狂人が次のように言う時、彼がよく考えることが出来るものを何時も探し出したがっているのです。「私は死んだ。私は私以外の別人だ。私はバターだ。直ぐに溶けるだろう。私はガラスだ。直ぐに壊れるだろう」。

(一九一三年十一月十二日)

私は、自殺について私たちの記憶に今なお長い間残る人を探します。正義と理性を持ちたいと思う人間は、々他人に攻撃されて敗者となるので、何らかの情念を抑えたようにしか見えないことがあります、そして絶望と戦うことが出来る何らかの思考も同じです。

状況を判断すること、困難な問題を考えること、解答を探すこと、決してその解答を見付けられないこと、何でも決心しないこと、調教される馬のように同じ思考の中を回転し繰り返すこと、そのことだけが苦悩である、とあなたは言います。そして、知性は私たちを刺激するための釘を幾つも持っています。いいえ、全く違います。そこの間違いに陥ることなく、正に始めなければなりません。何も理解しない問題が沢山あります。そして、人は直ぐに諦めます。忠告者や清算人や裁判官は、期待が持てない事柄を大変上手に決着させることが出来ますが、同時に何も決心出来ませんし、眠くなって食欲を失うこともあります。解けない思考の中で私たちを傷付けるものは、解けない思考ではなく、寧ろそれはその思考に対して戦い抵抗する種類のものであります。あるいはもしあなたが望むなら、それはあるが儘のものであって欲しくないという欲望です。情念の活動というものには、取り返しがつかないものに対する抵抗があると私は思います。例えば、もしも誰か男が、愚かであるか虚栄心が強く心が冷たい女に愛の言葉を囁いたとするなら、女は今の儘の自分であって欲しくないと思地を張るようなことです。同様に、破産が避けられないでそのことを人もよく分かっている時、情熱を持っている人は希望を持ちたいと思、別の道へ導く何かの分岐点を見付けるために、いわば同じ道をもう一度やり直す考えを命じます。しかし、その道は作られているのです。人が今いる所が、正にその道です。そして、〈時間〉という道は後へ引き返すことが出来ませんし、同じ道を二度やり直すことも出来ません。ですから私は、強い性格の人は今いる場所を自分自身に自問する人で、事実は何か、正に取り返しが付かないものは何か、と自問して、そこから未来へ向かって出発する人です。しかし、それは簡単なことではなく、些細なことでもそのための訓練をしなければなりません。そうしないと情熱は鉄柵の前で何時間も時間を無駄にしているライオンようになります。恰も、何時も希望を持っているのですが、その道の先端にいても他人の方をよく見ていなかったのです。要するに、この悲しみは何の役にも立たない過去への瞑想から生まれるものであり、大変に有毒でもあります。何故なら、それは私たちを無駄に考えさせたり探させたりするからです。後悔は二度目の誤りである、とスピノザも言っています。

その悲しい男は言います。「しかし、もしも彼がスピノザを読んだとしても、私は大変に悲しく、何時も陽気であることが出来ません。それは私の気分次第であり、疲労や年齢や行う時間に左右されます」。よろしい。そのことをあなたは自分自身に自問して下さい。そのことを真面目に自問して下さい。悲しみを本当の原因へ送り返して下さい。あなたの重苦しい思考は、風に運ばれる雲のように、そこから一掃されるように見えます。大地は悪で一杯ですが、大空は澄み切っているでしょう。何時もそんな風に広がって行きます。あなたは悲しみを体の中へ戻します。あなたの思考は体の中で掃除をしたようにきれいになります。あるいは、もしあなたが望むなら、思考は悲しみに翼を与え、実際は苦悩を滑空させて行くと言うでしょう。それに反して、私は熟考してうまく狙いを付けたとするなら、その翼を折り、最早地の上を這うしかありません。苦悩は何時も私の足元にあり、最早眼の前にありません。勿論、そこにいるのは悪魔ですが、私たちは大変に高い処を飛んでいる苦悩を何時も望んでいます。

(年月日不明)

砲弾を発射した大砲のことを私たちが話していた時、或る人が言いました。「そんな兵器を勇敢に扱う人々をどのように見付けるのですか？ 大砲を発射するために砲尾を閉める時、何故彼らは逃げないのですか？ 人は怒りによって勇敢になり、人間に対峙するのだと理解しますが、ぴかぴかに光っていて無情で無敵の鋼鉄で出来た怪物を目の前にして、何故冷静沈着にしていられるのですか？」。

哲学者は答えました、「理由があるから恐怖を感じるのではありません。そうでなければ生活することが出来なくなります。何故なら、何でも構わずに恐怖を抱いて仕舞えば、何時も余りに多くの理由が必要になるからです。この大砲は崩壊するかもしれない。この大地は振動し始めるかもしれない。アルジェリアのコンスタンチーンヌの大地はよく震えます。私が撫でて可愛がるこの犬も、激しく怒るかもしれませんし、予測出来なかった発作で私に飛び掛かってくるかもしれません。私の連れこの男も、突然に狂い出すかもしれません。以上は理性的な推測ですが、それは私の心臓と胃の具合を全く穏やかにして調子良くしてくれます。風習に慣れて、習慣としていることしか行わなくなると、推測する人にとっては英雄や神人はどうでもよくなります。勿論、自分自身のためでもありません。何故なら勝っても何にもならないからです」。

或る人が言いました、「ですから恐怖は新しい対象から起こります。しかし、それらは恐怖心よりもむしろ好奇心を大変に良く掻き立てます。私は山の中で雷雨に会いました。昼から夜に変わっていきました。私がいた峡谷だけに稲妻が走り、急流が突然に大きくなりました。轟音が耳に響きました。大きな岩が幾つも道に落ちていました。危険は私にとって新しいもので、大変に現実的なものでした。しかし、この荒々しい光景は余りに私の心を支配し、恐ろしくありませんでした。私は寧ろこれらの力あるもの全てに次のように言ったに違いありません。頑張れ！ 殴り合え！ しかし、私は恐怖からの避難場所から大変遠くにいるのです」。

哲学者は答えて言いました、「人は自分自身が注意するかどうかでしか恐怖を抱きません。私はそのことを正確に理解しますが、自分の体の中で感じるものに注意します。恐怖の最初は心配する感情であり、人が抱いている思想というものからは決して生まれませんし、自分の胸中にぼんやりと知覚するものが多いのです。それを怖がらせるものは、私が恐怖の最初に感じるものです。怖がる人間と、物を飲み込んで喉を詰まらせる人間には、決して違いはありません。私たちの注意を外部へ定着させるものは、全てがその恐怖を無くしてくれます。それというのも危険であると知覚することは、恐怖心を大きくすることから大変に遠くに位置しているからであり、反対に追い払うものであるからです。恐怖の最初の恐れはショックは何処からやって来るのでしょうか？ 々それは生き生きとした予期せぬ印象です。々それは突然の恐怖のように、恐怖を模倣することでもあります。何故なら私たちの肉体は、本能的に隣人の模倣をするからです。あくびをする人を見て、自分もあくびをします。ですから集団の中に生まれる恐怖心も、危険そのものとの関係なくなり、狂人となった人間を最も穏やかな心に戻してくれます」。

或る人が言いました、「私は思い出しますが、恐ろしい雷雨を恐ろしいと感じませんでした。その光景の恐怖を美しいと感じ、観客全員が一斉に立ち上がる一晩でした。しかしながら予想に反して、私が立ち上がる以外は何事も私に起きませんでした。私は自分が恐くなりました」。

(一九〇八年八月二一日)

六十七 同情に反対して (CONTRE LA PITI)

同情は人が言うように善意のものかどうか、私には分かりません。明白なことは、同情が公正さの無い軽率な人間の心の裡で野蛮という非情で無感覚なものよりも大切であると思うことです。しかし、不幸な人間に一種の美德や薬となる癒やしを同情が生む、と言うのは言い過ぎであると思います。

同情とは何でしょうか？ それは他人の苦悩や苦痛を無意識的に模倣することです。人があくびをするのを見ると私もあくびをします。人が逃げるのを見ると私も逃げます。従って、人が顔を蒼ざめると私も蒼ざめ、人が泣くのを見ると私も泣き、人が心配で震えるのを見ると私も震えます。それは何に起因するのでしょうか。もしも私たちにとっても可能で確かなことでもある同類としての不幸が外部的原因に起因しているのなら、それを提示するのは単に極めて単純な理性の働きだけではなく、私たちよりも古くからある何か古代からの風習でもあり、人生の源泉を隠しているように見えるものでもあります。外科医が生きた人間の肉体を切るのを私が全く偶然に初めて見た時、私が理解する限りは苦痛よりも好奇心の方が強かったです。それでもやはり二分後には理由を知ることなく額に汗をかき、感情を失って無感動の状態でした。いずれにしてもそれだけその日は、私が我慢強くしていた日以上に注目すべき日で、私は程々に気持ちも強くなって、用意された強心剤を飲んだ観客のようでした。この種の出来事は誰でも身に覚えがあり、明示出来ます。そこから結論付けることが出来るのは、ある意味で人間の苦痛を見ることは、どんな苦痛でも我慢出来るものではありません。

私は単に次の三点に気を付けます。一番目は医者や看護師や軍人や常習犯罪者にも見る事が出来るように、自動的に湧出する同情で弱くなるのが大変に早いものです。その結果これらの職業の人々は耐え難いものとなり、過去を裁き拷問します。そこから理解されることは、正にそこには同情が無くなってきます。もしもその人がもっと優しい人間に戻れるならば、そこではもっと多くの同情が必要であり、少なくともそのことしか考えられません。

二番目に指摘したいのは、同情は個性の存在を仮定するか、あるいは事柄に対しても生き生きとした模倣さえ仮定していることです。それ以外は殆ど言葉だけの同情しか私たちは知りません。盛装して着飾った女性は、女性労働者に決して見向きもしません。

そして、最後の三番目に指摘したいのは、同情は悲しいもので、悲しみは全てが既に病であるということです。つまり、それは鬱病状態であり、失意のものであり、自己放棄です。従って、医者が余り多く同情しないようにするのは良いことです。同情が伝染することによってあなたの同情を理解する者は、このことによって更に悲しませているのです。つまりそのことによって、もっと不幸になるとつけ加えて言いましょう。倫理的苦悩が大きなものの一つに、誰かを同情することがあります。それ故に、公正さや正義が私たちを同情から自由にしましたし、それは良いことです、と私は最近言ったことは、余りに漠然としていて曖昧でした。何故なら危険を秘めた水のように、時間が過ぎて不幸を濾過して見るようになると、私は直ぐにその割れ目を塞ぎ、その間に仕事をして、想像力を使って幾つもの薬を探すからです。それは私の肉体を喜びに変えます。というのもそれは行動することが快いのであり苦しみではないからです。それ故に他人の不幸を考えるためには行動し仕事をしましょう。そして、涙の上に涙を流したりせず、それらの原因のメカニズムを考えて仕事をしましょう。〈友愛〉は微笑するものでなければなりません。

(一九一〇年二月三日)

ヴォルテールの作品の中で、ザディーグ(1)は女王の恋人になりました。彼は自らの苦悩の中にあつて、哲学に救いを求めました。彼はそこに光明を見出しましたが、何ら安堵することはありませんでした。多くの人々が同じことを言っており、苛立って書物を放擲することになります。しかし、一冊の書物に期待するものが余りに多すぎるのではないのでしょうか。一般的な箴言集は、身近な苦しみや間違いには特に有効です。しかし、激しい恋愛感情とか野心、又は欲望に対して箴言集は効き目があるのでしょうか。熱病患者に医者の方箋を読んで聞かせるのと同じではないのでしょうか。

本当の知識を知ることとは、現在の物事の現実をはっきりと認識することです。戦争で名を成した將軍は怖いものは何もなかったのですが、真つ暗な階段で両手を上げている白い亡霊と出会ったために逃げ出して仕舞ったという話があります。その亡霊とは立像だったのです。この男にとって、この状況の中で欠如していたのは、事物をはっきりと明瞭に知覚することでした。最良の箴言集であっても、本当の認識はその端緒にも値しません。目的の代わりに空虚な決まりを意志的に提示する、と禁欲主義者たちは何時も仮定しながら、恐らく彼らの道德上の理念は極端に曲げられておりました。エピクテトスは言いました、「出来事は、あなたが望んでいるように起きると望むのではなくて、あるが儘であることを望まねばならない」。極めてもっともなことです。しかし、私は理由もなく望んだりしません。そして同じ著者が繰り返し私たちに言っていることは、何の役にも立たないことではありません。「各々の事物の本当の本質や必要性を注意して良く考えることである」。例えば、もしも私が事物は実際にあるように存在すべきであると望んだならば、一つの原因が他の結果に至ると認識しなければなりません。そのとき、このメカニズムをはっきりと知覚することによって、それ等が原因となって事物は別物になるかもしれないと望むことは最早ないでしょう。これが対象の本当の認識で、私たちを救ってくれることでしょう。

ザディーグと愛の情熱に話を戻します。情熱というものは、常に亡霊や混乱した観念を糧としています。しかし、私がそのことを繰り返し言ったり、哲学の助言や道德に関する最良の教訓を思い出しても、常に亡霊の処まで行かない訳にはいかず、それが何であるかを見なければなりません。ザディーグの目には、女王は申し分ありませんでした。多分、間違いが隠されているのはそこです。自分の力で事物を正確に見る代わりに、ザディーグの勇氣は空回りしていました。彼自身の外部には、哀れな恋人である自分に投げる眼差しがあります。そして、それは々強い眼差しで、涙のない瞼の動きでしかなく、あるいはもっと生き生きとした明るい光に対する眉の動作か、外部的原因が齎す単なる光と影の機能というものでしかありません。眼球の虹彩の大きさは深い謎を人に与えますが、その大きさは明るさに左右されます。情熱の働きというものは、恐らく偶像崇拜を齎し、対象に対しての想念を仮定します。人間の眼はその良い例です。疲れていて、少し新しすぎるコルセットを付けていたり、窮屈なソックスを履いている女性は、尊大で軽蔑した表情の印象を人に与えます。通常よりも非常に手の込んだ複雑な髪型をしている女性は、本当は少しもおしゃれでないその女性の心を支配して仕舞い、頭や首を動かすのにも窮屈そうで、話していても冷たく取り澄ました堅い話題に向かって仕舞います。不可ないのは理容師なのです。これ等の些細な原因による認識が、ついには人生に耐えられなくなるのだと言ってはなりません。何故なら、人は常に表面的なもので十分やっていけるようになっているのですから、情熱という感情に完全に勝つことを恐れてはなりません。情熱を鎮めることが問題であり、他者を間違つて見たために大変心が戦く或る種の想像力を和らげることで問題なのです。或る歌手は自分の声の振動でガラスのコップを割ることが出来るそうです。しかし、あなたがそのコップの端に指を置いて情熱に勝ったならば、割れることはないのです。

(1) ヴォルテールの短篇『ザディーグ』(一七四七年)の主人公。聡明で誠実なバビロニア人の若者ザディーグは、女性たちや王子たちに次々と失望し、欲望や不正義によって作り直されていく知恵で、絶えず自分の欲望に反対しますが、天使ジェスラッドによって悪も世の中の秩序に必要であると示され、自らも賢くなり幸福を手に入れます。

六十九 酩酊者たち (DES IVROGNES)

私が知り合いになった人たちの人数を数えてみます。そのうちアルコールにやられて馬鹿になった人の数を数えると、かなり沢山の数になります。彼らはそんなにも極端に卑しく、粗野で、汚れて垢だけではないように見えますが、軽蔑されて無視されるようになります。私は々、彼らの性格の特徴を知ることが出来ました、そのときの彼らはむしろアルコール河という土手を滑るように、ゆっくり進み始めていましたが、その中に落ちることはなく、或る種の気高さのようなものを彼らに認めることが出来ました。時にはワインによって赤くなった髭だらけの赤ら顔に、アルコールに気を付けている印象を留めています。

そうです。平凡な人は何時もしらふでいるという慎重な性格が、酩酊という悪徳から身を守っていますが、精神的策略、世の中の評判を恐れること、ついには偽善によっても酩酊から身を守るようになります。何故なら、酩酊者は偽善者になれないからです。酩酊者は寛大です。意地の悪い多くの悪魔たちは、苦い胆汁を浸らせて、ワインを慎重に滴らすように少しずつ飲みますが、それは他人に自分の心を悟られるのを恐れ、他人の眼を欺く方法が取り除かれるのが怖いからです。

それに反して、アルコール中毒になった人は、既に世間を気にしない性格になっていて、確かに或る種の凶太さが大胆さを生んでいます。洞察力も鋭く、雄弁になることが出来た彼は別な風に独創的で、賢明で、哲学的です。これは本当ですから考えてみて下さい。何に対しても驚かないで、その日その日を生きる術を心得ている無頓着なアルコール中毒の人がいますが、彼は理知的教養や美術専門家と正反対の者ではありません。全ては弱さによって台無しになりますが、弱さは多分、穏やかさに変えることになるでしょう。アルコールのグラスが人生を変えることは確かです。

そして、先のアルコール河の下流へ行けば行く程、それだけますます弱さは高貴さの芽を放擲し潰すことになることさえ言えます。実際に素直に生きることが義務のように出来ると感じている人間は、自分自身の絶望に陥り、自分自身に或る種の罰を与えることが多く、全く投げやりな生活を送るようになります。渴いた心は間違いを忘れず。軽率に理解するだけです。高貴な心は考えすぎて、大変に良くその軽率さを悪化させ、余りに辛い人生を送るようになります。アルコールは、その隙を窺っていると言えます。つまりアルコールは細心さに良く効く薬です。人は酔っていることを忘れるから酔うことが出来ます。そのことは、心から考えたことまでも殺して仕舞います。そして、良心の呵責から々、酩酊者が生まれます。かくして自己を高めるために酩酊者は、落ちるとなるとしらふの人よりも下方へ落ちて行きます。効く薬はありません。つまり彼は自分で自分を裁き、自分を軽蔑し、自分で刑を宣告します。彼の傍で人々の意見は今、何を彼に生むのでしょうか。それは社会的階級から脱落した悲劇のようなものです。地獄の底です。如何なる神も悪魔も口出し出来ません。

(一九〇九年十月二六日)

七十 (他人の苦痛)

心理学者が言いました、「困った感情というものがある。人間は喜びなくして人間の悲しみを理解しない。時にはこの同じ喜びが広がって行くが、まるで死刑のようであり、動物たちに対する戦いのようであり、イギリス人のボクサーに対する戦いのようであり、あるいは単純に言えば通りでの出来事のようなものである。あらゆる人が首を長くして血や怪我を見ようとしているし、恐らく何よりも優しい女性たちが気を失っている時は尚更そうです。そのことは私たちが獰猛な動物と左程変わらないことを分かせてくれます」。

この話は馬鹿げています。心理学の検証を行っているのですが、文学の二番煎じでしかありません。獰猛な動物というのは決しておりません。いるのは大変穏やかな動物で、野兎と同じ位に臆病ですが、お腹がすいているから獰猛になるのです。動物たちは、血が滋養になるから血を嘗めます。何故ネロの魂が虎の中にあると仮定するのでしょうか？

そして、何故虎の魂がネロの中にあると仮定するのでしょうか？ この隠喩からは何も解明されていません。しかし、ネロのことは扱って置き、止めて置きましょう。というのは最早、文学でしかないからです。ローマの光景や、剣闘士の戦闘のことは止めて置きましょう。それは最早、小説家たちが望んでいることを生む主題にしかないからです。私は最近、男が汽車に轢かれて死んだ事故を見ました。殆どの人は進んで見ようとしませんでした。進んで見た人々や見ざるを得なかった人々は、顔をゆがめていました。私はそこで同情と恐怖心以外のものには襲われなかったと断言します。私がそこで眼にしたことは、一冊の本に書かれている事よりも価値あるものです。そうです、人間の苦痛というものは、それを見る者を更に深遠な処まで連れて行きます。

それとは反対のことを立証するように見える事実はどうかということ、私が知っているどんなに不都合な誘因になるものを推測しなくても、説明するのは容易です。先ず人は、血や苦痛を見るのに早く慣れることで知られています。屠殺業者や外科医や兵士を見れば分かります。私はイギリスのボクシングを見てそれを体験しました。それは只、私が鍛えられた時です（何故なら最初の情動に私は屈したくなかったからです）。私はそこに喜びを発見していました。

人間というものは見世物の探求者であるとも言えましょう。目新しいものを私たちは両眼で飲みます。そして、もしも見るのが恐ろしくなると、同情や恐怖心という二つの感覚が生まれてきます。そして、好奇心が齎されます。実際に見に行かないで、言っているのを如何に聞けば良いのでしょうか？ それは殆ど人間の能力を超えていますし、人間の中に人間以外のものがあるということであり、恐らく理解したいという欲求です。動物には決して見られないものです。餌以外のものを見詰めること、それは既に学問です。

動物たちを酷く虐める子供たちは苦痛を知らないのであり、権力を愛し、まさしく気が弱いから虐めるのだと私は言います。サディズムの根底はそこにありますし、子供のような不安ではなくて、寧ろ子供っぽさなのです。獣のような人間に関して言うなら、彼らの皮膚は分厚いのです。私たちは自分だけの皮膚や心で多くのことを判断します。人間が他人の苦痛を見て愛するというのは、恥ずべきありふれたことであり、主任司祭の説教に任せなければなりません。

(一九〇九年八月十八日)

七十一 裸婦たちと豚 (LES FEMMES NUES ET LE COCHON)

数々の裸婦展覧会については、理性的な男性というものにとって大変に重要な一つの問題が提示されますが、誰も何も言わないのを私は知っています。古代ローマの将軍・聖アントニウスが、如何にして仲間を仕込んで服従させるのに右に出る者がいないまでになったかを知ることが重要です。

プラトンの見事な比喩を思い出して私は言うのですが、人間は（私が言う人間は男性であり、女性ではありません）、賢者が閉じ込めた袋の中のライオンと豚に似ています。賢者は秩序と平安を愛し、そこに到達するために最善の計画を考えます。ライオンと豚の二人が仲良く眠ればうまくいきます。しかし、彼らが目覚めていれば、袋は活発に激しく動きますし、賢者も同じです。袋は秩序を望みます。そして、ライオンによって導かれて行きます。腹を立ててそこにおります。吠えて囃んでいます。でも彼は平和を望んでいます。そして、豚によって導かれて流れて行きますが、幾つもの小川があるのです！

簡単な方法があります、それは袋を回転させた儘にして置くことです。それは多くの人がやっていることですが、大部分の人はそれを認めません。その時、ライオンと豚は状況によって口論して喧嘩するか、同盟を結びます。単に法の適用や国の平和によって、私たちのライオンは習性として動物園の老ライオンに大変に似ています。大変に力強く吠えますが、誰にも害を加えません。そのような場合は豚が王様です。敢えて観察すると、二本の足を持った豚である人間たちは、たった一つのことしか考えませんし望まないことが大変によく分かります。

このようにして人は諦めて生きていくことが出来ます。しかし、私はその中で決して諦めないことを知りますし、そのような奴隷状態は決して受け入れません。それは豚を躡けるために率直に適用されるものです。そのような者たちが、もし有名な英雄でないとするなら、思いがけない事件のために怪物を調教する者たちは良き政治家として行動するでしょう。彼らは豚に一日分の食料を見積もって与え、そして眠らせて置きます。幸福な者というのは自分の人生を学問、絵画、読書、旅行という食料以外の多くのもので満たされることを知っています。私は通常の仕事を食料のように見積りません。何故なら好きで自分の仕事をやることは、恐らくそれは最高に賢いことであるからですが、極めて稀有なことでもあるからです。

彼の人生はこのようにして調整されますが、それが私たちの知恵であり、英雄ではなく、思いがけないことを恐れます。もしも彼が裸婦画を見たいと思ったなら、裸婦画を売る店へ行きます。裸婦画にはこと欠きません。しかし、もし彼が事物や人物を観察して好奇心を持って立ち去ったとしても、裸婦が通りの隅で待ち伏せして、穏やかな夢や気高いユートピアや豚の中で上位を征服した人間を乱しに来るのは好きではありません。それ故に聖人はいないし、まさしく人は聖人君子ではないのですから、あらゆるショーウィンドーに猥褻な写真が無いように望んで良いし、全ての見世物にヌード女性がいないように望むこともあり得ます。ヘラクレスが怪物たちを探したのは徹底的に打ち負かすためであり、勝利するためです。私は決してそこまで強く言うつもりはありませんが、レルネの沼沢地でヒドラを避けるために、私は迂回することを進んでやることにしています。

(一九〇八年七月三十日)

七十二 (恐怖と宗教)

黒人奴隷のマタベレは侮辱されました。頑健で武装した別の黒人奴隷は彼を「ジャッカルの眼」とか「豚の心臓野郎」と呼んでいました。マタベレは、筵の上で動き回り、その侮辱を予想出来ません。しかしながら、それらの言葉は決して辛辣なものではありません。それでもそれらの言葉は、全ての人を同じように傷付けます。何故ならそれらの言葉が発せられるのは、警官が貧弱で力が無い時であるのを人はよく知っているからです。マタベレは、財産を奪われ、敵に叩かれる自分の姿を見ます。眠っている時も、同じイメージで眼を覚めます。彼は若く頑健ですからこの恐怖が彼を怒らせます。この恐怖が敵を追い払います。彼は敵を探し、驚かして、胸を槍の一突きで大地へ横に倒します。そして、まるでうまく殺さなかったことを恐れているかのように、何回も傷を負わせ、恐ろしい喜びの表情を現します。

「怒ることは愚かである」とあなたは言います。そのことが立証していることは、情熱の働きをあなたは間違っただけで認識していることです。それは慎重な人間にしかないもので、彼は大変に怖がっていた人間で、偉大な外科医にはなれません。

自分の敵を激しく叩いた後に、今度はマタベレが侮辱して言います。「ジャッカルの眼」、「豚の心臓野郎」！ 何故同じ罵詈雑言の言葉なのでしょう？ 何故なら彼はその言葉を思い付いたのであり、他の言葉ではなかったからです。何故、罵詈雑言なのでしょう？ それは敵がうまく死んだことを自分自身に立証するためです。その立証は行われています。マタベレは去って行きます。彼は復讐しました。そのことで分かることは、彼は最早怖がっていないことです。

彼が立ち去る間に死体のイメージは弱められ、他のものが取って代わります。というのもイメージは現実の秩序ではないからです。それらは小鳥のように止まり、旋回して逃げて行きます。マタベレは自分の敵を殺しましたが、その恐怖は殺しませんでした。如何なる事が行われたのでしょうか？ 彼は死体の処へ戻り、頭を切って持って行きます。そんなことをやる目的は、悪いイメージを追い払うためです。

将来、その頭蓋が乾燥すると、マタベレはそれで或る種の盃を作ります。そして、ことある事に彼はそれを使って勝利と身の安全を自分自身で見ることになります。彼が恐怖を感じるや否や、黄色くなったこの骨に触ると、恐怖が無くなります。あなたは馬鹿げた話だと言いますが、実際に彼にとっても同じです。でも人間は自分自身のことをよく知っていませんし、々子供っぽい理屈から、大変に賢明な行動を取ります。この様にして宗教が生まれます。マタベレが大変上手に恐怖を治し、楽しいイメージを引き寄せて留めて置くために、絶対に過たない方法を見出したことは、やはり本当であることに変わりありません。マタベレは悪人で戦争を愛している、とあなたは言います。私は、マタベレは想像力を働かせる人間で平和を愛している、と言います。

(一九〇七年八月二五日)

七十三 (ジジェの指輪)

プラトンが語るところによると、ジジェという人はリディアの羊飼いで、洞窟の中で最高の物を発見しました。彼の掌の方へ指輪の宝石を回すと、指輪を持っている者を見えなくする金の指輪でした。ジジェが見付けたのは偶然で、或る時は思い通りに眼に見え、又或る時は眼に見えなくなるのを確かめました。彼は深く考えることなく自分の能力を認識すると、直ぐに悪事に利用しました。王室へ行き、秘密の部屋へ這入り込み、女王を誘惑し、王を殺し、冠を手に入れました。

この寓話は、人間というものは自分と似た者を害する危険があって、害する時はリスクもなく行えるようになった瞬間からであることを示したいのです。しかし、その結末は私たちに強要することが少ないように見えます。というのも殺人とか他の方法で王になりたい欲望は少しも私に無いとはっきり言えるからです。そして、私にその話を読んで聞かせるあなた自身も、恐らく同じ考えです。単にこの考えや賢明さが、何処から齎されるのかを理解しなければならないだけです。高校生にでも成れば直ぐに、私たちは目上の人能力に一目置く習慣をつけてきました。学校では既に当たり前の考えであり、私はそのことを生徒たちに言いますし、それはどうしようもない力なのです。同盟を結んだりセの生徒たちを私は見ましたが、仲間の一人はそれに対して裏切りました。彼は退学していきました。その権利は彼を守るまでになっていません。この様にして私たちは成長し、彫刻家が粘土を捏ねるように、大人たちを模範として形が作られていきます。

そして、何が出来上がるのでしょうか。外部と同時に内部の規範が見出されます。本当に内面的反抗と、長い時間隠されてきた切望があるのは事実です。しかしながら行為なしで済ませる思考、言葉なしで済ませる思考とは何でしょうか。それは太陽光線のない植物のようなものです。直ぐに色褪せた生気の無い思考になって仕舞います。要するにそれらの行為や言葉は、私たちの望みや希望を育てることになるのです。そして、悪しき習慣が悪徳になるように善き習慣は、故意にやるものであっても高潔な美德になるのです。

ジャン・ジャック・ルソーが偶然の機会から逃れなければならない、と言った理由もそこにあります。例えば利益と友情が衝突するならば、利益よりも友情を好むことが出来る人は少ない、とルソーは言います。ですから賢明な人は決して選択しないで避けることでしょう。要するに自分自身を大いに当てにするのは軽率なのです。法律や慣習を私たちに守らせる有益な奴隷状態を愛さなければなりません。それは私が、最も恐ろしい懲罰を当てにする以上に、警官が犯罪を未然に防いで治安を守るのを当てにする現実があるということです。ロシュフーコーは、ものを書く時に苦いものを欲しがりました。「私たちがやるべき義務の中で怠惰でいる間は、々私たちの美德は全て恥を知るという意識にある」。この思想は別な風に考えれば、むしろ慰めになります。泥棒の仕事は、仕事の中で最も難しいに違いないと思うことは良いことです。もしもジジェの指輪が私に与えられれば、私は直ぐにセーヌ川へ投げに行ったことでしょう。

(一九〇九年一月三一日)

庭師が庭を造ろうとする時、伸び放題の草や野生のスロープラムや撓んだ木苺を根こそぎにして始めます。小鳥たちを逃し、大地に大きな穴を開けて根の後を追ひ、完全に除去して、それらを火に入れて焼き尽くします。庭師が進んで行った跡には四角形が描かれ、そこにキャベツやアーティチョークや薔薇が植えられます。その時彼は只、熊手に凭れて次のように言うだけです、「ほら、きれいな庭でしょう」。

教育者はこの種の庭師です。彼は若者の精神を熊手で掻きならします。彼の理想は自然に生長して生い茂っている植物を引き抜いて、他の場所から持ってきた植物を育てることです。その時、彼は自分の庭を親方に見て貰い、そして褒めて貰います。彼が庭を耕すのは庭のためでなく庭師のためです。庭師は若者たちの精神を委託され、自分の思想の種子をそこに蒔きます。若者たちの精神が庭師のように育つ時、彼は満足します。そこには大変な教養人が生まれ、英知と幸福を手に入れた人になります。

単に彼は事物に辿り着くだけで、庭は直ぐに彼自身に任せられるということです。彼はその時、庭師や園芸に復讐されます。何時も何かをやり残して、古株の根からはしぶとく新芽が出ています。小鳥たちは遠くへ行ったのではありません、野生の種子を持って戻ってきます。それらの物が直ぐに当初の茂みを再生させます。花々や小鳥たちの陽気な巣や飛翔がない訳ではありません。爬虫類もない訳ではありません。野生の粗野な植物たちの侵略に対して畑の中に這入り込まれて苦しめられ、十分成長しない野菜は何になるのでしょうか？

精神の園芸は、より多くの慎重さが求められます。大地が生産するものを見張らなければなりませんし、枝降ろしをしたり、接木したり、引き抜かないようにしなければなりません。その中では別のものを作りたいと思わずに、自然のものを変えるのです。少女は弟に、それは風の仕業であると説明して、次のように言いました。「風が吹いているのよ。何故なら木が動いているから」。教育者なら直ぐにこの野生の植物を引き抜いて火の中へ入れて仕舞うのでしょうか。しかし、幸いなことに今そこには教育者がいることはありません。非常に賢明な父親がいるだけで、彼は子供たちの言葉に耳を傾けて聞き、最初の観念の目覚めに感動していました。それというのも真実は、間違いから生まれることがよくあるに違いないからです。私たちの観念が正しくないのは、最初に見た夢想を見分けようとするかしないかしかないからです。

(一九〇八年二月二八日)

七十五 (理性)

私たちの理性が大した役に立たないことはよく知られています。私たちが抱く観念は宙に浮いて止まっていて、その間に盲人となった情念が全てを導いて行きます。少しは教養ある人間が、決して真実を偽ってはならないとあなたに言って立証します。その後、直ぐに彼は平然と嘘をつきます。慎重な人間が、何故列車が停まるまで降りていけないのかをあなたに説明します。翌日、何かの情念が降りるのを急がせたなら、素早く地面に飛び降りて車輪に轢かれるリスクを負うでしょう。別の人が煙草を沢山吸って胃の調子が悪いと言っています。賢明な思考が駆け巡っている時に、彼は一本の煙草を回転させています。算数でさえ大した役にも立ちません。大変良く数えることを覚えますが、不注意から破産することもあります。従って私たちの知性は、私たちから分離して自分のものではないかのようです。自分の家の上に小さな風車を付ける人々がおります、軽くて小さな風車は大変よく回転しますが、全く何の役にも立ちません。

そのことは私たちが余りに学問的で、余りに高い処で、余りに早く回転して欲しいと熱望しているのです。子供にとって自然である判断に関して、二種類の間違いがあります。余りに期待しすぎることと、余りに恐れすぎることです。欲望する子供は自分の力には限界がないと容易に信じます。恐れる子供は事物には限界がないと容易に信じます。そこからは出発して抜け出なけれななりません。宗教といえるこの場所に科学を据えなければなりません。例えばルソーが言いたいように、凧を作ったりディアボロ（空中独楽）で遊ぶ時にやることとは、結果や成果の際に数えることであり、測ることです。しかし、それが決して全てではありません。人はそれをゲームへ持って行って夢中になり、教えるようになります。殺風景で悲しげな部屋に閉じ籠もって、座った儘にさせて、腕を組んだ儘にさせますが、それは若者たちの情熱を眠らせて弱めるには十分です。その時人は不意を食らって驚く人々の顔を推理し考えます。そして、もしも彼の脳が干涸らびて固くなっていなければ、寓話とかキリスト教の公教要理の一課程を記憶に留めるようにそれを覚えます。続いて彼は自分のゲームに戻ります。彼の人生は思考から乖離します。

少なくとも彼はそこから二つの間違った観念を引き出します。熟考するのは退屈な仕事であるということ、そしてそれは教室の黒板でしか行われなれないということです。算数は決してお金儲けに役立ちませんし、地図は何時も別世界を与える物になります。それ故に教養ある知性の持ち主たちの多くが、判断力に欠けていることが分かります。会計係は主人に関する会計報告を大変立派に作成し、自分のものと同じように作ります。しかし、チョッキの小ポケットに金貨が三枚入っている音を聞くと、最早支出を決裁する計算を行いません。彼は別の方法で計算したいのです。金持ちに成りたいのです。二足す二が五になるのです。反対に、けちんぼは算数を無視して二足す二が三になるのを心配します。

(一九〇七年八月三十日)

七十六 (職人の仕事)

仕事を覚えなければなりません。それは明白です。未熟練労働者は、何でも構わずに持ち上げたり、運んだり、押ししたりするために、自分の筋肉を使うことしか知りませんし、奴隷と同じです。私は女性靴製造店の職人で、熟練の靴修理職人と知り合いになりました。彼は酒が好きで、道楽者で、旅行好きでした。それでも仕事の妨げにはならず、金払いも良かったです。電気技師たちは、まさに難しい仕事を覚えますから権力も持っています。ですから修行期間が組織的に設けられています。しかし、修行と教育を混同しないようにしましょう。

修行は古くからあるもので、奴隷制度と大変よく結びついていました。古代ローマの奴隷たちは、各人が仕事を覚えました。或る者は文法の先生でしたし、別の者は音楽を覚えました。しかし、覚えると言っても色々あります。蜂蜜は六角形の小さな穴を作るのを知っています。庭の蜘蛛は木から木へ糸を張る驚異的な技術者です。ビーバーは大変上手に堤防を作ります。知っているということは、何と不思議なことでしょう！ 知っているのは足の中であり、手の中であって、至る所で知っているのであり、頭の中ではありません。夢遊病を知ることであり、動物を知ることであり、はっきりと分かっていないものを知ることです。

この蜜蜂は知っていることを如何に理解するのでしょうか。けれどもそれは事実です。職人は自分の仕事で最良のものを知っています。建具屋は木のことを知っており、角度を測り、そして糊が冷めているかどうか分かっています。黒人の鍛冶屋は、有名なトレドの剣に勝るとも劣らない剣をあなたに作ってくれます。農民は、空を良く見て雨を予測します。彼は、実践家の仲間の中で学ぶことなどないと思っている教養ある知識人ではありません。それでもやはり色々判断し、比較し、工夫し、批評し、自由な精神を持っている彼は、教養ある人間なのです。彼らはそう思っていません。でも実際にはかれらの仕事は、鎖のようにより多くの教養と繋がっております。

それでは何処から来るのでしょうか。恐らく、何度も同じ行為を繰り返したり、馬鹿になったように或る種の訓練を要求する仕事が齎しますが、それはまるでトラックを回る走者のようです。仕事を教えて貰うためには、信じて従わなければなりません。ピアニストの練習を考えて下さい。彼は練習する時、音楽を愛しているのでしょうか。いいえ、違います。彼は調教されている馬であり、主人に忠実な犬と同じです。彼は行動しますが、思考しません。彼は人々のためになることを知っています。自分のためではありません。松明を点けるように、彼は私を照らしてはっきりと分からせてくれます。照らしてくれるのであって、決して理解するのではありません。人間の松明で、まるでネロを祝宴するかの如くです。

それ故に自分を知ることとは何でしょうか。それは全てを知ることである、と私は答えます。そこからは科学という波の音は聞こえず、全ては言葉なのでしょう。そうではありません。反対に科学は事物を解明し、見失ったもの全てに結びつけます。農民は熟練した仕事によってロゼの葡萄酒を作って用意します。恐らく昆虫も同じです。しかし、ロゼの葡萄酒の作り方を知っていることは、農民がそれを予想することが出来ると理解することです。どのように蒸発させ、熱を伝え、放射させるか、純粋な風味や季節の味を出すこと全てを自分のものにするのです。ロゼの葡萄酒をよく知る者は全てを知っています。只それを知る道が長いのです。多くの時間がかかると農民は言います。蜜蜂も同じことを言うでしょう。しかし、人間が人間に成るのは、じっくりと考えるからです。靴の修理屋は諺に反して実際の皮以上のものにして仕上げなければなりません。あるいはそれが出来ない時は、蜜蜂の巣の中で眠らせて置きましょう。人間の蜂たちを眠らせて置きましょう。熟練した技術者たちは軒をかいて眠っています。そして、ネロのために豪華な軍服を織るのです。

(一九〇九年一月十一日)

七十七 子供たちの庭 (JARDINS D'ENFANTS)

遊びながら教育しようとする方法に私は大変厳しかった、と六歳児前教育を行っている私立学校「子供たちの庭」の友人の一人は判断していました。私は学者ぶるペダンチックな人間でない、と一度ならず私自身を擁護しました。しかし、ペダンチックな人間には多くの種類があります。「子供たちの庭」について読んだものからも私は、危険を覚えました。一般的な講演からも同じ危険を覚えたのは同じで、それは労苦を少しでも要求するものを人は大変に早く諦めて仕舞うことです。そして、それは最早心像や比喻でしかありません。例えば天文学の楽しみには、肉体を動かす楽しみと同じ無頓着さや勝手さがあります。地球と星との距離とか、太陽の大きさを知るために想像力を働かせる努力をするのでしようが、或るものから他のものを上手く見積もる間接的方法で説明することがありません。これらの方法は精神を叩き粉々に押しつぶします。思考することは、決定的影響を持ち支配することです。感嘆することは始まりでしかありません。子供は直ぐに元に戻って仕舞うに違いありません。科学万能主義者たちは、まさに愚か者を産もうとしています。例え大発見をした非凡な人々を尊敬するまでに感動することがあっても、それは何時も物とか人を崇めるしかないのです。それは信じることになります。ミサの時に歌うことです。私は大変明晰な掛け算とか、骨が折れる割り算の計算の方が好きです。子供はその時、二つのものを手に入れることが出来ます。人としての立法者の機能と、事物の重さや長さを測る計量器の機能ですが、これら二つの力は子供自身にとっては同じです。従って子供は礼拝が尊敬へ変化し、自分自身を自慢します。それは平等と権利の精神の始まりです。

もしもあなたが小旗を振るなら、子供は大変に色鮮やかなその小旗を眼で追うでしょう。小旗に注意することばかり私は言います。いいえ、同様に犬は野兎に注意しなくなります。注意することとはあらゆる意味で重視すべきもので、子供時代から抜け出たいという意志であり、一人前の男としての訓練です。子供は二種類に分けられます。映像や画像のイメージの前で意志が弱くなる子供は、一番光るものに従順です。しかし、精神を高めることがありません。その方が楽しいと感じており、その中で野兎に注意しない犬が育ちます。しかし、抽象化というより厳しい命令が、別のやり方で彼を楽しませるのです。それは苦勞して手に入れる喜びです。子供は人間としての仕事を知ります。もう積み木遊びと別世界のことで、奇跡というものが無い世界が広がっています。そこに常識という道具がある時、子供が喜びをむのは真実に間違いありません。しかし積み木を一つにして、辺を二倍にした積み木を積み上げる時が子供は楽しいと思うのは間違っています。子供は辺が一つ分の積み木を何回も何回も探します。というのも本当の仕事を大切に思う気持ちを学んでいるからで、直ぐに快樂を軽蔑するようになります。その様にして子供はより高い喜びを手に入れて成長します。

子供は小さな大人です。子供っぽい人と大人の人は、大変良く見分けられます。中学生になると、神々から上手に離れる能力を持ち、学年が始まると一人ひとり気を付けて見るようになると私は考えます。お遊びはそれなりに楽しめる年齢に譲れば良いのです。子供もそのことは良く承知しています。学習は遊びと対照を成します。何故なら子供は長い時間真剣でいることがないからです。しかし、真剣になるとよく勉強します。如何なる軽薄さもありません。子供の真剣さは尊敬すべきものです。人間の未来そのものです。

(一九一四年一月一六日)

七十八 (最も愚かな本)

愚かな本の中でも最も愚かな本があります。それはユークリッドの有名な幾何学の本です。何故愚かな本なのでしょう。完璧だからです。そこでは真理が薄く一切れずつ切られているからです。その精神には命題の順序や定義の明晰さが除かれていて、自分自身を自問し、懐疑し、探求する機会そのものが無いのです。

人が何かを認識する時、非常に大きな不都合が一つあります。最早、そのことを学んで知ることが出来ないということです。或る命題が証明される時、非常に大きな不都合が一つあります。最早これからそのことを認識することがないということです。

従って、悪い行いをする多くの人の精神の原因となるこれらの良さそうな書物は、盛大に広場で焼いて置いて貰いたかったと私は願います。そうです、若い人々が成長するのは中身が濃い、科学というドロップを嘗めることによってであると私は言いたいのです。そのことは知らぬ間に身に付いた習慣から抜け出させてくれます。

そして、どのようにして幾何学を勉強すれば良いのでしょうか、と彼らは言います。幾何学の解答を見付けた人たちのように勉強したいと言います。しかしそうは言っても先ずは計画を確実に実行するための訓練を行うことです。つまり計画を単純化しながら自然に出来るやり方を手本にすることであり、難しいことをやって実行不可能にすることではありません。

次に彼らは物の長さを比べて学習することです。面積を測るには、或る時は細かく切ってどうにかこうにかそれらを重ねていきます。つまり或る時は均等に小さな正方形を分割し、それらの正方形の数を数えることになります。体積を量るにはもっと単純なやり方があります。円筒の中へ立方体一個分の水を流し、半球体の中へ円筒一個分の水を流します。そして、このようにして体積を量るのに都合の良い方法を手に入れます。その後で改めてその量を吟味確認する方法を行えば、その測量に成功することでしょう。要するにもしも彼らが有能なら、両方のやり方を同じように結びつけてやることになります。

何故ならその様にして物理学は理解するものであるからです。それでは面積や体積という物理学が無いとすれば、幾何学とは何であるのでしょうか。両者は結びついているのです。

(一九〇七年五月二一日)

七十九 蓄音機 (LES PHONOGRAPHERS)

若者たちは、殆ど何時も実に礼儀正しい学者と同じです。彼らは、失礼なことや言うてはならないことがあることを教育されます。若者たちは殆ど半熟卵の食べ方を覚えるようにして、問題を解決することを覚えます。ナイフで切った洋梨をフォークでなくナイフで刺したりしないでし、重さ一キロの羽毛は一キロの鉛よりも重くないとは言わないでし、二つの固体の表面間の摩擦は速度に依存するとは言わないでし。しかし、それらのことに代って、そこには美しい言葉の約束事があります。それと同時に、若者たちは不注意から馬鹿なことを口に出してしまうと、非常に重々しい手で半熟卵を押しつぶしたように顔を赤くする彼らを、あなたは見るでし。

蓄音機には、何よりも素直な性格があり、より良いものを引き留めて置く記憶もあり、同時に軋んだ音や鼻にかかったような音があり、反対に驚くほど人間の声に似ている時もあります。良い蓄音機とは、自然に従順さを身に付け、心に思っていることしか言わない青年期の後、直ぐに形づくられて一度も針を通したことの無いレコード盤を沢山持っているコレクションに恵まれた若者と同じであると言いたいのです。そのような若者は、最も高い身分の生涯が約束されています。彼は、常に人が望んでいる歌を歌い、そして申し分なく歌い、良く出来た一冊の解答集を生きているのです。あらゆるコンサートに際しても、現代の蓄音機は最高の褒美に与ります。そして、単に小さな東屋の前で間違っただけで理工科学校(1)への入学が許可されるのでし、そこは国によって検印された調整済みの蓄音機の店なのです。

しかしながら、世の中には扱いにくい蓄音機が幾つもあります。音が悪く、それ自身が何かを歌っているような蓄音機の音、軋む音、ひゅうひゅうという音、何を言っているのか分からない我慢出来ない音が何時も聞こえてきます。良く聞こうとすると、耳をひどく痛めます。もしも蓄音機の四角形が二つになれば、音が出る表面も二倍になるだろうと或る者はあなたに言います。振り子時計は何故、自分の動きでネジを巻かないのだろうと質問します。別の者は、何も費用をかけないで電気を手に入れるために、機関車の車軸の上に発電機を乗せたいと考えます。ぼんやりとして、はつきりとしぬ思考は人が理解することが出来ず、まして表現することは出来ません。産み出すことは辛い仕事です。

しかし、発明や進歩もその根は同じです。火のないところに煙は立ちません。私は、馬鹿なことを言わない若者は嫌いです。

(一九〇七年十月二二日)

(1) グランド・ゼコールの一つで、理工系の大学として入学が非常に難しく、卒業後は軍人やエリートとしての道を歩みます。アランも入学を希望しましたが、比較的入学しやすい高等師範学校へ変更しました。

八十 蒸気機関車を愛すること (AIMER LES LOCOMOTIVES)

幼児たちは皆、蒸気機関車を貪るように見ます。どの子も皆、ピストンと連結棒に注目します。動力車の車輪を動かす力を想像してみます。人間が作り出すものの中で、最も重要で、最も理解しやすいものの一つである機械を直ぐに探しに行きます。

私が小さかった時、先生に連れられて散歩へ行き、汽車が通過するのを見に行きました。私が最初に理解したのは、転轍器（ポイント）のメカニズムでした。そうこうするうちに私は中学校へ入学しましたが、そこでラテン語とギリシャ語を習いました。私は記憶力が良かったものですから、頭が良いと思われていました。実際の私の知能は学校外でしか訓練していませんでした。何時も機械をいじっていました。思い出といえば、皆この種のものです。

この様な事実は、教育者たちを啓蒙することになるでしょう。読むこと書くことから子供たちに教え、計算することも教えますが、何時も数字を読んだり書くことだけを上手にやらねばなりません。しかし、知性を教育する何かの知識を積極的に知りたいと思うなら、教師たちは機械を分解したり、再び組み立てなければなりません。機械の図面を引いたり、調整したり、作ったりしなければなりません。明晰な思想は全てがそこから齎されます。

物事を練習することとは、精神を明晰にすることではなくて、粉々にして苦しむことです。私は小麦の歴史を調べます。犬とか家鴨（あひる）のことを書いてみます。それらは枝葉末節の逸話でしかなく、全てを理解しても何のこともなく、子供にとっても、何年もの間思考する者にとっても何のこともありません。その逸話が父や母や憲兵や賢い子供やいたずらっ子のことと分かるものであるなら、私は話してみたいと思います。これらの話の中で一番単純なものは、人間の心の仕組そのものを思わせます。そして、この驚異的な焼き串回転機のような心を分解して再び組み立てることを覚えた天才的な人間が欲望や情熱や怒りを解明するのは、何なのでしょう。

子供は何も理解しません。単にあなた方を喜ばせるために、あなた方が言うように言うだけです。キリスト教の公教要理に書いてあるような決まり切った正義や不正について言います。

その時、子供は歴史について何と申すのでしょうか。フランス、イギリス、オーストリアのハプスブルク家、人民、王そして偉大な家臣たちである人物を、何と申すのでしょうか。あなた方は子供たちにルイ十一世の何を理解させるのでしょうか。あなた方は自分自身でも解りません。悲しいかな！ あなた方は管理人の気まぐれな意見によってしかはつきりと解らないのでしょうか。愚かなあなた方は、政治がそれらを教えているのを知らないのです！ 政治とは今もって不可解な学問です。六〇歳になっても解らない深遠な技法があるのです！

反対に、機械においては歯車が静止しているかどうか分かり、それ自体が動いているか否かで、既にことの成り行きが良く理解されます。歯車の一つが他の歯車を押します。一本のロープが滑車を持ち上げます。一本のベルトが車輪に結びついています。振り時計は、透かし彫りの世界のようなものです。その箱はク・タクと音を立てて、小さな物や大きな物の秘密の仕掛けを内蔵しています。子供は段階を踏んで一段ずつ成長し、自分の眼と精神を使って一度に精神を訓練します。しかし、そんなことを考えるのは誰でしょうか。幸いなことに子供はそのことを考えます。或る日、子供が椅子の上によじ登り、振り時計の内側で運命の時をたどたどしく読んで勉強しているのをあなたは見付けることでしょう。

(一九〇八年七月一六日)

(中巻へ続く)

ーノルマンディー人のプロポ (上)

<http://p.booklog.jp/book/49761>

著者：アラン (翻訳：高村昌憲)

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/49761>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/49761>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.